

関西人の関西人による関西人のための鉄道旅行記

柳芽帆奈

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、とある浪速の男子高校生、白庭総一と愉快な仲間達が関西（たまに全国）の旅したり、色々したりする物語である。▼初投稿です。亀更新になりますがよろしくお願ひします。

感想募集中（豆腐メンタルにつき、批判お断り）

基本的にプロット等は書かずに頭に浮かんだものをそのまま書いています。

2021.9.30 四十四話&総文字数77777字達成！

各キャラの詳細設定は活動報告に載せてるので是非見てつてください（ネタバレあり）

目 次

第一章 「大回りにいくヨ！」

第一話 「谷川上り、加古川下り」

第二話 「660円のお布施」

第三話 『』

第四話 「すなばの回転焼」

第二章 「鉄分糖分マシマシな日常」

第五話 「俺の彼女は同業者」

第六話 「You know エタランサンせんべい~~エタラン~~, 12

d o n, t y o u? R i g h t?」

第七話 「香里奈とデート（前編）」

第八話 「香里奈とデート（後編）」

第九話 「同人誌を作ろう！」

第三章 「大回りにいくヨ！ season 2」

第十話 「ええんかな？」

第十一話 「ほんのちよろつと北陸ロマン」

第十二話 「草津よいとこ一度はおいで」

第十三話 「DAN DAN 心が壊れてく」

第四章 「夏や！ コミバの季節や！」

第十四話 「委託販売」

第十五話 「嗚呼、我等愛しの月光よ」

第十六話 「5127—5140」（前編）

第十七話 「俺の彼女は阪神ファン、俺も勿論阪神ファン」（後編）

第十八話 「『』本人登場？」

第五章 「オセ押セハンコ」

第十九話 「ある晴れた日のスタンプラリー」	56
第二十話 「向かうトコ聖地でしょ」	60
第二十一話 「再開したスタンプラリー」	63
第二十二話 「嬉しいんじやないの」	65
第六章「夏や！コミバの季節や！season2」	
第二十二話 「北へ！北へ！」（前編）	68
第二十四話 「阪急城下町、TOYONAKA」（中編）	71
第二十五話 「船場行つたら屑鉄おつてさ」（中編）	74
第二十六話 「とある赤穂の三平ちゃん」（後編）	77
第二十七話 「2・5次元を超えた存在」	81
第二十八話 「いざ行かん、東京へ！」	84
第二十九話 「座れば天国、座れなけりや地獄」	88
第三十話 「ウイーアーストツビングアット・・・」	91
第三十一話 「私のお父さん、実は・・・」	95
第三十二話 「薩埵峠」	
第三十三話 「緑のアイツ」	
第三十四話 「夢の国への道のりはいさきか過酷である」	
第三十五話 「O r a O r a d e S h i t o r i e g u m o」	
第三十六話 「日本一警備の厳重なホテル（多分）」	
第三十七話 「腹を割つて話そう」	
第三十八話 「さあ、本番だ！」	
第三十九話 「3Dアニメなのに一人だけ2D作画のあの人」	

第四十話「フタリのdestination」

第四十一話「とある中央の特別快速」

第四十二話「東京脱出」

第四十三話「白庭総一の決断」

第四十四話「ナイスですねえ！」

第四十五話「大阪よ、私は帰つて來た」

第七章「総一いいeeeeee！今から俺ん部屋でゲームせえへん？」

第四十六話「ゲームしようや」

第四十七話「やっぱり鈍行だけは無理つすよ」

第四十八話「えつ、終わり？」

第八章「鉄分マシマシな日常（改）」

第四十九話「そうだ、乗りバスしよう」

第五十話「青色＆肌色吐息」

第五十一話「始業式」

第九章「指令！アズナスを全店制覇せよ！」

第五十二話「Let's go AS SOON AS！」

第五十三話「Allons··· assnas！」

第五十四話「V·monos··· asanas！」

第五十五話「駆け込み乗車ダメ、ゼッタイ」

第五十六話「ヅカたるもの、ふいーばー！」

第五十七話「カツでも食つて活力つけよう」

第五十八話「緑輝く我が名ぞ···」

第十章「第四十二代鉄道部部長選抜問答」（正式名称）

第五十九話「見下げてごらん」

第六十話「さあ、答えろ」

第六十一話 「部長選抜クイズ（前編）」

第六十二話 「部長選抜クイズ（中編）」

第六十三話 「部長選抜クイズ（後編）」

第六十四話 「脳がおかしくなるバスって聞いたことがありますか？」

第十一章 「巡れ！ケーハンデンシヤ」

第六十五話 「シマへ、生まれたての空気（エア）詰め込んで」

232

第六十六話 「止まることのない快特に乗ろう」

第六十七話 「歩け！天気を味方につけて」

第六十八話 「階段ない、でも諦めない」

第六十九話 「楽しまなくちゃ、まだまだ乗り足りない」

第七十話 「P r e m i u m C a r s」

第七十一話 「（休符）」

第十二章『K O B E でいましよう』

第七十二話 「次元の壁を飛び越えて」

256

253 250 246 242 239 236

227 222 217 213

第一章「大回りにいくヨ！」

第一話「谷川上り、加古川下り」

俺の名前は白庭総一、電車に乗るのが好きな、所謂『乗り鉄』の高校二年生だ。

時刻は朝の6時30分、俺は今西日本一の大ターミナル、JR大阪駅にいる。恐らく、高校生がこんな時間に何をしようとしているのか気になる人がいるだろうから一応説明しておこう。

諸君は『大回り乗車』というものを知っているだろうか？

これは旅規157条第2項の『選択乗車』のルールを応用したもので、簡単に言うと「同じ駅を複数回通つたり、改札を出ない限り、どんな遠回りをしても最短経路で運賃を計算してくれる」ということである。まあ、実

際には細かい決まりがあるのだが、そこは各人で調べて欲しい。

今回は俺の両親が三日前から出張で名古屋へ行き、中学三年になる妹の遙も修学旅行に行つて、俺も学校が創立記念日で休校になっているので懐事情の厳しい俺でも気軽に遠出出来る大回りをしようと計画していたのだ。長丁場になるのでコンビニで食料を調達し、事前に買った切符を改札に投入。いよいよ旅の始まりである。

ちなみに、今回のルートは

①大阪→（福知山線）→谷川→（加古川線）→加古川→（山陽・東海道本線）→立花

②立花→（東海道本線）→新大阪→（梅田貨物・大阪環状線）天王寺→（関西本線）→木津→（片町・JR東西線）→北新地

である。先に加古川線に乗りたかったのでこのルートにしたが、そのまま乗り通すと同じ駅を二回通つてルール違反なので、①と②の二枚の切符に分けて乗ることにする。

「じゃ、ホームにつと……うわ、人多いな（？▽？；）」

朝ラッシュユといふこともあつてか俺が乗る列車が来るホームには多くの乗客がいた。ソーシャルディスタンスなどあつたもんやない

な。

ひつきりなしに来る電車を眺めながら待つていると入線放送が流れ、電車が入つて来る。

2531M、普通篠山口行き。

郊外へ向かう列車とはいえ、乗る人はそれなりにいたが、先頭車両の一番前の座席を確保できてホッとした。

そうこうしていると発車時刻の7時23分になり、電車は低い唸り声を上げながら動き始めた。

『今日もJR西日本をご利用くださいましてありがとうございます。この電車は福知山行きです・・・』

大都会に別れを告げた列車は快足を飛ばして次の塚本駅を通過する。福知山線、通称『JR宝塚線』には朝の数本だけ、普通を名乗りながらこの塚本駅を通過する列車があるのだ。正直言うと、これの一本前の快速に乗つてもよかつたのだが、これに乗りたいがために一本ずらしたのだ。

電車は順調に進み、大阪駅から約1時間20分、篠山口駅に到着した。

「あつ、もう来てる。早よ準備せな」

着いたからといってのんびり出来るわけではない。この駅で福知山行きの電車に乗り継ぐのだが、乗り継ぎ時間が1分しかなく、向かいのホームには大阪からの電車と同じ223系がまさに発車しようとしていた。

急いで荷物を纏めて電車を乗り換える。俺が駆け足で車内に入るとすぐにドアが閉まつた。

ここからは山岳区間。大阪から続いてきた複線もここで終わり、単線になる。

そこから17分揺られて、

『谷川、谷川です。お出口は左側です。加古川線はお乗り換えてす・・・』

8時54分、谷川駅に到着。ここから加古川線という路線に乗り換える。

しかし、この加古川線というのがなかなかの曲者。俺が乗る9時ちょうどの電車を逃すと、次は正午過ぎまで待たなければならない。というか本数自体がアホみたいに少なく、途中の西脇市までは平日でも1日9本という大阪近郊で一番本数が少ない閑散区間なのだ。

篠山口からはドアは半自動なのでボタンを押して降車する。降りて少し歩くと加古川線の125系電車が1両で佇んでいた。

幸い、待ち時間は5分ほどで、電車は少し経つて動き始めた。

ここから一路加古川へ向けて南下を続ける。ちなみに、この区間ではJR西日本が線路保守の負担を軽減するために速度を25km/hに制限する通称『必殺徐行』がみられる。木の間から車窓をゆったりと眺められるので、事が落ち着けば是非行ってみよう。

道中には『日本へそ公園』という面白い駅があつたので、駅名標を撮つたりしていると終点の西脇市駅に到着。ここからは関西でも虫の息状態になつていて生ける伝説、103系5550番台で加古川まで向かう。

西脇市からは乗客も南下することに増えていき、制服姿の高校生が混じり始める。

先程の125系より遙かにうるさい爆音を響かせて電車は進んで行き、加古川には10時31分に着いた。

加古川で時刻表を見てみると、電車は9本から30分間隔まで増えていた。

「ここからはJR神戸線に乗り換えるのだが……
「せや、アレがあつたな……」

第二話 「660円のお布施」

「せや、アレがあるんやつたな・・・」

アレとは一体なんだろうか、それは・・・

「あゝ面倒くさ、改札通らなかん」

改札である。といつても、これで外に出られるわけではない。改札は改札でもこれは中間改札だ。

加古川線は無人駅が多いため、不正乗車されるのを防ぐ為に、のりかえ改札と銘打つて切符をチェックしているのだ。大回り自体は違法行為ではなく、加古川線は大回り可能な路線のため、別に通れない事はない。しかし、この切符を改札機に入れても弾かれてしまう。そりやあ、普通ではあり得ないルートですからね。そんな訳で駅員に事情を説明せねばならないのだ。

「すいません、大回りなんですけど・・・」

「はい、どうぞお通り下さい」

ただ、駅員も分かつているのか切符見せて大回りと言えば通してくれた。そんな訳でこの駅でJR神戸線に乗り換える。103系以上の爆音で通過するスーパーはくとを見送つて次にやつて来たのは、時間に余裕の無い大回りする人や18きつぱーの救世主であり、JR西の生命線、新快速である。

10時37分、加古川を出発。加古川線の高架を左手に見てこの3448M、近江塙津行きに揺られて次に向かうのは新大阪。途中、海岸沿いを走る区間があつたのでそれを見ながら大阪で買ったおにぎりを食べる事にした。うん、美味しい。駅弁は時間と予算の関係で調達出来なかつたが、それでも美味しいことに変わりはない。

電車は特段の遅れもなく進んで行き、新大阪に到着したのは11時34分。ここからは天王寺に向かう。恐らく、ここで大阪から環状線で行かないのか、とツツコむ人もいるであろうが、新大阪から直接天王寺方面に行ける梅田貨物線を忘れていないだろうか？この路線は大阪駅を経由せずに大阪環状線に入れるのでルール的にはセーフである。

ただ、この路線は少し前から特急しか走っていないので、ここからは特急を使う。通常、大回りに使うのは普通乗車券なので特急券さえ買えば特急に乗れるのだ。ただし、特急だとほぼ確実に車内検札が回ってきて、やつてきたのが大回りを知らない車掌だと不正乗車を疑われて説明に追われるかもしれないの、慣れている人でない限り、大回りで特急などにはあまり乗らないほうがいいだろう。

しばらく待ついると入線放送が流れ、俺が乗る「くろしお11号」新宮行きが入ってきた。

普段なかなか特急を使わないでの新鮮だ。

座席に座つてみると自由席とはいえ、今まで座つてきたそれよりはるかに快適な座り心地だ。グリーン車だともつといいのかもしれないが流石に短区間利用でそこまでの特急券は買えない。

そんな事を思つている間に発車時刻になつていたらしく、いつの間にか電車はうめきたエリアに入つていた。そういえば、今度、梅田貨物線を地下化して大阪駅に停まるようになるらしいが、恐らく同じ駅なので今のルートの大回りはできなくなるだろう。

後、朝早くから動き回つていたからなのか、眠くなつてきた。10分ぐらいで降りないといけないのだが、どうにもならないので少し仮眠を取ることにしよう・・・（☒の☒）スヤア：

第三話『』

「（ん・・・？すっかり寝てもうたな）・・・こどく『・・・寺です。お忘れ物ないようご注意下さい。特急くろしお11号、まもなくの発車です』あかん、天王寺ちやうか！？」

放送の最初が聞き取れなかつたが、寺がつく停車駅は天王寺くらいしかないので急いで荷物を纏め始める。なんかデジヤブやな。5時間ぐらい前もこんなんあつた気がする。

・・・結論から言うと、間に合いました。危なかつた・・・何せここを過ぎると次の停車駅は約35km先の日根野。そこまで行くと特急券代が増えて、ルートも和歌山まで南下することになるので、それだけで3時間ぐらい余計にかかる。

「あつ・・・」

しかも、降りるのに手間取つたからか、目的地の方向に向かう電車のドアは既に閉まつていて、動き始めていた。

やつてもうた、そんな事を思いながら天王寺を後にする221系を呆然と眺めていた・・・

が、

「なんや、奈良行きやつたんか」

先頭車両の行き先表示を見てみると『大和路快速 奈良』と書いていた。これだとどのみち間に合つても次の目的地、木津へは乗り換えることになる。

そんな訳でまた15分待ちをくらうのだが、1本で行くのは面白くないので、次の大和路快速の5分前に来る普通列車の王寺行きに途中まで乗ることにする。

というのも、これに充当されているのは既に中央快速線や京阪神緩行線から撤退し、残る車両もあと数年で引退する事が発表された（当時の）省工ネ電車、201系。新しい車両もいいのだが、やっぱり国鉄型にも乗つておきたかった。

やつてきたウグイス色の201系に揺られ、降り立つたのは久宝寺。ここで後から追いついてくる大和路快速で今回の大回り最後の乗り継ぎ地点、木津に向かう。

『ドアが閉まります、ドアが閉まります。ご注意下さい・・・』

電車を降りて辺りを見回す。

中線+αがある広大な敷地、ウグイス色の電車、向かい側のホームには発車待ちの塚口行き区間快速・・・ではなく、『ワンマン 西田原本』の表示を掲げるアイボリーとワインレッドの電車が柵越しに佇んでいた。

駅名標を見ると『木津』ではなく『王寺』。

俺はさつき乗り換えた久宝寺の次の快速停車駅、王寺で降りていた。

え・・・、話が違うと? 散々木津に行くといって何木津どころか奈良より手前で降りてんねんと?

いや、久宝寺出てすぐぐらいまでは木津まで行こうと思つてたの

よ・・・

ただ・・・このまま木津から学研都市線に乗つても、俺の家の最寄駅である都島に着くのは大体3時半ぐらいだつたはず。確か妹の遙が帰つてくるのは6時半なのでまだまだ時間がある。早着して暇を持て余すぐらいなら、ちょっと寄り道しようと思ったのよ。そんな訳でもうちょっと付き合ってくれ。

第四話 「すなばの回転焼」

当初の目的地、木津ではなく王寺に降り立った俺は、跨線橋を渡つてここが始発駅である和歌山線に乗り換える。和歌山線乗り場である4番乗り場には既に乗車する227系の普通高田行きが止まつていて、大和路快速の接続をとつていたため、接続時間は6分とかなり良い乗り換えになつた。

13時9分に電車は王寺を出発。ここでルートを確認しておこう。
「訂正前」天王寺→（関西本線）→木津→（片町・JR東西線）→北新地

「訂正後」天王寺→（関西本線）→王寺→（和歌山線）→高田→（桜井線）→奈良→（関西本線）→木津→（片町・JR東西線）→北新地
・・・かなりややこしくなつてしまつた。これわからん人にはちんぶんかんぶんやろな・・・。

まあ、それは後でどうにかするとして、ここでは特に書くこともないまま高田に着いてしまつた。

ここで次の奈良行きはいつ来るのか電光掲示板を見る。

「・・・は？」

愕然とした。電光掲示板には『普通 奈良 14:20』と書いてある。

現在時刻は13時27分。

「・・・いや、きっと別の乗り場から出てるんやろう。時刻表を・・・」

見てみても次の電車はやつぱり14時20分。高田駅に売店は無い。大回りは同じ駅を二回通れないでの王寺にも戻れない。こんな所で50分待ちをくらうとは。

ハア・・・

その後はスマホを見たりしてなんとか時間を潰して14時20分の奈良行きに乗車。つくづく思い付きで行動するもんじやないと考えた50分であつた。

桜井線には古事記などに登場するヤマトタケルの和歌にも使われた理想郷を表す言葉から、『万葉まほろば線』という愛称がついているが、その名の通り、万葉集にも詠まれた天香久山をはじめとした大和三山があり、長閑な車窓が広がっている。朝に福知山線で見た険しい山とはまた景色が違い、見飽きる事はなかつた。

奈良には15時3分に到着し、奈良線の京都行きの普通に乗り継いで今度こそ木津へ。

そして予定より2時間弱遅れて木津に到着し、いよいよ今回の大回り最後の電車、宝塚行きの快速に乗つて一気に北新地へ！

木津を出た頃にはあまりいなかつた乗客は大阪都心に近づくほど増えていき、ほぼ貸切状態だった俺が乗つている2号車も席が埋まり、16時半に北新地に到着した時には立ち客も多くなつていた。

これで今回の大回りはひとまず終了。切符は駅員さんに無効印を押してもらつて改札を出た。

その後、百貨店で妹の好物の回転焼きを買って都島の我が家へと帰つた。

「ただいま・・・」

「ん、お兄ちゃん、お帰り」

「あれ、お前帰つてたんや。6時半に帰つてくるんやなかつたんか」

「さつき帰つたの。雨で行事が潰れて、帰りの渋滞も無かつたからね」ちなみにこいつは俺の2つ下の妹の白庭遙。今日、三日間の修学旅行から帰ってきたのだ。

「お兄ちゃんこそ、どつか行つてきたの?」

「せや。ついでに阪神で白あんの回転焼きを買つてきたから食うと
き」

「ありがと」

「あと、金渡しとくからなんか適當なん買うといて。もうクタクタや」

「ハア・・・朝から何やつてんの・・・」

呆れ顔の妹を尻目に俺は部屋に行つてそのまま寝ることにした。

今回のルート

第二章 「鉄分糖分マシマシな日常」

第五話 「俺の彼女は同業者」

大回りをした翌日の朝5時半、毎朝この時間に設定しているアラームで起きた俺は布団を片付けて、朝食を作るためにキッチンへ向かう。両親が家にいた時は作つてもらつていたが、今はどちらも出張に行つてしまつたので、俺が朝食を作ることになつていてのだ。

朝食は先に食べてしまつて、遙を起こした後は学校の用意をする。「ほな、いつてくるからな。ええ子にしつくんやで」「ん・・・、いつてらっしゃい」

遙の返事を聞いて家のドアを閉め、学校へ向かう。
これが白庭家の朝の日常である。

俺が通つている私立長堀学園高校には様々な部活があり、同好会まで含めると70以上あると言つていて、野球部や吹奏楽部といったTHE・高校のメジャーな部活から、空耳映画研究会や経営部といったマイナーな部活、挙げ句の果てにはスケット団やSOS団といったどう考へてもアニメに出てきたであろう名前を冠した部活まである。ここで『と言つて』と濁したのは、学園長の意向で部活の設立かつ部費が支給される条件が部員一人以上かつ顧問一人とかなり緩く、さらにレポートをきちんと書いていれば顧問もいらないという超ゆるゆるなもので、実際には自費で活動している非公認の部がもうあると言つて、全生徒の9割がなんらかの部活・同好会に所属しているという調査結果もあるのだ。（生徒会調査記録2017年版よ

り）

そんな部活の中に鉄道部というものがあり、俺はそこに入部している。というかそれ狙いでこここの入試を受けた口もある。

「キーン、コーン、カーン、コーン……」

「……はい、じゃあ委員さん、挨拶よろしく」

「起立、礼」

「「ありがとうございました」」

それを言うと同時に俺を含んだほとんどの生徒が教室を後にする。まあ、大体は部室に行くのだろう。

俺もその大体に漏れず鉄道部の部室へと足を進め……

「総一さん」

る途中で呼び止める声がしたので振り返る。

そこには、腰まで届く長い銀髪にダイヤモンドの様な白銀の瞳、白い肌という人目見れば誰もが惚れてしまう様な美少女の姿があつた。

「お、香里奈か」

「部室行くんですか？一緒に行きましょうよお」

「別にええけど、学校ん中で恋人繫ぎは勘弁してや……。それやる度に怨嗟の視線がひどなるんやから……」

「そんなの気にしたら負けですよお。ただでさえ昨日は会えてないんですけどから」

「うーん……そういうや、昨日は何をしてたんよ」

「まあまあ、それは部室で話しますよ」

どうやら話をしているうちに部室に着いていたらしい。俺たちは部室の中に入つた。

紹介が遅れたが、彼女の名前は朝潮香里奈。俺の彼女兼同業者である。ジャンルは撮り鉄。同じく撮り鉄の父の影響で幼い頃からカメラに触れてきたらしく、全国的な鉄道写真コンテストで最優秀賞を獲るほどの腕前がある。

「はい！ 昨日はこれを撮りに行つてたんですよ」

そんな彼女が一枚の写真を見せてくる。

「ん？ これは・・・!? ?」

その写真には、227系を平べったくした様な前面で、銀色の車体に黄色があしらわれた気動車がどこかの工場内に佇んでいる様子が写されていた。

DEC700形。JR西日本が開発した新型電気気動車である。

そういえば、確か出場は昨日やつたな・・・

「でも、これ近すぎひんか？ 川重の敷地の中からとつた気がするんやけど」

「いえ、超望遠スコープで一番近くのビルから撮影したんですよ」

「・・・」

「どうしました？」

ホンマか？ と問いたい気持ちもあるが、香里奈のカメラの腕前は知っているので外から撮つたんやろうなど納得することにした。

「いや、なんもない。そういうや、他の奴らは？」

「まだ来てないですね。授業が終わつたばかりですし、もうちょっと待つてみますかあ」

「せやな」

第六話「Y o u k n o w ■■■ a n s a n — s e n
b e i ■■■ , d o n , t y o u ? R i g h t
?」

「そういうや、他の奴らは？」

「まだ来てないですね。授業が終わつたばかりですし、もうちょっと待つてみますか」

「せやな」

そんな訳で香里奈と一緒に他の奴らがくるのを待つ。それから15分ぐらい後に・・・

ピコン♪

「あ、総一さん・・・部長以外は今日は来られないって」

香里奈がそう言つてスマホを見せてきたので見てみると、

・鶴見圭人

今日は家の用事があつて・・・すいません。

・平林紗里

ゴメン、バイトがあるから休むね！

と、欠席する旨が部のMINEに挙げられていた。

「ほな、後は・・・「すまん！遅なつた！」やつと来ましたか」

俺の声を遮つて入つてきたのは、顔は外国の血が混じつているような彫りの深い爽やかな顔だが、体格は一般の高校生より大柄で、一瞬、野球部かなんかの運動部のやつが入つてきたのかと勘違いする程の雰囲気を醸し出す男子生徒。

しかし、彼こそがこの鉄道部の部長、岸辺弦一郎その人なのだ。

「おう、今日は確かあんたらだけやつたな」

「はい。あれ？部長、それは？」

見ると部長は何かが入つた袋を持つていた。

「これか？昨日は有馬温泉に行つてきてな、そん時に買った炭酸せんべいや。ちょっと買いすぎてもうたから、欲しいやつにあげよう思つたんやけどみんないらんつて・・・」

と部長は苦笑まじりに言う。ちなみに、炭酸せんべいというのは小麦粉や砂糖でなどで作つた生地と炭酸泉の水で作られる煎餅で、色々な温泉街で売つているのだが、そのうち有馬温泉が総本山と言われていて、サクサクしていて、控えめの甘さもあって俺的には結構好きな部類に入る。だが・・・

「いや、高校生に炭酸せんべいは渡すぎますって。みんな欲しがらないなら俺がもらいましょうか？」

「おっ、ええんか？ほな」スツ

言つて部長が袋を差し出してきたのでそれを受け取る。

「2袋あるな・・・香里奈。どうせやし、1袋いるか？」

「ありがとうございます。じゃあ、もらいますね」ニコツ

「グハッ！」

「そ、総一さん！？」 大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫」

ア、アカン・・・香里奈の笑顔で悶絶してもうた・・・流石俺の彼女、殺傷能力バツグン。

「ハハッ、見せつけてくれるやん。でもなあ、今日は全員おらんから部の鉄道旅行の予定も立てられへんから、今日は解散にするか？」

「そうですね」

そんな訳で部長が来てからものの十分程で今日の部活は終了してしまつた。

それから少し経つて、俺と香里奈は学校を出て、一緒に電車に乗っていた。

「なあ香里奈、今度の日曜、デートせえへんか？」

「デ、デートですか！」／＼／＼

「そ。最近はお互い予定が合わへんかったからな。たまにはつて
「も、もちろんです！あなたと行くならどこまでも！」

「なんか、プロポーズみたいなつてんな・・・まあ、地下鉄でブラブラ
しようや」

そんな事を言つていると、

『なんば、なんばです。御堂筋線、四つ橋線、JR線、南海線、阪神線
はお乗り換えです・・・』

「あ、降りないと」

アナウンスを聞いて香里奈はおもむろに立ち上がる。彼女の家は
阪急沿線にあるのでここで降りて御堂筋線に乗り換えるのだ。

「それじゃあ、楽しみにしてますね」

「ん、ほな」

第七話 「香里奈とデート（前編）」

デート当日の日曜日、俺は集合場所の地下鉄梅田駅にいた。時刻は6時半を少し過ぎたところ。

MINEを見てみると、香里奈はもうすぐ来るらしい。すると、

「總一さん」

「おっ、こつちこつち」

阪急百貨店の方から何やら大きなカメラバッグを肩にかけた香里奈が手を振つてこつちに向かつて歩いてきた。

「おはようございます。じゃ、早速行きましょうか」

「せやな、ハイこれ。切符代は払わんでええよ」

言つて彼女に一枚の磁気カードを差し出す。エンジョイエコカード。Osaka Metroと大阪シティバスほぼ全線が乗り放題になるめっちゃお得な乗車券である。

「いいんですか？」

「まあ、600円やしな」

「それじゃあ、お言葉に甘えますね」//

「ほな、行くか」

そう言つて俺たちはカードを改札機に通し、ホームに向かう。

俺たちが最初に着いたのは新大阪駅。

言わずと知れた新幹線のターミナル駅だが、俺たちは別に新幹線とかに乗るわけではない。

やつて来たのは駅の両側を挟んで走る新御堂筋の陸橋。何故こんなところに来たかは撮り鉄なら知つているかもしねない。「着きましたね！」

こここの陸橋からは新大阪駅の西側に広がる網干総合車両所宮原支所、通称『宮原操車場』が眼下に広がっていて、この陸橋にはフェンスが立てられているのだが、一部の場所は柵状になつていて、トレインビューには絶好の場所なのである。

「さあ、この子の出番です」

待つてましたと言わんばかりに香里奈がカメラバッグを開けて見るからにカメラを取り出す。

「今日はえらい高そうなカメラやな・・・」

「ふふん、前の誕生日の時に買つてもらつたので、D6っていうんです」

D6。鉄道部で同人誌を作つた時にその名前を聞いたことがあつたな。確か、最近出たプロ用の最高モデルのカメラやつたはず・・・

「あ、あれですか！」

彼女の視線の先には多数の221系が。225系100番代の追加投入でJR京都線や神戸線を追われた221系が、転属先の奈良へ向かう前にここで疎開留置をしているのだ。

勿論、疎開留置なのでこの時期しか見られず、架線のない路線に電車が何編成も留まっているのもあまり見られる光景ではないだろう。カシヤカシヤ

俺が出庫していく電車を見ている間、香里奈は真剣そのものの表情で写真を撮り続け、撮り終わつたのは10分ぐらい経つた後だつた。

「ふう、なかなかいいのが撮れました」「終わつたか。ぼちぼち行くか」

「はい！」

「次はどこに行きましょう?」

「ほな、野田阪神行こう。ちょっと見てみたい所あるから」

新大阪からは再び御堂筋線で南下、なんばまで行き千日前線に乗り換える。

やつて来たのは野田阪神行き。これで終点まで向かう。

「総一さん、野田阪神に何か珍しいものがあるんですか?」

「まあ、そのうち分かるわ」

「?、なんでしょう?」

そんなやりとりをして数分、終点の二駅前の阿波座を出た後にこんなアナウンスが流れる。

『・・・この電車は野田阪神駅2番線ホームに到着します。野田阪神駅2番線ホームにはエスカレーターおよびエレベーターがございませんのでご利用されるお客様は次の電車にお乗り換えください・・・』
「もしかして、これですか?」

「そうそう」

俺がまず行きたかった場所、それは野田阪神の2番線ホームである。

野田阪神のホームは2面あるが、発着する電車のほとんどは片方の1番線に入り、もう一つのホーム、2番線は到着後、すぐに森ノ宮の車庫に入る朝ラッシュの後や、夜のごく一部の電車、それとイベント用にしか使われない。

いわば『幻のホーム』なのだ。

さらに・・・

『野田阪神、野田阪神、終点です・・・』

「あれ、ホームドアがない」

このホームにはホームドアがないのだ。千日前線はホームドアが全駅に設置されていて、この駅にも1番線にはホームドアがあるのだが、本数も少なく、回送しか来ない2番線には設置されていないのだ。「いつも使ってる路線なのにこれは知りませんでした。まだまだ勉強しないといけませんね」

「せやな。ほな、次んどこ行こか」

第八話 「香里奈とデート（後編）」

「次はどこに行くんですか？」

野田阪神に着いてからは、特にみるところもなかつたので俺達は折り返しの電車を待つていた。

「せやな・・・ほな難波行くか？ここまであんまり高校生のデートらしいところ行つてるし」

普通の高校生のカツプルは宮原の操車場とか野田阪神の幻のホームとか絶対行かへんからな。いくらお互いに鉄だとしてもコレはちよつとまずい。

「あはは・・・そういうえばそうでしたね」

香里奈も今気づいたかの如く、苦笑混じりに返してくる。

「でも、こういうデートも好きですよ。何てつたつてあなたとこうやって趣味を共有するのが一番楽しいんですから」

「香里奈・・・」

ああもう、そんな笑顔で言われたらもつと好きになつてまう・・・

「ふふつ、いま『もつと好きになつてまう』って考えてましたね？」

どうやらお見通しだつた様だ。

「分かつてたみたいやな。ほな、一旦阪神で梅田まで行つてそつからバスで行くか？地下の景色ばっかりやつたら流石に見飽きてくるやろ」

「そうですね」

そんな訳で梅田に向かうことにした。

阪神梅田から通路を歩いて俺と香里奈がいるのは大阪駅前バスターミナル。12の乗り場から大阪市内各方面へ21路線（IKEAのシャトルバスを含めると22路線）が伸びる市内屈指の規模を誇るバスターミナルである。

因みにその横の国道176号線の高架下からは阪急バスが申し訳

程度に園田への路線を走らせて いるがこれはまた別の話。

「これに乗るんですか？」

香里奈が指差しているのは『88 天保山』と表示された白を基調に黄緑色の帯が巻き付いたバス。

「そう。野田から直接地下鉄で行つても良いんやけど、早よ着いてまうし、バスで行つたら丁度ええかなつて」

「なるほど。じゃあ、乗りますようか」

乗り込むと二人がけシートが丁度空いていたのでそこに座る事にした。

しばらく待つて いるとバスが動き出す。休日の昼間ということあってかなり利用客は多く、途中でも乗つてきたりしたので車内は満杯になつていた。

しかし、天保山まで後10分ほどというところで・・・

「s、総一さん・・・ちよつと気持ち悪くなつてきました・・・」（
π、）ウグウ

「えつー！後10分やで、我慢出来るか？」

「10分なら何とか・・・」ウウツ

「頼むで・・・ここで reverse は洒落にならんからな・・・」

その後はグロッキー状態の香里奈を介抱して休ませた後、天保山周辺を散策。ファミレスで昼ごはんを食べた後は、再び乗りつぶしを開。

今は大阪市を南北に貫く谷町線の終点、八尾南駅というところにいる。

「八尾南つて噂には聞いてましたけどこっちから出ると本当に何もないんですね・・・」

この八尾南駅には二つ出口があり、表には立派な駅ビルが立つて いるものの、改札以外は乗務員関係の施設が占めており、線路の終端の方角を見つめると生駒山地がくつきりと見え、もう一つの出口から出ると、そこには枯れ草が広がつた空き地だけが広がっているという大

阪メトロの駅だとは思えないほど長閑な駅になつてゐる。まあ、この駅自体が車庫の用地を確保するために作られた様なものなので仕方ないのではあるが。

そろそろ帰ろうかと駅にもどつて、やつて来た電車に乗つて帰途につく。

「でも、今日は楽しかつたです。まあ、途中吐きそうにはなりましたけど」

「ハハっ、でもそれもまた思い出に残つたんぢやうんか？また今度デートしようや」

「はいっ！いつでも呼んでください」

「ほな、またな」

「さよなら」

第九話 「同人誌を作ろう！」

7月7日といえば仕事そっちのけでイチャイチャした末に天の川で隔てられたバカッフルが一年に一度会うことが許された所謂『七夕』の日として有名であろう。

そんな日に俺達鉄道部の面子は部室に全員集合していた。

その訳とは・・・

「ほな、始めるか」

そう言つて部長が目の前のホワイトボードにこんな事を書く。

『コミバに向けて！同人誌 記事アイデア』

「ま、今年も恒例の夏の同人誌を書く訳なんやけど、なんか案あるか？」

「せ、先輩・・・同人誌つて？」

そう質問するのは顔が少し前髪で隠れているいかにもオタク感を匂わす男子生徒。

鶴見圭人。今年、東京から転校してきた一学年下の模型鉄である。「ん？ああそうか、圭人は今年からやつたから知らんかつたんやな。俺達、長堀学園高校鉄道部は毎年夏に鉄道をテーマにした同人誌を行するんよ」

「エツ・・・そなんですか」

「せや」

さらにと部長が続け、

「この同人誌はコミックバザールっていう同人誌の即売会に出すんよ。それを売つて部費の足しにすんねん」

「す、すごい・・・」

因みに、コミックバザールというのは、夏休み真っ只中の8月中旬に東京ビッグサイトで開催される国内最大規模の同人誌即売会のこと。今年で開催30年を迎えるが、俺たちの高校のサークルは24年間連続で出展していて、界隈では重鎮とも呼ばれている。まあ、甲子園の鉄道部版みたいなものである。

「だから、毎年この時期になつたらね、こうやってアイデアを出し合う

んだよ☆」

そう返す少しギャルっぽい女子生徒の名前は、平林紗里。彼女も二年生でその見た目に反して、車両の研究が趣味の車両鉄である。「そんなわけで何かアイデアあつたら手エ挙げてくれ」

「はい」

「朝潮か。言うてみ」

「えっとですね・・・」

そこから一人づつアイデアを出し、纏めるのは去年居なかつた鶴見以外はみんな事前に考えてきたのもあつてだいたい1時間程度で終わつた。

それが終わると今度は担当を決める。今年はそれぞれの好きなジャンルが分かれたので一人一つの記事を制作することになった。ちなみに鶴見は部長と一緒にフォローに回るらしい。

ちなみに部長は『世界の鉄道ファン』を、紗里は『阪急7000系のリニューアルがヤバすぎる件について』を、圭人は部長と一緒に『鉄道模型虎の巻』を、香里奈は表紙とそれぞれの記事で使う写真の撮影を担当する。

勿論、俺にも担当が割り当てられているが、それについてはまた話そう。

「おし！ほな割当ても決まつたことやし、今日はこれで解散や。各自しつかり頑張つてや」

こうして今日の会議はお開きに。あしたから鉄道部の戦いが始まることだ。

「ふう、今年も楽しみやな」

「はい！明日から頑張つていきましょうね！」

「もう、あたしも忘れないでよお」

「さ、紗里。どないしたんや」

「ええ？あたしも一緒に帰ろっかなって」

そんなこと言われても香里奈がなんと言うかな・・・と思いながら彼女の方を振り返ると

「フフフフフ・・・ダメですよ？一緒に帰つてもいいのはこの私だけなんですから」

何と言うことでしょう。コトノハ様の「ごとく俺の彼女様がハイラ
イトがない目で微笑んでいるではありませんか。

「いいじやん、ケチイ」(・。・)ムー

こんなやりとりをしながら帰途についていくのだった。

第三章 「大回りにいくヨ！　Season2

第十話 「ええんかな？」

日曜日、俺の姿はJR大阪駅にあつた。

時刻は朝の6時半。今日は同人誌の実地取材をするために大回りをするのだ。ちなみに、俺の彼女の香里奈は今日は同じ部員の紗里と一緒に阪急電車の取材をしていて今日はいない。

・・・あと、この小説のタイトルが『関西人の関西人による関西人のための鉄道旅行記』なのに実際に旅行するのは五話ぶりというなにが鉄道旅行記やとツツコまれかねないのだが、それはそれである。

ここで俺の同人誌の担当記事を言つておこう。今回担当するのは『敦賀大回りってやつてええんか？』という記事。

実は本来、敦賀まで大回り乗車で行くことは、禁止されている。敦賀から日本海沿岸を通つて舞鶴方面へ抜ける小浜線や舞鶴線、というかそもそも北陸本線も近江塩津から敦賀までの区間が大阪近郊区間外で大回りのルールである『大都市近郊区間内でルートを完結させること』が出来ないからだ。

こんなことを言つているとダメそうに聞こえるが、実はある方法を使えば出来んこともないのだ。

こんな事ばっかり言つてると飽きると思うので早速行こう。
まず、みどりの窓口に向かう。

「すいません、サンダーバードの特急券を買いたいんですけど」「かしこまりました。どの区間をご利用になりますか？」

応対してくれたのは40代ぐらいの男性社員。この後で面倒なことになるかもしないので若い社員さんはマシだ。

「大阪から敦賀まで自由席でお願いします。あと・・・」

「どうかなさいました？」

「実は大回りで使うんですけど、この場合つて特例でOKになるんですかね」

そう伝えると、その社員さんは腕組みをして考え始める。

「・・・そういう事ですか。ちょっと確認してもよろしいでしょか」

そう言つてカウンターの電話でどこかに問い合わせる。ただ、OKつてもわないと企画倒れになるので非常に困る。

そう考えていると社員さんが電話を切つてこちらの方に向き直る。

「お客様、今確認をしたところなんですが一応大丈夫なようです」

「そうですか。じゃあ、お願ひします」

それを聞いて社員さんは機器を操作し始める。

30秒ぐらい経つた後に、発券機から特急券と大阪天満宮までの普通乗車券が出て来て、俺は代金の2040円と引き換えに切符を受け取つて窓口を後にした。

さて、ここで何故敦賀大回りは出来るのか理由を説明しておこう。

JRには『分岐駅通過の特例』という規定がある。文章で説明すると非常に長つたらしく、面倒くさいので挿絵で説明しよう。

こんなケースの様に一定の条件を満たせば区間外乗車が認められるのだが、今回やるのは分岐駅である近江塩津を通過するサンダーバードを使えば敦賀へ大回り出来るのかということ。実際には特例適用派と適用外派に分かれしていて、JRの社員の中でも意見が分かれ程複雑な問題なので、もしやってみようと思つてもダメと言われたら素直に引き下がる、仮にいいと言われても何人か駅員に確認をとつてやつたほうがいい。後で不正乗車と言われて増運賃をとられてもこちらは責任は負われへんで。

一通り説明したんで腹が減ってきたがサンダーバードに車内販売は無いので駅ナカのコンビニで弁当を買ってから11番ホームに向かうことにしよう。

第十一話「ほんのちよろつと北陸口マン」

コンビニで弁当を調達してやつて来たのは大阪駅11番線ホーム。サンダーバードやひだ、サンライズ出雲・瀬戸などの長距離列車が使うホームで他のホームとは違い、独特の旅情が漂っている。

なお、今回の旅程は大回りをする関係で

大阪→（東海道本線・湖西線 特急使用）→敦賀→（北陸本線）米原→（東海道本線）→草津→（草津線）→柘植→（関西本線）→久宝寺→（おおさか東線）→放出→（片町線・JR東西線）→大阪天満宮となつている。

到着時刻になるまでは改札の連絡橋からトレインビューなどをし
て時間を潰し、到着時刻になる。

『まもなく7時ちょうど発、特急サンダーバード3号金沢行きが到着
します・・・』

やつて来たのは9両貫通の683系4000番代。写真を何枚か
撮った後、自由席のある6両目に乗り込む。

以前乗車したくろしおとはまた違う座り心地のいい座席で、ここに
いかにこの特急をJR西が重視しているかがよくわかる。

列車は定刻通り7時に大阪駅を出発し、車内に流れる『北陸口マン』
のチャイムを聞きながら大阪にしばしの別れを告げる。

『車掌はJR西日本の西条と司馬が終点、金沢までご案内致します。
次は高槻に止まります』新大阪を出てしばらくすると、車内改札をし
に車掌さんがやってきた。なんかえらい感じのシスコン最強魔法
師に似たような車掌さんである。

「失礼します。切符を拝見致します」

「ああ、どうぞ」

「・・・ん？天満宮・・・」

「ああ、今、大回りしてるんです」
切符を見た時に車掌さんが首を傾げていたのでそう説明すると、

「大回り・・・成程。分かりました」

事情を把握したらしい車掌さんは検札印を押してそのまま行つてしまつた。どうやらOKだつたらしい。

その後は高槻、京都の順に停車し、湖西線に入る。湖西線は各駅停車や新快速では乗つたことがあるが特急で乗つたことは一度もなく、弁当を食べながら琵琶湖を眺めるという普段とはまた違う体験をすることができた。

そうこうしているうちに列車は琵琶湖に別れを告げていよいよ北陸と関西を分かつ野坂山地へ。湖西線と北陸本線の分岐駅である近江塙津を通過し、いよいよ通常の大回りでは行くことが出来ない福井県へ突入する。

敦賀に到着したのは8時55分。

もう少し写真を撮ろうと思ったがサンダーバードの停車時間は1分程度ですぐに発車してしまつた。

駅のホームの向こう側には今まさに建設中の北陸新幹線の敦賀駅が見えている。新幹線が敦賀まで延びた時は全てのサンダーバードが敦賀止まりになり、ここから福井方面も第三セクターに移管すると

いう。俺個人としては青春18きっぷが使えなくなるかも知れない
ので少し寂しい。

ここからは普通に鈍行を乗り継ぐのだが、次の新快速は9時23分。
しかも自分の経験から近江塩津でも20分ぐらい待つ事はわかつていた。
時刻表を見てみると12分に名古屋行きのしらさぎ4号があるとの事。
ただ、さすがにこれ以上お布施を払うわけにもいかないので、20分×2待ちをくらうこととした。

「まあ、写真撮らなあかんし丁度ええか」

そして折り返しが来るまでの間、香里奈から借りた一眼レフで写真を撮つていくのだった。

今回はキリがええからここまでにしておこう。

第十二話 「草津よいとこ一度はおいで」

敦賀駅の構内で写真を何枚か撮つて次に乗つたのは9時23分の大坂行きの新快速。ただし、こいつは湖西線経由なので乗るのは二駅先の近江塩津まで。途中で通るのは撮影スポットとして有名な新疋田のループ。往路のサンダーバードはループ線を通らないので上り下りとはまた違う景色を楽しむことができる。

近江塩津に着いたのは9時40分。降りたのは俺を含めて二人だけだったので12個あるドアもほとんど開かず、そのまま電車は湖西線へ向けて行つてしまつた。

反対側の乗り場には既にこれから草津までお世話になる新快速米原経由姫路行きが停まつていた。

近江塩津駅はその名の通りの湖西線と湖東を走る北陸本線が合流する駅、と言つてしまえば聞こえは良いのだが、実際に昼間に止まる列車は一時間に二本の新快速だけ。しかも北、東、西を山に囲まれ、列車待ちの間は猛スピードで通過する特急や貨物列車が通過するのを指をくわえて見るかスマホ触るかしかない、でも分岐点なので無駄に駅の規模が大きい。

そんな駅で27分待ち。

「…いや、まだ冷房の効いた電車の中でゆっくり待てるだけマシか」

そんなこと呟きながら西の方を見て見ると何やら新しいホームっぽいのが作られていた。

そう言えばなんかブログで見たことがあるな・・・

まだまだ時間があつて暇だったのでそのホームの写真や発車直前でやつて来た滋賀県内では珍しい521系の普通を撮つて、10時7分に近江塙津を出発。

出てからしばらくは山がちな区間を走るがしばらくすると景色がひらけてきて、余呉、木ノ本、高月と各駅に停車していき、米原には10時42分に到着。ここで8両増結 and 大垣から関ヶ原を越えてきた東海道線の普通を待つため8分待ち。

もう18きつぶのシーズンに入つていて、ギリギリ夏休みのシーズンではないので混雑はみられないがそれでもそれなりの人は乗つてきた。

米原発車時点ではガラツガラの12両だがこれが本領発揮をする前に俺は草津で降りてしまう。彦根を過ぎた今も俺が乗つている車両は他に二人ぐらいしかいない。

そこからは一駅二駅ごとに停車していき、左手に高架の線路が近づいてくるといよいよ草津駅は目前。俺も降りる支度をする。

11時22分、この駅で下車し、京阪神へと向かっていく新快速を見送ると抹茶色のアレが停まっている草津線のホームに向けて足を進める。

草津駅のホームは三面あつて、このうちの二面は琵琶湖線が使い、東口側の一面に草津線ホームがある。まあ、朝と夕方に運転される京都からの直通は琵琶湖線のホームを使うんやけど。

その草津線の切り欠きホームには現在、絶賛網干から奈良に転属中の221系電車（こいつは京都所属）が停まっている。しかし、この電車は途中の貴生川までしか行かないでこれは見送る。時刻表を見てみると、次の目的に向かう柘植行きは57分発と敦賀、近江塩津に続き、草津でも數十分の電車待ちをくらう。三連チヤンは運悪すぎちやうか？

しかし、近江塩津の様に何もないわけではないのでさつきよりはマシになつた氣がする。

まあ、これもまた鉄道旅の醍醐味。気長に待つとしますか。

第十二話 「DAN DAN 心が壊れてく」

貴生川行きを見送つてからしばらく、俺が乗車する柘植行きの電車が入線してきた。

その電車は抹茶色の113系。しかし、内装はさつきまで乗つていた223系とそつくりで、ここでも古い車両を末長く大切に使いましょう計画の片鱗を見ることができる。

発車時刻になるにつれて人も増えてきて11時57分に定刻通りに草津を発車。先程、琵琶湖線から見上げた線路を今度は琵琶湖線を眼下に分岐。ここからはひたすらに滋賀県を南下していく。

草津を出てすぐは住宅街が広がつていたが、すぐに田園風景へと変化し、三雲駅を過ぎる頃にはすっかり山に囲まれてしまつた。

ただ、すぐに景色はひらけ、右手から近江鉄道線が合流して、さつき見送つた電車の終点、貴生川に到着。ここから電車の本数は半減して一時間に一本になる。

草津からの乗客も3分の2ぐらい降りて、まばらになる。

そこからは残つた乗客も降りていつて柘植の二駅手前、甲賀駅を出た頃には乗つっていた車両には俺一人しかいなくなつていた。

そのまま電車は柘植駅に到着し、俺は関西本線に乗り換えるはづだつたのだが・・・

『えー、お客様にお知らせとお詫びを申し上げます・・・ただいま、関西本線は月ヶ瀬口駅での信号トラブルの影響により、亀山～加茂間で運転を見合わせております。運転再開の目処は立つております
ん・・・』

「ハハハ・・・」

その関西本線は絶賛運転見合わせ中だつた。

運行状況をみてみると、二十分ぐらい前から見合させてているとい
う。

というか、またか。敦賀、近江塩津、草津で待つたと思つたら今度は柘植で待つとは・・・俺は何かに取り憑かれてるんやろうか・・・「しつかし、どうするかな・・・目処が立たないって」

しかし、放送を聞いてみるとどうやら加茂までは代行バスが出るらしい。

信号機のトラブルだといつ運転が再開するかわからないし、代行輸送は切符も普通に使えるのでとりあえずそれに乗ることにする。

しかし、次の加茂行きのバスは12時42分が出たばかりで、次は約50分後の13時42分。

・・・ああ、また待たなあかん！何遍待たすんや！

・・・待ち時間の間は昼食などをとつて、バスに乗るために駅員に切符を見せて改札を出る。すると既に観光タイプの代行バス（西日本JRバスのやつ）が駅舎の前で待ち構えていた。

ただ、乗つてしまふとずっと電車に乗つてきて疲れてしまつ

たからなのか眠ってしまい、次に目覚めたのは木津川町に入つてからだつた。

そういうしているうちに、8分遅れて14時43分に終点の加茂に到着。ここから大阪方面は電車が動いているのでそれに乗つて今度は久宝寺を目指す。

『発車しまーす・・・』プシュー

はは、目指すんやけどなあ・・・

ハア・・・

「だああああああああ！また30分待ちかああああ○%×\$☆#▲！※

！」（心の中）

ハア・・・ハア・・・もう嫌・・・、いくら待ち時間は醍醐味でもこんだけうまくいかへんと流石に堪える・・・

「もう木津から帰ろう・・・」

流石にこれ以上待つということになると俺の精神が崩壊しかねない（もうしかけてる）ので久宝寺経由ではなく、木津から直接帰ることにした。

結局、15時9分まで待つてようやく加茂を出発。一駅先の木津で降りて時刻表を見る。

また20分ぐらい待つか……ハハハハハハハハハハハハ。もう心ノ中で笑いが止まラン。……

なんやかんやありマシて結局大阪天満宮の駅二着いたノハ、4時半手前。

・・・アラ？ なんカ口調オカシなつてる・・・ガキゴキグチュベキツ

・・・これでよし。

駅のトイレの中でお調を直してから、切符を改札機に投入して、これまで今回の大回りは終了。まあ、代行輸送を使つたり、精神崩壊したり、同人誌のネタにするには豊富やつたからええとするか。

第四章 「夏や！コミバの季節や！」

第十四話 「委託販売」

「へえ、そんな事があつたんだねえ」

「せやねん。いくらなんでも乗り換えた駅全部で30分以上待ちつて……」

週明けの12日、今日からの短縮授業を終えて鉄道部の部室にやつてきた俺は、先に来ていた香里奈と紗里に昼飯を食べながら愚痴をこぼしていた。

「あはは……でも同人誌のネタにはなつたんじゃないですか」

香里奈は苦笑いしながらも、やつれた俺の頭を優しくなでてくれる。

「見たか！これが俺の嫁（未来形）や！」

「全部聞こえてるよ！」

「はわわ・・・／＼／＼

どうやら全部聞こえていたらしい。香里奈は顔を真っ赤にして俯いている。まあ、可愛い。

「まあ、香里奈の言う通り、ネタは豊富やからな」

なんてことを駄弁つていると、

「おい、誰かおるか！」

「あつ、部長。どないしたんですか」

「いやあ、漫研からな頼みがあるつて」

「「??」」

「ああ、どうぞ。入つて入つて」

そう部長が言つたのを合図に入つてきたのは、長い黒髪に海色の瞳、青いヘアバンドというどこぞの艦隊擬人化ゲームの任務娘を彷彿とさせる女子生徒。

「あ、鉄道部の皆さん、はじめまして。私、漫画研究部の部長をやつてます千代崎澄香と言います」

「ああ、鉄道部の白庭総一です」

「同じく、朝潮香里奈です」

「はいっ、平林紗里でーす！」

「通り自己紹介を済ませて、千代崎さんには俺たちが使っていた机に座つてもらう。

「それで、千代崎さん。わざわざこんなところまでどないしたんですか？」

「実は・・・」

彼女の話によると、今年の漫画研究部は初めて俺たちが出展するのと同じコミバに出展するはずだったのだが、出展スペースの取得に落選してしまい、どうしようかと思っていたところ、鉄道部がコミバに出ている事を思い出してここに来たということだという。

「ということは委託販売をして欲しいということですか」

俺の問いに千代崎さんははいとうなづく。

ちなみに、委託販売というのはこのようにスペース取得に落選したり、遠方で来られないサークルが別のサークルに頼んで同人誌やグッズの頒布を行つてもらうことで、彼女はそれをして欲しいという。

「こちらとしても、是非と言いたいんやけど・・・ちょっと顧問と話し合わせてください」

そう言つて部長がおもむろに立ち上がり、何処かへと向かう。それから数分後、部長が戻つて来る。

「えー、OK出ました」

「い、いいんですか!?」？ ありがとうございます！」

よほど嬉しかったのか、千代崎さんは泣いて感謝を伝えてきた。

「でも、大丈夫なんですか？いろいろ持つてく荷物とか増えそうで・・・」

「大丈夫大丈夫。印刷は現地でやつて、そこで製本してもらえばええから」

「では、原稿が完成したらSDカードで渡しますね」

それからスケジュールや手はずを伝えて今回はお開きということに。千代崎さんも「本当にありがとうございました」と一礼して部室を後にした。

「いやあ、委託販売か

「今年はいろいろ仕事が盛り沢山になりそうですね、部長」

「ああっ！」

突然、香里奈が何かを思い出したかのように顔を青くして、叫び出す。

「えつ、どないしたんや朝潮！」

「どつたの香里奈!!? Gでもでた?」

「ち、違います・・・確かに去年、コミバへは電車で行つたはずですよ
ね・・・」

そう言うのでそれがどないかしたんやと返そうとしたが、ここで
ハツと気づく。

今ここにいる全員も香里奈が言いたいことを察したのだろう。みんな「そうだつた」という表情をしている。

そう言えばアレは・・・もうないんやつたな。

第十五話 「嗚呼、我等愛しの月光よ」

「ああっ！」

「えつ、どないしたんや朝潮！」

「どつたの香里奈!?」 Gでもでた？」

三者面談で来られない鶴見を除いた鉄道部四人で同人誌の編集作業をしていたところ、突然香里奈が叫びだしたので、何事かと視線を集め。

「ち、違います……確かに去年、コミバへは電車で行つたはずですよね……」

「それがどん……！」

「總一、お前も分かつたか」

「はい。多分、香里奈は……」

「〔ムーンライトのこと（言うてますよね）（言つてんねん）（言つてるんじやないの？）〕」

どうやら全員同じ事を考えていたようだ。

ちなみに、ムーンライトとはJRの夜行快速列車のことで、これまで鉄道部は、コミバに向かう際は偉大な先輩たちも含めてそのうちの一つ、東京→大垣間を走つていた『ムーンライトながら』を利用していた。まあ、理由はこの列車は『快速』なので、指定席券を用意出来れば皆様ご存知、青春18きっぷだけでも移動可能なので、臨時化されてもかなり重宝されていた。

しかし、使用車両だった185系の廃車や、乗務員の不足とかいう名目で2021年春のダイヤ改正、実質的には2020年の冬の運行をもつてムーンライトながらは廃止されてしまった。

「そういうえば、もうなかつたな……」

「でも、どうするんですか？ムーンライトがダメなら、新幹線か飛行機しか……」

「あかん、新幹線は高い、飛行機は俺が乗られへん

「ええ、そーくん、飛行機無理なの？」

その通り、俺は飛行機だけはどうも無理だ。飛行機といえば墜ちる

イメージばかりが先行して、世界一安全な乗り物と分かつてはいるものの、どうしてもこれだけは・・・

「うーん、ほな後は東京まで鈍行で行くしか・・・」

「部長? 今私の耳が狂つていなければ、東京まで鈍行まで行くなんて事が聞こえた気がしたんですけど」

「フツ、残念やな! 一字一句そのまんまや!」

部長が放った宣告に、香里奈の表情はただでさえ肌が白っぽいのに、どんどん青白くなっていく。

「でも、これ本気で言うてるんやで。この時期やつたらさつきの二つはめっちゃ高なるからな」

その点は部長の言う通りである。飛行機や新幹線は確かに速いが、俺たちが行くこの時期は繁忙期にあたるため、値段が跳ね上がる。夜行バスもまた然り。その点だと、5枚綴りで通年で12050円(2021年現在)の18きっぷに軍配が上るのは言うまでもない。まあ、快適かどうかは置いといて。

「それに、鉄道部が鉄道以外で行くなんて本末転倒やろ?」

「クツ・・・ここにきて正論をぶつけてきましたね。ですが・・・」
相当嫌なのか、香里奈は食い下がつてくる。

「総一、頼む」

「はあ、分かりました。なあ、香里奈。皆で鈍行で東京に行くつてやつた事ないからちよつと面白そうやん。やつてみいひん?」

「はい! 総一さんと行けるなら!」

「W o w すごい変わりようだねえ」

まあ、何はどうもあれ香里奈もOKしたので、後は鶴見だけ。鶴見は今日はこられないので、明日でも聞いておこう。

まあ、たかが10時間ぐらいやし大丈夫やろ。

第十六話 「5127—5140」（前編）

それから皆で改めて話し合い、結局、東京へは鈍行乗り継ぎで向かうことになつたが、決めた時にいなかつた鶴見にMINEで聞いて見たところ、「…頑張ってみます」と許諾をもらえた。大丈夫なんやろうか。アイツ細いから体力なさそうに見えるし、下手したら豊橋ぐらいで倒れそう…。

まあ、それはそれで置いておいて、今日は終業式。7月中は講習があるので実際はまだ学校には行くのだが、ひとまずこれで一区切りがつく。

講堂に行つて校長先生のありがたいとは誰も思わなさそうな講話をなどを聞いた後は、教室に戻つて通知表をもらう。ちなみに俺はそれなりに成績が良かつた。

「えー、ほなこれでHR終わります。全員起立」ガタタツ「礼」「「「ありがとうございます」といいました」」

号令を言い終わるとクラスの奴らのほとんどが教室を出ていく。俺もその一人だが、今日は執筆作業もひと段落つきかけているので、今日の部活は休みにして、半日ではあるが、どこかに出かけることにする。香里奈も、もうちょっとで終わるらしいので誘つてみよう。隣のクラスも今HRが終わつたようで続々と生徒が出てくる。その中から俺の彼女を見つけ出し、声をかける。

「おーい、香里奈」

「あつ、総一さん。どうしたんですか？」

こちらに気付いて振り返つてくる。ああ、今日も可愛い。

「いや、俺らどつちも作業もひと段落ついてきたやん。今日くらいは部活休んでどつか行こうかなつて…」

「じゃあ、私の家に行きませんか？」

「香里奈の家？」

確かに付き合いはじめてから一回も行つたことないな…阪急沿

線というのは知つてるけど、どんな家なんやろう。

「ほな、そこ行こか」

「じゃあ、早速行きましょう！」

そう言うと香里奈は俺の手を繋いで先導するかのように歩き出す。無論、恋人繫ぎで。

部活のグループMINEで断りを入れて、学校からは地下鉄を乗り継いで梅田まで向かい、そこから少し歩いて長いエスカレーターを上がるとそこは阪急大阪梅田駅3階改札口。43台もの自動改札機に10面9線のプラットホームを望む、日本一の私鉄ターミナルの日本一の改札口である。

先を歩く香里奈は改札を通つて、そのうちの真ん中のホーム、宝塚線4・5号線ホームに向かう。

「へえ、香里奈の家つて宝塚沿線なんや」

「はい、そこの急行で・・・おつ、これ結構珍しい車両ですよ！」

そこにいたのは宝塚線最古参、今月で誕生から半世紀を迎える5100系、そのうちの唯一の阪急線内のリニューアル車である5128F。

「おお、5100系やん、しかもリニューアル。確かに普段は平日しか走っていないらしいから土曜に見るんは珍しいけど」

「そうなんですよ。このいつ見ても古さを感じさせないのがいいんですよね」

「でも、これ普通やで」

そう、この電車は普通なので、豊中から先だと向かい側の急行（ち

なみに車両は9007F）が先に着くのだが・・・

「別に大丈夫ですよ。私の家は雲雀にありますし、何よりこの車両にはアレがありますから」

そう言いながら香里奈は4両目と5両目の間、丁度中間に封じ込められている運転室を指差す。成程、あそこに乗りたいんやな。

「ほな、乗ろか」

そうして、俺たちは普通に普通に乗り込む。

第十七話 「俺の彼女は阪神ファン、俺も勿論阪神ファン」（後編）

「やっぱり良いですね、こうやつて二人きりで一緒にいられるのは」「せやな。まあ、会話は筒抜けやけどなあ」

今、俺達がいるのは電車の中間運転台の個室スペース。座席はないものの、半ば二人きりの空間を楽しめ、しかもこのスペースは6000系以降の車両では扉をつけられて立ち入り出来ないようになつてるので、こうやって入れるのは珍しく、つい入つてしまつた。

「それに、なんか車掌になれた気分でちよつと楽しい」

「確かに！」

そんな会話をしていると高級感ある発車メロディーが流れ、ゆっくりと電車が動き出す。

十三までは皆さんお馴染み三複線を走る。最初は神戸線の普通しか並走していなかつたが、淀川の鉄橋あたりで京都線の準急も追いついて綺麗に並走して十三に到着。そこからは北上し、住宅街をクネクネと大カーブも交えて走つていく。これこそ、宝塚線が遅い遅いと言われる所以である。梅田を出た時には結構いた乗客も、急行が以北で各駅に停まる豊中から少なくなつて、一駅前の川西能勢口を出た時は能勢電乗り換えの乗客も吐き出して、ほぼ貸切状態になつて、『雲雀丘花屋敷』、雲雀丘花屋敷。この電車は当駅止まりです。お忘れ物のないように

お降り下さい・・・』

そのまま終点の雲雀丘花屋敷に到着。ここが香里奈の家の最寄り駅だという。

「ここからはちょっと歩きますよ」

そこからは大体10分ぐらい電柱のない閑静な道を歩いて香里奈の家の前に着く。

「はい、ここが私の家です」

「うわあ・・・えらいデカいな」

彼女の家は俺が住んでる家の3、4倍ぐらいのデカさの家で、目の前にはトタン屋根の物置、見上げてみると屋上も・・・あれ? そう言えばこの家どつかで見たような・・・

「実はこれでも中ぐらいの方なんですけどね・・・さあ、入りましょうか」

言つて香里奈は打ちっぱなしのコンクリートの門をくぐつて家へと入つていったので俺もそれに続く。

中に入るとクーラーがガンガン効いていて、リビングに通される。「ただいま」

リビングには先に入つた香里奈ともう一人、少し容貌が香里奈に似ている50代ぐらいの男性が座つていた。

「・・・あれ? その子はもしかして・・・」

「うん、この人が彼氏の白庭総一さん」

「は、はじめまして、娘さんとお付き合いさせてもらつてます、白庭総一言います」

「うむ、良い挨拶や。私は朝潮金次、君のことは香里奈から聞いてるよ。まあ、自分の家やと思つてゆつくりしてつてくれ。堅いのは性に合わへんのよ」

「分かりました、ほなトイレ行つてきますね」

（数分後）

トイレを済ませた俺はリビングに戻つてくると、

ワアアアアア!

何やら物凄い歓声が聞こえてくる。何やろうかと先に進んで見てみると・・・

「突き進め さあ行（ゆ）こう 勝利に向かつて 振り抜け 輝け
打て 輝義（てるよし）かつとばせー てーる!!?!」

そこにはテレビの前で阪神タイガースのユニフォームを着て、カン
フーバットを叩きながら、応援歌を完璧に歌う父娘の姿があつた。
「おお、総一君。丁度いい場面なんだよ！一緒に見ないか!?？」

「そうですよ、一緒に見ましよう」

俺に気付いて誘つてくる二人。ここで無下に断るものあれなので、
観戦することにする。まあ、俺もこの二人ほどではないが一介の虎
党、少し見たくなってきたのだ。

場面は六回の裏。1対1で2アウト2塁でバッターは今季ドラフ
ト1位入団の新人、間藤輝義。

カウントはツーツー。

「いけいけ！」

ピッチャーノ須賀がボールを投げ、間藤は・・・
カキイイイイイイイン！

快音とともにそれを打ち返す。打球はグングンとレフトへ行き・：

『入つたあああああっ！5番間藤が魅せました！今季16号は勝ち越し
ツーランホームラン！』

「「やつたあああああ！」」

見事、スタンドイン。俺たちは歓喜のあまり抱き合つた。

あの後、試合は完全にタイガースの流れになり、試合に勝利。その後には時間はもう5時を回っていた。

「あ、すいません。これで帰りますね」

「別に夕飯ぐらい食べていいんじゃないんだぞ?」

「いえ、妹に夕飯を作らないといけないので」

「そうか。じゃあ、いつ来ても構わんからな。また来てくれ」

「はい」

言つて俺は家を出ようとするが、

「あ、総一さん」

香里奈に呼び止められたので振り返ると・・・

チュツ♡

「!?!?」

「また来週♪」

ああもう、可愛いなあ！

結局俺は顔を赤らめたまま帰ることになり、妹にめっちゃいじられた。やれやれ・・・

第十八話 「ゞ」本人登場？』

香里奈の家を訪れてから飛んで飛んで回つて回つて、7月30日。いよいよ今日で登校期間が終わり、2週間の夏休みに突入する。

そしてチマチマ書き上げていた同人誌の執筆作業も終わり、後はこのUSBを部長に渡せば、ミツシヨンコンプリートである。

「部長！原稿出来ました！」

「おお、出来たか。お疲れさん。ほな、そこ置いといてくれ」

言つて部長がもうすでに何個かUSBが入つてている箱を指差してきたのでそこに入れて、一番窓際の席につく。

「総一、改めてお疲れさん。それで早速なんだが、全員揃つたところやし、相談がある」

「何ですか、ぶちよー。急に改まつて」

「め、珍しいですね・・・」

「いやあ、少し前に漫研の委託販売を受けたやろ」

「そう言えばそうですね」

確かに、半月ぐらい前に漫画研究部の部長が直々にコミバのスペースに落選したので委託販売をしてほしいと頼みに来てたな（詳しくは、第十四話を c h e c k i t o u t !）。その時はOKと言つたけど、どうなつてるんやろう。

「俺達は鉄道の同人誌、あつちはラブコメのアンソロジー漫画。要は後者のお客さんが集まりづらいねん」

「なるほど・・・そこがありましたね」

「そこでだ!!」

突然、部長が机をバンと叩いて立ち上がり、声高に叫ぶ。

「コスプレをしようと思う！」

「「「コスプレ!?」」「」」

その提案を聞いて、俺を含めた鉄道部員は全員驚いていた。

「そう、実はさつき千代崎さんから同人誌の見本をもらつたんよ」

そう言つて、机の中央に一冊の本を置く。これが件の同人誌だといふ。

「どれどれ……」

その内容は、とある高校生の男女五人組が「ch・teau」というバンドを組んで青春するストーリーで、甘酸っぱい恋愛もあれば、笑いもあるなど全体的に明るく仕上がっている。

「……結構、面白い……」

「せやろう、こんだけおもろいのに買つてもらえないのは意味がない。そこでコスプレしようつてことよ」

「でも、何のコスプレをするんですか？」

「それやねん。誰か、アニメのキャラに似てるて言われたことない？」

「いやいや、そんな都合よう見つかる訳ない「あ、それなら言われたことあるよ」あるん!?」

手を挙げたのは紗里だった。

「なんかね、『Bang Dream!』の今井リサに似てるって。気になつて声真似てみたらすっごく似てて、我ながら腰抜けちゃつたよお。それに、ベースもちょっとやつたことあるし」

「ちょっと真似してくれませんか?」

「もちろん。コホン……はいっ。Roseliaのベース、今井リサですっ☆みんな「リサ」って呼んでねー?」

「……めっちゃ似てる。っていうか本人ですか?」

試しに元の紹介動画と見比べてもほとんど同じで紗里以外の全員が絶句した。

「でも、香里奈もこの白金燐子つてキャラの声に似てない?」

「確かに……」

「よし、決まりやな!早速、漫研に話つけてくるわ!衣装代はあつちで持つてくれるらしいからな!」

「エエツ、私、まだ何も言つてませんよおおおお!」

「別にいいじやーん、やつてみようよ~」

そう言つて、香里奈は部長を、紗里は香里奈を追いかけて部室を飛び出していった。

……

「……明日、どつか行こう」

「た、大変ですね・・・」

第五章 「オセ押セハンコ」

第十九話 「ある晴れた日のスタンプラリー」

あの後、香里奈は抵抗したものの、部長と漫研の勢いに押されて結局、コスプレを承諾したらしい。香里奈のコスプレ・・・垂涎ものやな。

話はそれたが、今日からは約2週間の夏休み。昨日からどこに行こうかホームページを見て考えているとあるものを見つけた。

「ほう、ペンギンのキャンペーンか・・・」

阪急電鉄と某何でも肯定するペンギンのキャラクターとのコラボキャンペーンである。

実は第四話以来長い間登場していない俺の妹、遙がこのキャラクターが大好きなのだ。なんでも、可愛いルックスはもちろん、全肯定してくれる感激屋であるところとか、端的に言うと全部が魅力だとか。さらに、今日、7月31日は遙の誕生日なのだ。

しかも、スタンプラリーに参加することで限定の景品が貰えるとか。そう言うことで今日は阪急電車に乗ることにしよう。

いつもの様に朝食を作つてやつて、身支度をする。

「遙ー。ご飯やで」

「ん・・・お兄ちゃん、今日もどつかに行くの?」

「せやねん、買いたいものがあるからな」

「・・・そう。行つてらっしゃい」

最寄りの都島から谷町線に揺られて三駅、東梅田に着いた俺は長い地下街を歩いて阪急の大坂梅田駅に向かう。やつて来たのは先週、香里奈の家に行つた時と同じ3階改札口。その改札口の一番左側にあるごあんないカウンターでキャラクターがプリントされた限定の一日乗車券を購入し、スタンプ台紙をもらう。ちなみに、通年販売している「阪急阪神1dayバス」の方が阪神電車にも乗れて、値段もそつちの方が100円安かつたのだが、今回はあえて限定乗車券を選んだ。

最初に乗るのは9時30分発の特急新開地行き、車両はなんと7027Fだつた。

実はこの7027は阪急でも2両しかいないゾロ目車両『7777』を連結している。ちなみに、2月までは京都線に『3333』があつたが廃車されてしまった。

勿論それに乗らないはずがなく、車番を撮つてから車内へ。休日の朝とはいえ、始発から乗客は多く、既に座席はほとんどが埋まつていた。

仕方ないので、立つて乗ることにする。

電車は定刻通りに梅田を出発し、お決まりの併走レースを得て十三に到着。9時半出走のこのレースは宝塚行きの急行（6000F）が勝利した。

その後は115kmの快速を飛ばしてノンストップで流れていく景色を見て、西宮北口に到着。

「広いな・・・どこにあんねやろ」

着いてからは駅の構内をぐるぐると回る羽目になつたがなんとか見つけてスタンプを押す。

デザインは制帽をかぶつた赤いキャラクターが『君は』と書かれたプラカードを掲げていると言うものだった。

最初は何やこれと思ったが、恐らく続々物になつてゐるやろうと考
えて次なる目的地、螢池に向けて今津線のホームに足を運ぶ。

・・・はづだつたのだが、普通に進めると3時間もあれば終わつてしまふと気づき、折角高い一日乗車券を買つたので元ぐらいいはどうと思つて予定を変更。

次の神戸三宮行きの普通が目の前で出て行つてしまつたので、10時3分発の特急で隣の夙川へ行き、そこから出る支線の甲陽線に小走りで乗り換える。というのも接続時間が2分しかなく、階段までが結構遠いのだ。

甲陽線といえば、某世界を大いに盛り上げようとした女子高生のラ
イトノベルの聖地として有名。俺は阪急つながりでそれを知つて、一
気に最新刊まで読破するほどハマつてしまつた。

まだまだ時間はあるので折角なら聖地巡礼をしようということ
で、甲陽線ホームに向かうと、既に次の甲陽園行きが停まつていた。

「車番は・・・ああ、惜しい」

編成は6021F。アニメに出て来たのは6020Fだつたので
ちよつと残念だがまあ、仕方ない。

すぐにベルが鳴つて電車は出発し、ものの5分ほどで終点の甲陽園

に着いた。

第二十話 「向かうトコ聖地でしょ」

『本日も阪急電車をご利用いただきましてありがとうございました。甲陽園、甲陽園、終点です。お降りの際、お忘れ物のない様ご注意ください・・・』

甲陽線の終点、甲陽園駅には10時12分に到着。

電車を降りて目に入るのは凝ったデザインの屋根と広いホーム。そして、その柵の向こう側を見るともう一つ古ぼけたホームがある。「そういえば、もともとこの2面2線やつたな・・・」

今はただの1面1線（西側の使つてないホームを入れたら+1面）の棒線駅になつた甲陽園駅、実は最近までは2面2線あつたのだが、2008年に起こつた脱線事故の後にホームが1面埋められて今は1面しか使われていないという。ちなみにアニメは脱線事故の前に制作させていたので2面2線のままだつた。あ、でもスピノフは棒線化した後のホームになつてたな。

改札を出るとそこは高級住宅街らしく閑静な雰囲気が広がつている。

向かうのは主人公たちが通う高校のモデルとなつた場所。何と徒歩30分もかかるらしい。

こんな炎天下で歩くんはやつてられんと駅前にあつた阪神のバス停に向かうが、ここから西へ向かう路線はないことが分かり、絶望。でも、どうしても行きたいので我慢して歩くことに。

「ぬわあああああん疲れたもおおおおおおん」

はい、30分経ちました。今、高校への坂を絶賛登坂中です。こんな汚い言葉が出るぐらいやからもう疲労度はお分かりでしょう。

「ああ、主人公が使つてたチャリが羨ましい・・・」

そんな事を呟いていると目の前に大きい建物が見えてくる。あれこそが主人公達の高校のモデル『兵庫県立西宮北高校』である。

振り返るとそこには眼下に広がる絶景、西宮の街はおろか、遙か彼方には日本一の高さを誇るあべのハルカスが見えるほどの見晴らしの良さ。

この絶景を見るだけでここまで苦労が無駄ではなくなった気がして喜びもひとしお。

ただ、この場所はエライ夜景が綺麗らしいので今度来る時は夜にいこう。

記念写真を何枚か撮つてここを後にする。ちなみにもう30分炎天下の中を歩く気はさらさら無かつたので坂から少し歩いて越木岩神社北というバス停へ。このバス停、元は夙川短大前といつてここのはぐくにあつた短大の門も聖地の一つである。門自体は今でも残つていたので写真を撮つてバスを待つ。

数分待つとしてバスがやつて来る。どうやら普通のバスではなく、さくらやまなみバスという西宮市のコミュニティバスがやって来た様だ。

それに揺られて10分ほどで夙川に到着。もう電車が出てしまつたので次の普通に乗つて西北へ戻る。ここからようやくスタンプラリーの再開だ。

・・・そういうえばこの話、スタンプラリーの話やつたな。

ここからは今津線で宝塚線へ。頭端式の7号線で待ち構えていたのは50年選手となつた5000系。まだ特急が来る前だつたので車内は余裕があつた。

その後特急の接続を受けて立客も出てきて、11時48分に出発。途中、阪神競馬場や高低差のある住宅街、武庫川橋梁からの景色を望んで宝塚駅に到着。

所要時間は約15分。特に奇跡とかは起こらなかつた。

第二十一話 「再開したスタンプラリー」

宝塚に着いたのは12時2分。ここからは阪急創業の路線、宝塚本線で今度こそ螢池に向かう。接近放送が流れてやつて来たのは新型車両の1013F。

恐らく編成番号が出た時点でピンときた人がいるかもしれないが、こいつは例のキャンペーンのラッピングを纏つていている編成。両先頭車はフルラッピングでラインカラーのオレンジを基調に、宝塚大劇場や阪急うめだ本店、箕面大滝といった宝塚沿線の名所とキャラクターがあしらわれている。しかも、LEDの種別行先表示にもキャラクターが映っているという力の入れよう。1000系の側面の表示器は種別行先一体型やから雲雀とか天六とか絶対キツキツになるやんな・・・

前面展望を見ようと俺は先頭車に向かう。車内にもキャラクターがあしらわれていて中吊りなどの広告枠もペンギンが出没。確かに可愛い。しかも、よく見ると車掌台には制服を着たキャラクターがゴールデンオリーブの座布団に座っている。凝つてんなあ。

車内には俺の他にこの電車目当てと思しき親子連れなど、数人が乗ってきて12時10分に宝塚を発車。豊中までは各駅に停まるので神戸線の様な疾走感は感じられないものの、少しづつ乗客が増えていき、20分で次の目的地の螢池に着く。実は螢池は単なるスタンプ地点ではない。

「着いた着いたつと。おお・・・」

階段にはキャラクターと『特急 キミノトコ』表示の1000系っぽい電車、そして阪急の駅名標をモチーフにした『K??U P E N C H A N d H A N K Y U』のマークがデザインされていた。なんでも、期間限定で特別に装飾されているとか。なんで螢池駅なんかは置いといて、スタンプ台はコンコースにあつたのでそれをグッと押す。

絵柄は『はなまる！』と書かれたプラカードを掲げた青い西北と同じキャラクター。やはり続き物になっていた。

そしてさつきの様に記念写真を撮つてホームへ。

(今日は) もう螢池に用はない。グッバイ螢池。

用を済ませた後は、急行に乗つて一路十三へ。

大体庄内を過ぎたあたりで昼飯を食べていないことに気づくが、まあいいかと腹の虫を無視して十三に着くと、そのまま京都線の5号線ホームへ。少し待つてやつて来た53分の特急に乗るが、土曜日の京都方面の特急だけあって既に座席は車端部の優先座席まで満杯。こうなつてはどうしようもないのとどこか空きが出るまで待つ。

・・・しかし、淡路を過ぎても、茨木市を過ぎても座席は満杯のまま。かろうじて優先座席が空くこともあつたが、そこに座る気にはなれず、結局、高槻市でも満杯。多分、桂ぐらいにならないと空かないし、丁度スタンプラリーのチェックポイントだつたのでここで降りることに。ここと次に向かう京都河原町駅の案内所のスタンプ台は改札外にあるので切符を通して改札を出て、スタンプを押す。今度は「いつも」だつた。

高槻市といえば最近整備された安満遺跡公園。勾玉や縄文土器を作れるらしく、面白そだつたが、そんなに時間の余裕がなく、なんなら電車の中からも見えるのでまた今回は断念。また今度行つてみよう。

第二十二話 「嬉しいんじゃないの」

高槻市で3つ目のスタンプを押した俺はホームに戻って、4つ目のチェックポイントの阪急京都観光案内所・河原町へ向かう。

既に左の1号線には準急が止まっているが、こいちは以北は各駅に停まるので勿論つかわず、特急に乗る。土日ダイヤは女性専用車がなく、時刻表には9300系充当を表すピンクの菱形マークがないので、次も9300系が来るか分からぬが果たして、席は空いてるんやろか・・・

そんな淡い期待を抱いていると接近放送が流れ、電車が入線していく。

「・・・うわっ」

しかし、その車両は9300系・・・ではなく、ロングシート車の8300系だつた。多分、代走がなんかで入つたのだろうが、この特急も既に着席率ほぼ100%。さつきの淡い期待は打ち碎かれた・・・かのように思えたが、なんとか空いているスペースを見つけたので一応、座ることはできた。

京都河原町に着いたのは。中央改札を出ると、目的の観光案内所があり、スタンプ台もそこにあつた。押してみると、緑色のキャラク

ターが『がんばってるの』というプラカードを持つてゐる絵柄だつた。これで西宮北口、蛍池、高槻市、そして京都河原町の四つのスタンプが揃い、後は梅田まで戻つてゴールポイントのショッピングに持つていけばラリー成功である。

後は戻るだけなので、ホームに戻つて1号線に停まつてゐる特急に乗り込もうとするが、ここである事を思い出し、乗るのをやめて1号線ホームのその先、2号線ホームに向かう。

そこでしばらく待つていると、だんだん親子連れや同業者と思しき人が増え、そして電車が入線してくる。

その電車は阪急マルーンを基調に金の扇子のラッピングなどこれまで乗つて来た阪急電車とは一線を画すようなデザイン。

7000系唯一の京都線所属、7006F。またの名を『京とれいん雅洛』である。

これに乗りたいがために50分ちょっと待つたのだ。

快速特急と名乗つてゐるくせに、最後まで特急のケツを追うので所要時間こそこつちが遅いが、満足感はこつちの方がいいだろう。

という訳でこつから梅田までこの『雅洛』で帰ることにしよう。

前面展望が見られる1号車の乗車位置で待つてゐたので、すぐに車内に入れた。

この車両は『秋』をモチーフにしたクロスシートの車両で、俺は進行方向右側の1列シートの方に座る。(ちなみに8000系のクロスシート車みたいに窓と席の配置が合つていはないのは突つ込んではいけないところである)

電車は14時41分に発車。やはり人気列車ということだけあって終始乗客は多く、初代と異なり、座席数も少ないので満員状態で15時25分、大阪梅田に到着。

そのあと、三番街のショッピングに向かつて『見てるよ?』のゴールスタンプを押してもらい、今回のラリーは制覇。参加賞のスタンディングメモをもらつた。

ちなみにスタンプのメッセージは『君ははなまる! いつもがんばつてるの見てるよ?』というものだつた。流石、肯定ペンギンといった

ところだろうか。

そして、店で買ったグッズとケーキと共に帰宅。

「遙一、ただいま」

「おかえり・・・あつ、それ」

「誕生日おめでとう。今日はこれを買ってきたんよ」

そう言つてグッズとメモを渡す。

「あの、その・・・ありがと」//

顔を真っ赤にしながらも遙が満面の笑みで言葉を絞り出す。どうやら喜んでくれたようだ。

「おし、ケーキも買ってきたからちょっと待つてな」「うん！」

第六章 「夏や！コミバの季節や！Season2」

第二十二話 「北へ！北へ！（前編）」

「ふわああ・・・久しぶりにおかんとおとんの顔見たわ」

あの後、遙の誕生日を名古屋の両親とリモートで祝つて、誕生日会の後片付けをしていると、ポケットに入れているスマホが震えているのに気づく。

キリのいいところまで後片付けを済ませてから通知を見ると、MINEのメッセージの通知だつた。

開けると俺の彼女、香里奈からこんなメッセージが来ていた。
『明後日、暇ですか？もし良ければ行きたいところがあるんですけど、一緒に行きませんか？』

こんなこと言われて行かないなんて選択肢などない。俺はすぐにOKの返事と集合時間を聞いて、洗い物を済ませてすぐに寝た。

それから2日経った朝、いつもより早く朝食の用意をして家を出て、集合場所のJR大阪駅の御堂筋口に向かう。

「あ、総一さん。おはようございます」

もう香里奈が先に着いていた。今日の服装はジーンズに白を基調にしたトップスとロング丈のレースガウンと動きやすい服装に茶色のカメラバッグと本当に撮り鉄なのか一瞬思ってしまうほど似合つ

ていた。

「おお、おはよう。今日はどこに行くん?」

「今日はですね、北急に乗りに行きます!」

「北急か」

ちなみに北急とは言わずと知れた大阪の大動脈、御堂筋線と直通している北大阪急行電鉄という準大手私鉄のことである。まあ、準大手と言つても総延長は5・9kmしかないのだが。

「今、延伸工事やつてますからね。撮りに行かなきや、一生の後悔です！」

そんな北急は、2023年に千里中央から2・5km先の箕面市の箕面萱野まで延伸するということで、絶賛延伸工事中なのである。香里奈はその現場を撮りに行きたいというのだ。

「ほな、今から行くんか?」

「いやあ、それが朝ご飯食べてないんで食べてから行こうと」「朝食つてへんの?何で?」「え、えっと……」

理由を聞くと急に顔を真っ赤にして歯切れが悪くなる。なんやなんや。

「……このコードを考えるのに時間使っちゃって。好きな人と写真を撮りにいくんですよ……そりや張り切っちゃいますよ」「……ツ」

思いの外、惚氣のある理由だったので俺も恥ずかしくなつてしまつた。

数秒間、俺たちの間から会話がなくなつて……

「……何というか、ありがとな」「……はい」

その後は、マクドで朝食をとることになり腹ごしらえを済ませ、いよいよ駅へと向かう。

今回は特に乗り回しをするわけではないので、素直に千里中央までの乗車券を買って改札機に投入し、2番線ホームへ。階段を下つていると既に電車が止まっていた。

「・・・今やつたら間に合う。香里奈急ぐで！」

「ちよつと待つてください。行き先、行き先」

走りかけたが、香里奈が何やら指差しているのでその方向を見てみるとそこには新大阪行きの文字がある。

成程、確かにこれやつたら北急線内には行かないな。危うく無駄な労力を使うところだつた。

「すまんすまん、焦つてもうた」

「もう、本数は多いんですから駆け込み乗車はやめてください」「まあ、次は4分ぐらい後やつたはずやし、おとなしく待つか」「ええ、その方がいいです」

第二十四話 「阪急城下町、TOYONAKA」（中編）

梅田駅で二人でしばらく待つていると聞き慣れた接近メロディが流れ、これから乗る千里中央行きが入線してくる。編成は今や6編成（2021年7月現在）のみとなつたOsaka Metro最古参、10A系1124F。

扉が開くと多くの人が降りていくが、それでも着席率は100%超え。仕方がないので席が空くまで待つことにした。まあ、新大阪過ぎれば空いてくると思うからね。

『西中島南方です。お忘れ物のないよう・・・』

「あ、空きましたよ」

「ホンマか、今のうちに座つてしまえ」

実際には一駅手前で席が空いたので、そこに座る。勿論、隣同士でだ。

電車は快調に飛ばしていき、江坂駅に到着。ここが御堂筋線と北急線の境界駅になるので乗務員はここで交代。江坂を出ると景色がオフィス街から住宅街に変わつていき、ニュータウンに入つたことを実感させる。中津を出て以来のトンネルに突入するといよいよ千里中央は目前。そして駅に到着。

「いやー、着きましたね」

「おし、ほな早速行くk 「あつ！」 何や何やどうしたんや」「1724を撮り忘れちゃいました・・・」

「1724？もしかしてあれか？元トプナンの？」

彼女が言う1724号車とはこの編成の7両目に連結されている車両。これだけだとただの中間車のように聞こえるが、実はこの車両は元トップナンバーの1901号車。現在、トプナンの流れを汲む唯一の車両なのだ。いつ廃車になるかわからないので撮つておきたかったんだろう。しかし、

「はい・・・でもこの駅、ホームドアがあつて車両が見えないんですよ・・・」

千里中央駅にはホームドアが設置されているため、車両が上半分しか写らないのだ。

「うーん。まあ、安全のためやからなあ。こればっかりは」

「それはわかっているんですけどね。やっぱりちょっと残念です」

そんな会話を交わしながら改札を出る。

ここからはバス移動だ。千里中央には北摂地域最大のバスターミナルがあり、何と12番のりば+αまである。しかも高速便以外は全て阪急バス一社に統一されているのだからすごい。ちなみに北急も阪急阪神のグループ会社。流石、阪急グループが牛耳る街、豊中である。

「これ、どのバスに乗ればいいんですかね・・・」

香里奈は腕組みして路線図とにらめっこしている。無理はない。千里中央からは北は豊能町のニュータウン、南は曾根駅、西は石橋阪大前駅の近くの井口堂、東はJR茨木駅まで路線が広がっていて、乗り場もバラバラなので知らない人は間違ひなく迷うだろう。

「えつとな。このまま新御を北上するバスに乗つたらええから、この
7番のりばのやつに乗つたらええで」

「ありがとうございます。知つてたんですか？」

「ああ、俺は乗り鉄やけど、バスもいけるクチやからな。いろいろ調べ
てるんよ」

「そなんですね。じゃあ、早速いきましょう」

言つて俺達は今止まつて いるバス、85系統の如意谷住宅前循環に
乗車。ここからのバスは途中のバス停までノンストップの急行便が
出るが、このバスは各停留所に止まる便である。

バスは10時17分に発車し、快調に新御を走つていく。

『次は、新船場北橋、新船場北橋です』

「ここで降りましょう」

「せやな」

降車ボタンを押し、精算をしてバスを降りる。いよいよ工事現場の

お目見えだ。

第二十五話 「船場行つたら脅鉄おつてさ」（中編）

「おおー。近くで見ると、大きいですね」

バスを降りて少し歩くと見えてきたのは、道路の横にある鉄骨に囲われたスペース。今俺たちがいるのは北急の新駅『箕面船場阪大前駅』の建設現場の近くに最近出来た工事現場を上から眺められる商業施設のオープンデッキ。ここ船場地区はもともと大阪市の船場地区から織維問屋が集団で移転して出来た織維の街だが、延伸が決まってからは再開発が進み、大学のキャンパスも今年ここに移転してきて、今、北摂で一番アツイ地区となっている。

「シャツターチャンス♪、シャツターチャンス♪

香里奈は嬉々とした表情で、バッグから彼女が愛用する一眼レフ、D6を取り出す。

「・・・」

日頃は明るく、笑顔の多い彼女もこの時の表情は真剣そのもの。元々、クールビューティーな見た目をしているだけに、近寄り難い雰囲気を醸し出している。

そんな状態が数分続いて・・・

「・・・よし。いけました」

「出来た？写真はまとめて見たいから次行こか」

「はい」

オープンデッキを後にして次に向かったのはここから少し歩いたところにある船場北橋と呼ばれる陸橋。ここからは工事現場を間近に眺められる。まあ、本当は新御の本線を通るバスから撮影すればいいのだが、状況によつては乗客や運転手の迷惑になることもあるので今回はしない。

周囲を見回して迷惑にならないことを確かめて撮影を行おうとした。が・・・

「あれ・・・？」

ここで気になる人を見つけた。その人は小太りの男性で、どうやらその人も北急の工事現場を撮りに来たよう見えるが、彼のものと思

しき荷物が歩道いっぽいに広がっていて、それを通行人が避けたりしようとするとき、顔をしかめて「ボクの荷物に勝手に触るな」と声を荒らげたりするので、先程の香里奈とはまた違う意味で近寄り難い雰囲気が漂っていた。

「あれ、ちょっと迷惑ですね」

「やな。ちょっとと言うてくるか」

このまま放置するのもアレだったので、俺は注意をしに行く。

「あのー」

「な、なんだよ?」

「ここ」の荷物、人が通れなくて困ってるみたいなんで、ちょっと退けてくれます?」

「なんだどう? ボクに指図するな! 通れないんだつたら迂回すればいいじゃないか!」

うわ、なんて自己中な・・・。一筋縄ではいかなさそうやな。

「でも、みんな困つてるんですよ。俺達も撮影しに来てるんで別に撮るなどはいいませんけど、ちょっと退けてもらえたから・・・」

「うるさい! 警察でもないくせにガキが口を出すな! 同じ撮り鉄ならわかるだろう」

こう言つて聞くに耐えない罵声を浴びせてくる。俗に言う『脣鉄』というやつである。困り果てた俺は香里奈に警察を呼ぶように言う。「香里奈。もう埒あかんから警察呼んでくれるか?」

「は、はい」

「な、何するんだこのガキイ!」

言つて男は香里奈の携帯を奪おうと飛びかかる。幸いにも香里奈は俺の後ろにいるので、俺が盾になつて男を止めようとする。しかし、

「何をしてるんだ!」

「えつ?」

ちようど通りかかったパトカーから一人の警官が降りてきた。男が驚いていた隙に俺たちは距離を取る。そのあと、男は先程までの威勢が嘘のように縮こまつて警官の一人に連れて行かれた。

「怪我はなかつたですか？」

「はい。荷物が通行人の邪魔になつてたんで注意したら突然逆ギレしてきて……」

「そうだつたんですね。分かりました、御協力感謝します」

そう言つてもう一人の警官も荷物を片付けてパトカーに戻つていく。

「はあ。大丈夫やつた?」

「はい」

「・・・ちょっと休憩するか」

その後、近くのカフェで少し休憩してから撮影を再開。しばらく撮影していると、彼女の顔にも笑顔が戻つていった。

約1時間後、撮影を済ませた俺たちは次の駅の予定地に向かつて歩いていく。

第二十六話 「とある赤穂の三平ちゃん」（後編）

萱野重実

あれから少し時間が経つて、箕面船場阪大前駅の予定地を

後にした俺達は北に向かつて歩いていく。しばらく側道を歩いていくと道路の行き止まりに行き着く。

この仮設の道路板の真下ではただいま絶賛トンネル工事中。この部分はちょうど千里中央からの地下区間が終わって地上区間になる境界部分にあたる。線路の高さ自体は変わらないものの、千里丘陵がこの辺りで終わって道路が激しくアップダウンするため、目の前には建設中の線路と新御堂筋、奥には箕面の山とショッピングモールが見えて、開業したら絶景の撮り鉄スポットになるかもしけない面白い場所である。

「見晴らしええな」

「ネットで資料を漁つてたら見つけたんですよ。ポテンシャルめつちやありますよ」

言つてまたもやカメラを構えてモードに入る。ただ、この時は2、3枚撮つただけですぐにモード解除。「早くいきましょうよ」と催促してくるので彼女について行きその場を後にする。

「あ、暑い……」

うん、完全に舐めてましたね。船場過ぎたら高層ビルがなくなるから今、8月の日差しを一身に浴びてます。しかも雲ひとつない青空。端的にまとめるためつちや暑い。

「あー、じぬうー」

横を見ると香里奈がだらだらと汗を流し、端正な顔立ちからは想像もできないような声を出して暑さを訴えている。まるで野獣の咆哮みたいになつてる。

「香里奈・・・いくら暑いからってそんな声出してたらあかんつて。ほら、そこにコンビニがあるからさ・・・」

「あ、ホントだ・・・じゃあ、そこ行きましょうかねえ」

道中にコンビニを見つけたので休憩がてら入る。そこでスポーツドリンクとかを買っておいてまた歩き始める。

さつき高台から駅の方を見た時は道路の幅が広かつたので近く見えたが、意外と遠かつたようだ。

「ていうか、日傘とか持つてないんか？お前やつたら持つてそうやけど

「私意外とそういうの気にしないんですよ・・・たまに日焼け止めは塗りますけど」

「たまにやのに全然日焼けしてへんのんのは驚き桃の木やな・・・」

「ふふん、体质ですよ」

香里奈が自慢げに鼻を鳴らしてドヤ顔を作る。ホンマにそんな体质があつたら世の女性はみんなお前を羨むと思うで・・・。そんなことを話していると新御ほどではないものの、それなりに大きな道路に出る。

国道171号、京都から神戸を結ぶ通称『イナイチ』とか『西国街道』とかで呼ばれる北摂の主要道路である。

北急の線路もここを跨ぐので早速信号を待つてから見に行くと、この辺りの高架の部分はほぼ完成していて、今作っているのはさつき見た地下トンネルとの接続部分と、これから行く箕面萱野駅の部分のようだ。

「ほら、香里奈。頑張れ頑張れ、後もう少しや」

「ええ・・・あそこまで行けばモールがありますからね」

そこからは仮設の歩道を進んでいき、ついに箕面萱野駅の予定地に到着。

下から見上げる形になるが、駅の基本的な構造は大体完成しているよう見える。

ここからは真正面に位置しているショッピングモールにかかる橋を使って上に移動。ちなみにこの橋の名前は『かやのさんpei橋』というらしい。

「かやのさんpei? 誰でしよう?」

「確かに、この近くで生まれた萱野重実っていう赤穂藩士の通称からとつてるって聞いたな。何ならこの近くのバス停の名前も『萱野三平前』やし」

「へー、そうなんですね」

「まあ、バス停の名前を聞いてちょっと調べただけなんやけど」

これ読んでる奴らも気になるんやつたら Wikipedia で調べといてくれ。そつちの方が細かいこと載ってる。

・・・話が脱線してもうたな。

上からは駅の様子がよく見えていて、すでにホームやコンコースの構造部分はほぼ完成していた。

「いやー。もうあと2年したらここに電車が通るんですね」

「せやな。まあ、受験シーズンが終わってからになるからゆっくり乗れそうやし」

「そうですね。その時は一緒に一番電車に乗りにいきましょうか」

「いけるかなあ。まあ、頑張るわ」

この後、撮影をしてバスで千里中央まで戻つて帰宅の途についた。

「千里中央にて」

「あ、総一さん！」

「何や？ そない驚いて」

「また会えました！」

香里奈が指差す方向を見てみるとそこには行きの電車で乗った124編成が止まっていた。そういえば元トプナンの車両があるから撮りたいって言つてたな。（第二十四話参照）

「良かつたやん。これで撮れるな」

「はい！」

香里奈が微笑む。その表情はどんなものにも例えられないほどの素敵な笑顔だつた。そして、ホームドアがまだない東三國駅まで待つて1724号車を撮影。これでミッショングンプリートだ。

萱野重実

第二十七話 「2・5次元を超えた存在」

「おし、全員揃つたな」

東京に出発する二日前の8月5日、鉄道部五人は久しぶりに部室に集合していた。その理由は・・・

「千代崎さんからコスプレ衣装が出来たって連絡が来たからな！今日は是非試着をしてもらおうと思つてここに呼んでん」

「え、出来た？確保出来た、じゃなくてですか」

「せやねん。漫研つて裁縫部と繋がりがズブズブでな、先方の厚意で作つてもらつたつて」

「ズ、ズブズブって言い方・・・」

「まあ、事実だしねー」

「そんな訳だから」コンコン

「あ、噂をしてたら・・・」

ノックの音がしたのでどうぞと声をかけると両手に袋を何袋も持ち、ゼエゼエと息を切らしている漫画研究部部長、千代崎澄香が姿を見せる。

「お、お待たせしました・・・」

「あ、千代崎さん。お疲れ様です」

「「「お疲れ様でーす！」」」

「ハハ、ホントですよ・・・」

「それでこれがコスプレ衣装ですか・・・」

千代崎さんが持つて来た紙袋を見つめながら香里奈が呟く。

「はい、早速お二人とも着替えてくれますか？もしサイズが合つてなかつたらすぐに直しておるので」

「おーし、じゃあ着替えるから、諸君には『退出ねがおー』

「へいへい」

そう言つて俺と部長、圭人の三人は部屋の外に出て女子の着替えを待つ。

それから十数分後・・・

「皆さん、終わりましたよ」

中に入る千代崎さんから入つてもいいと許しを得たので、中に入る。

「「えつ・・・」」

俺たちはその姿に絶句した。

彼女たちが纏っている衣装は紫と黒を基調に、所々に金色の刺繍が入つていて高級感あふれるドレス。

そこにいたのは朝潮香里奈と平林紗里・・・のはずなのだが、カラコンをつけ、カツラまで被つているのでどこをどう見ても白金燐子と今井リサにしか見えないのだ。まあ、よく見るとリサに扮している紗里は少し垂れ目になつていて元の面影を残しているが、香里奈はものの見事に燐子になりきつていて、まさに二次元の世界から不気味の谷を超えた状態で飛び出して来たと言わざるを得ないほど似ているのだ。一応、彼女たちが所属しているR o s e l i aというバンドは声優さんがリアルバンドを組んでるんやけど・・・

「これ見たら、その人たち顔真っ青にして、泣いて逃げ出すんちやうんか?」

「・・・そ、そうですね。似てるつていうか・・・これ本人ですよ」「本家は商売上がつたりになるんちやうんか・・・」

「ど、どうですか?」

「いやあ、香里奈。えぐいくらい似てるわ。これやつたら集客力抜群やないか?」

「もー、香里奈ばっかり見るのもいいけど、あたしの方も見てよー」紗里が頬を膨らませて俺に言ってくる。そんなこと言われてもなあ・・・

「ハハハ、何も知らんで見たら、完全にアニメキャラを侍らせてるようになしか見えへんな」

「部長、そないなこと言わへんで、何とかしてくださいよお」

そんなこんなで、この二人がコスプレをするととんでもないクオリティになることが分かつた今回の試着会だつた。

試着会を終えて、二人は元着ていた服に着替えて、再び全員で机を囲つて座る。

「さあ、いよいよ後一日で東京遠征や。今日は試着のこともあつたけど、遠征前の最終の打ち合わせでもしておこうかなって」「なるほど、では、漫研は準備はどうですか？」

「もうこつちは印刷会社に刷つてもらいました。もう宅配便で直接会場に届くようにしたのであとは受け取るだけで大丈夫ですよ」「そうですか。では……」

こんな感じに話し合いが進んでいき……

「じゃあ、休みを挟んで明後日の7時に集合つてことでいいですか？」
「「「「異議なーし（ないです）（ないよー）」」」

話し合いは終了。終わったのは17時前のことだった。

「ふう、これでやること全部決まつたな」

「いよいよですね」

「明日休みだから、体力温存しないとねつ??」

「じゃあ、また明後日」

いよいよ明日から待ちに待つた東京遠征が始まる……

第二十八話 「いざ行かん、東京へ！」

8月7日、時刻は朝の6時25分。

俺、白庭総一は背中に登山用のリュック、左肩にはショルダーバッグ、右肩には右手に大量の荷物を携えて大阪駅御堂筋口の前にいた。

ちなみに俺の他には香里奈が既にいた。なんでも、始発で来たとか。ちなみに香里奈の最寄駅、雲雀丘花屋敷からの大阪方面の始発は4時25分発。関西で一番早い始発電車だ。ということは香里奈は約1時間30分、早朝の梅田にいたことに・・・

「何して時間潰したんよ・・・」

「最初はネカフェで時間を潰そうと思つたんですけど、よく考えたら私、高校生だからこの時間入れないんですよ。それで地下街を1時間ちょっととぶらついてたんですよ」

え、地下街・・・誰もおらへん地下街を？

「ええ、結構面白かつたですよ。ダンジョンを冒険してるみたいで」

「そ、そ、う、か。不審者っていうモンスターが出んかっただけマシやつたな・・・」

「ふふつ、心配してくれたんですか？」

「そら、好きな彼女が一人荷物を抱えて早朝の地下街にいるって聞いたらみんな心配するやろ」

「も、もう・・・」//

そんな会話をしていると、

「ふふふー、こんな朝っぱらからバカッフルぶりを見せつけちゃつてー。あたしの口の中は砂糖まみれだよう」

「うわあっ（キヤツ）！」

いつの間にか紗里が後ろに立っていた。

「おお、紗里か。おはようさん」

「おはようございます、平林さん。びっくりしましたよ」

「ごめんごめん。バカッフルが砂糖を撒き散らしてたからつい驚かせたくなっちゃつた」

「ハア、紗里は朝から平常運転やな」

JRの駅の中から圭人がやつてきた

その10分後・・・

すまんすまん お待たせ

部長がやってきて、これで鉄道部員が全員集合。え?なんでトツブ
たる部長がこんな集合時間ギリギリの重役出勤なのかって?それに
はちゃんと理由があるのだ。

「いやー、始発で出たんやけどギリギリなってもんだ」

実は部長の家は三重県の青山町という場所にあって、香里奈と同じく、朝6時半起きで、彼も5時2分発の五位堂行き（五位堂から急行大阪上本町行き）始発電車に乗つて来ているのでこれがギリギリなのだ。集合時間が朝の7時なのもこれが理由だつたりする。

一来て早速やけど点呼するで
平林！」

鳥見

「は、
はい」

一朝漸！

「最後、
田舎」

「あい！」

「おーし、

「一九二二年」

「よし はな切り渡すで」

言つて部長は俺達に今回使う青春18きっぷを渡す このきっぷ
は鉄道ファンにはお馴染みのJRのほぼ全線の普通列車が2410
円で乗り放題になる貧乏人や俺達学生にとつては非常にありがたい
切符である。

これで準備万端、いよいよスタートだ。

※5人は人に迷惑にならない程度の声量で話します。

早朝の大阪駅は土曜日ということがあつてからか、客の数は少ない。18きつぶは有人改札を通らないといけないのだが、5人まとめて改札を通るので予想外に時間がかかり、気づけばもう乗る予定の電車の時間が迫っていたので食料の確保は後にして、急いで8番のりばへ。

ホームに止まつていたのは3406M 新快速米原行き。これが俺たちが最初に乗る電車だ。

幸い、大阪始発だったので席は容易に確保することができ、左右のクロスシートを荷物用を含めて8席確保することができた。座席は俺と香里奈が隣り合つて座り、真向かいの席には部長。隣の列の席には紗里と圭人が向かいあつて座る。

そして7時15分、電車はゆっくりと大阪駅を出発。いよいよ長旅の始まりだ。

「ふわあ、なんか眠くなつてきました」

「そら、4時台の始発で来るからやん。もうちょっと遅う来てもよかつたのに」

「別にいいじゃないですかあ」

そんな会話を少し続けて俺と香里奈は揃つて車窓を眺める。

電車は新大阪を出ると速度をぐんぐん上げていき、新快速の名に恥

じないスピードで走っていく。

高槻、京都と過ぎていき、滋賀県に突入。ここからしばらくは停車駅の間隔が狭まるので速度はあまり出なくなる。

「あ、そういえばこれ買ったんだ。小腹も空いてきたと思うからさ、じゃが?」
「こでも食べない?」

大体草津を出たあたりで紗里がリュックからじゃがいものスティック菓子を2個取り出す。

「あ、食うわ」

「・・・ありがとうございます」

「サンキュー」

「いいんですか?じゃあ頂きますね」

もし、乗客が多い区間だつたら断つていたが、乗客も少なく、早朝集合もあって腹が減っていたのでありがたく全員でじ○がりこを頂くことにした。

そんなこんなで時間は過ぎていき、米原に到着したのは8時41分。ここからはJR東海にしばらくお世話になる。

第二十九話 「座れば天国、座れなけりや地獄」

新快速を降りた俺達は次に乗る8時46分発の普通大垣行きに乗ろうと急いで荷物を持つて8番のりばへ移動する。この滋賀県と岐阜県の県境を挟んだ米原～大垣間は東海道本線の中でも一番本数が少なく、電車も大半が4両という短い編成の上、座席数の少ないクロスシート車のため、この18きっぷのシーズンには非常に混雑する。俺達にとつては座席を確保出来ないと、約30分間大荷物を背負つて混雑した車内で立つたままでいることになるのだ。

しかし、荷物を背負つているせいで走つてもなかなかスピードが出ず、結局車内に入る頃には8両編成にもかかわらず、座席はすでにいっぱいになつていた。

「ああー、どないしよう」

「…僕、この荷物で、大垣まで立つてられる自信ありませんよ…」

「ほな、これの次のやつ乗るか？ 総一、ちょっと調べてくれへんか」

「あー、分かりました」

俺はショルダーバッグから時刻表を取り出し、次の列車の時刻を調べる。

「…えーと、8時46分がこれやから、次は9時18分ですね。しかも、これで豊橋まで直通で行きますね」

「よし、ほなそれ乗ろう。それやつたら大垣で乗り換えんでええし」

「そうですね。総一さんもそれでいいですか？」

「まあ、早よ行きたいんやけど、席ないと困るからな。待つよ」

結局、次の特別快速豊橋行きに乗ることを決め、普通を見送ることに。そして、

『8番のりばから普通大垣行きが発車します。ドアが閉まります、ご注意ください』 プシュー

満員の客を乗せた大垣行きの普通は定刻通りに出発していく。次の電車が来るまで20分ちょっと時間があるのだが、もうすぐ次の大阪方面からの新快速が来るので場所取りをしておかないといけないのでこのまま電車の到着を待つことに。

そうしていると、俺達はあることに気付く。

(((((そういうえば、飯買つてへんかつたな))))

大阪で電車の時間が迫っていたので朝飯の調達を後回しにしていたのだ。

「買ひに行きたいけど、場所取りもしておかへんとあかんしな」

「ほな、ジャンケンで二人決めて買ひ出して、残りは待機でいいんやないですか？」

「ほなそれでええか」

5人でジャンケンして負けた部長と香里奈が駅ナカのコンビニへ。

それと同じくらいのタイミングで大阪方面からの新快速近江塩津行きが到着。乗客が続々とこちらに向かって来て、ホーム上に人が増え始める。

『・・・名古屋方面豊橋行きが8両でまいります。危ないですから黄色い点字ブロックまでお下がりください・・・』

二人が戻る頃には、ちょうど入線放送が流れて電車が入ってくるところだった。やつて来たのは東海管内ならばそこら中で見かける313系を2本繋いだ8両編成。

「313系かあ。どうせなら311系の方が良かつたなあ」

紗里は311系をご所望だつたようだ。

幸い、先頭で並んでいたので席は容易に取ることができたが、それ以外の席はすぐに埋まってしまう。

「もしみんなで買い出しに行ついたら、危なかつたねえ」

「ていうか、こっちの方が大垣で乗り換えんでいいからさつきの普通より混むんちやう？」

「言われてみれば・・・」

「気が付けば座席はおろか、通路まで人がいっぱいになつていた。

「これ、朝飯食われへんね」

「えー、また朝ごはん食べられないの？」

部長のつぶやきに紗里が絶望した顔になつていく。

「我慢してください、平林さん。こんなに大勢いるのにご飯食べるのはマナー違反ですよ」

「それは分かつてゐるけど……」

まあ、紗里の気持ちも分からんことはない。俺もさつきのじや??り
ここで腹が持つとは思へんからな……

とりあえず、10秒チャージのパックゼリーを買ってきてもらつた
のでそれを流し込む。なんせこれから2時間座りっぱなしになるの
で、栄養補給ぐらいはしておかな。

そうしてみると発車時間を迎へ、電車はゆっくりと動き出す。

築堤で北陸本線を越えて留置線群が終わると、一気に山深くなり、
醒ヶ井、近江長岡と過ぎていき、大阪と兵庫にもある事でお馴染み、滋
賀県最東端の柏原駅に到着。ちなみに大阪の方は柏原、兵庫の方は
柏原と読む。この駅を過ぎると、すぐに県境に突入して、やつて来た
のは天下分け目の合戦でお馴染み、関ケ原。『ケ』やないよ、『ケ』な
んやで。ここからは路線は次の垂井まで二手に分かれるが、一方は米
原方面に向かう特急や貨物列車しか使わず、ほとんどはもう一方の線
路を使用している。

ここで一緒に景色を眺めていた香里奈がある事を言い出す。

「そう言えば、このあたりで逆走をする電車があるって聞いたことあ
るんですよ」

「逆走？ それホンマか？」

「ええ。なんでも始発電車がそれにあたるとか……」

・・・なんか気になるな、今度調べてみよ。

垂井を過ぎると景色が開けてきて、養老鉄道の線路を越えると藤沢
の高校生カップルが一夜を共にした街、大垣はもう目前。車両区にあ
る電車群を横目に9時53分に大垣に到着した。

第三十話 「ウイーアーストツビングアツト・・・」

大垣に着いたのは9時53分。去年まではここからムーンライトながらで東京へと向かっていた。特に下りのながら到着時に見られた座席争奪戦『大垣ダッショ』は今回のような大荷物を背負っていたので座席を取れず、米原まで立席をする羽目になつた。ながらがあつた時ほどの勢いはないもののダッショは現在も大垣止まり・始発の普通と快速とかにステージを移して行われている。まあ、こいつは豊橋まで直通なのでそんな事を考えなくても良いのだが。

この駅では3分停車して56分に発車。しばらくは第三セクターの樽見鉄道樽見線と並行。やがて樽見線は北へと分かれていくがその際に揖斐川を渡る。ちなみに樽見線の揖斐川橋梁は元々、御殿場線にあつた橋梁を寄せ集めて作つたものだとか。そしてその次の穂積を出るとまた橋梁。今度はムーンライトながらの名前の由来となつた長良川。ここ鮎食つたことあるけど、美味しいよね。

そこから岐阜までは各駅に停まり、岐阜からいよいよ快速運転がスタート。

「意外と速いですね、総一さん」

「まあ、最高120km出るからな。西の新快速ほどやないがSpe cial Rapid Serviceを名乗るだけあるな」

「そこだけ発音ええな」

「確かに、こつちの新快速はNew Rapidって言つたよねー」

「紗里よ、お前もか」

部長が何やらツッコミを入れている。

岐阜を出るとまた川を渡る。今度は木曽川である。この川を渡ると愛知県に突入、快調に飛ばしていく。

15分くらい走っていると住宅も増えてきて、遠くには高層ビルの姿も。都会を1両で走るくせに起点と終点以外は全線高架で複線という色々ツツコミどころがあるローカル線、城北線が分岐する枇杷島駅を通過すると、次はいよいよ中京都市圏の中心、名古屋・・・のはずなんやけどほんまに次は名古屋なのかと疑いたくなるほど枇杷島駅周辺は閑散としていた。ここ、三大都市圏やんな？ただ、本当に名古屋についたので俺の目はおかしくなかつたようだ。そんな訳で10時28分、名古屋駅に到着。大都会の駅らしく、乗客がどんどん入れ替わっていくがきつぱーらしき人もちらほら残っている。ここまで来ると席に少しはあるが空きが出始める。

ここで車窓を眺めているとみんなの声が聞こえなくなつていて、何やら暖かい感触がすることに気付き、反対側を見てみると俺以外の鉄道部員はみんな寝ていた。特に香里奈は俺に抱きついていてあろう事か胸が押しつけられている。これでは動けないのでなんとか香里奈の腕を動かそうとする・・・

「ん、だいしゅき・・・」

あ、無理や。こんな可愛い寝言呟かれたら動かしたなくなる。ただ、こんな暖かい感触で適度に涼しい車内。俺も一気に睡魔が押し寄せてきて・・・

「・・・ん？」

いかんいかん、寝てたみたいや。なんかどつかの駅を通過している
ようなのでそこの駅名標を見ると『大高』という文字が。大高駅は名
古屋駅から10分ぐらいで通過するはずなので俺も大体10分寝て
いたようだ。

「ん・・・おはようございます。寝ちゃつてましたね」

香里奈も起きて眠い目を擦り、はにかみながら俺に話しかける。

「大丈夫や。俺もさつきまで寝てたから」

「ところで、ここは?」

「確か、大高すぎたあたりやつたはず」

「そうですか、ありがとうございます。ところでさつきから気になっ
てるんですけど、あの変なスペースなんなんですか?」

香里奈が指差す方を見ると線路の横にもう2線分線路を敷けそ
うなスペースがある。

「これ?これなあ、南方貨物線つていう貨物線になり損ねたやつ。い
わゆる『未成線』つてやつやな

「未成線・・・頓挫したんですか」

「せや。もう後は線路引くだけつてところだけまで完成してたところ
あつたんやけど、そのタイミングで国鉄が金がないって言つて予算を
出さなくなつてな、平成になつたらトラック輸送が主流になつて結
局、建設を止めてもうた」

「へえ、そなんですね」

まあ、もうちょっと話す事はあるんやけど、詳しくはWikidiで見
てくれた方がいい。

そんな話をしていると時間は過ぎていき、刈谷、安城、岡崎と南へ下るほど沿線の風景は田畠ばかりになつていく。ちなみに香里奈以外の面子は岡崎を出たあたりで全員夢の中から戻ってきた。

そして、

『「乗車ありがとうございました、まもなく終点、豊橋、豊橋です・・・』
「あ、やばいやばい。早よ準備せな」

車掌さんが棒読みの英語アナウンスとともに降車を促してくるので急いで準備をする。

豊橋には1時27分に到着。ここから地獄のロングシート区間、静岡県へと突入していく。

第三十一話 「私のお父さん、実は・・・」

豊橋からはいよいよ18きつぱーなどから散々難所だなんだと言われている静岡県区間へと入つていく。人によつては、この区間の一部を330円の座席指定券を払つて、ホームライナーや、たつかい金を払つて新幹線に乗車することを選ぶようだが、前者は運行時間外、後者は単に予算がないので、俺達は大人しく各駅停車に乗る。

ただ・・・個人的にはまだこの区間は恵まれていて方だとと思う。確かにロングシートが続き、使える電車が普通とホームライナーしかない（正確には金曜・休前日の深夜1本だけ臨時快速がある）のは18きつぱーとしてはつらいが、こんなもん、芸備線末端区間や宗太郎越えに比べたら何百倍もマシな方である。

次に乗るのは11時42分発、5944M 浜松行き。さつきの電車の半分以下の3両編成である。ここからは浜松ともう一駅で乗り換えをして、熱海へ向かうルートをとる。ちなみに、話は戻るが、俺達は米原で座席を確保し損ねて一本電車を見送つたんやけど、さつきの特別快速に乗つていていたらあと2回余分に乗り換えがあつたらしい。何度も言うが、俺達は大荷物を背負つていてるわけで、体力の無い奴がいる以上、乗り換えは出来る限り避けたかったので、かえつて乗れなかつたほうが良かつたかも知れない。

車内はもちろんロングシート。しかもこいつは211系なのでトイレがない。

「あ、ごめん。ちょっとトイレ行つてきていいー？」

そんな訳なので、紗里が手を合わせて言つてくる。まあ、しゃあないよな。

「ああ、ええよ。でも8分ぐらいで出るから早めにな
「はーい」

数分後、紗里が戻ってきてそれと同じぐらいのタイミングで発車ベルが鳴り、豊橋を出発。次の二川を出ると、いよいよ静岡県に入る。しばらくは畠の中を走つていき、新居町の辺りで新幹線の線路が合流してきて、鉄橋を渡る。

「あ、浜名湖ですね。昔、よくここでお父さんと写真撮つてたんですよ」

「え？ 香里奈って、この辺りに住んでたのー？」

「いや？ 生まれも育ちも宝塚ですよ？」

「……ど、どういうことですか？」

いつの間にか反対側の席に座っていた部長と紗里と圭人も話に参加してくる。

「私のお父さんがこういうのを持つてて……」

そう言つてスマホを見せてくる。あ、そうや。香里奈のお父さんつて……

「あれ？ これ議員パスやないか」

そこに写つっていたのは国会議事堂をバックに、『鉄道乗車証』と『旅客鉄道会社全線』……まあ言い換えればJRのことやな。そして『衆議院議員 朝潮金次』の文字が印字されたカード。

「もしかして、朝潮の親父さんつて国会議員なん？」

「はい、兵庫県第6選挙区選出、日本進歩の会の現職です！」

部長が問うと、香里奈が誇らしげに返す。ちなみに日本進歩の会と

いうのは大阪で設立されて、長年その辺りを地盤に絶大な支持を集めている政党である。

「す、すごい……」

「でも、その議員、パスつて基本的には公務以外には使つたらあかんつていうルールのはずなんやけど……」

「はい、だからお父さんが浜松にちゃんとした用で行く時に連れつてつてもらつたんです。そしたら、新幹線代が私の分だけで済んじやいますからね。まあ、『私用で使いまくつてる人も知り合いにいるよ』って言つてるんですけどね」

などと苦笑いしながら言う。いやいや、完全にアウトやろ。

そんな会話を交わしているとあつという間に電車は西浜松駅（貨物駅）まで来ていたので急いで支度をして扉の前に向かう。

俺達がいるのは2両目の真ん中の扉だが、両端の扉にもきつぱーと思しき人が陣取つていて。

そして扉が開き、いつせいに走り出す。

しかし、やつぱり荷物が重く、走りにくい。次の電車は12時27分発の興津行きだが、さつきの電車と同じ211系5000番代（3両編成）が単独で来やがつたので、車内に入つた時にはもう既にほとんどの座席が埋まつていた。

何とか2席分は確保出来たので、荷棚に荷物を上げて、交代で座る事に。

『次は、島田です。We are stopping at Shi
mada . . .』

「よし、準備」

「あーい」

「分かつた」

アナウンスを聞いて俺達は支度を始め「あ、あの！」何や、圭人か。
「どないしたん？」

「ここで・・・降りるんですか？まだ、終点じゃないですよ・・・」

確かに圭人の言う通りや。次の島田から終点の興津までは11駅
と、まだまだ距離はある。

確かにまだ終点ちやうけど、今から島田始発の電車に乗り換えるん
やけど、実はな、ここで降りても、興津で降りても乗る電車は結局同
じやつになるんよ

「そなんですか？」

「そーだよ。しかも、静岡とか清水を通るから大体満席になっちゃう
からね。だから席を確保したいならここで降りたほうがいいんだ。
JRのホームページにもここ乗り換えを推奨してるからねつ☆」

「へえ、そなんですね・・・」

理由を聞いて、どうやら納得してくれたようだ。

「ほな、降りるで」

「「「はーい」」

第三十二話 「薩埵峠」

島田には13時12分に到着。ここからは乗り換えだが、今降りたホームは1番のりば。一方、始発電車は向かい側の3番のりばから出発するので、跨線橋で渡らないといけない。

ありがたい事に、今から乗る電車は乗り換えなしに熱海まで直通してくれるので、実質走るのはこれで最後になる。（上りの熱海乗り換えはすつごいらク）

そして、ドアが開いて俺達は一斉に走る・・・

・・・えーっと、結論から言うと、なんとか5席分は確保出来ました。ていうか、混雑回避法というものの、この方法は18きつぱーにとつてかなり有名になつていて、さらに、今度は313系がこれまた単独3両で待ち構えていたこともあつて、俺たちが座る頃には乗車率はほぼ100%になり、立ち客も出てきた。彼らはここから熱海までは1時間50分、距離にして103.2kmを立つたまま。しかもこの状態で静岡駅に向かうのだ・・・

「もし、私達がああなつていたと思つたらゾツとしますね・・・」「せやな・・・」

そして、13時24分に島田を出発。この先、熱海までは乗り換えはないので安心だ。

しばらくは住宅地が続していくが、焼津から静岡市内最初の駅、用宗まではトンネルがあつたり、結構距離があつたりする。駅の数のわりに乗っている時間が長いのはそういう事。

13時39分、静岡に到着。県内第二の都市だけあつて多くの客が降りていくが、それと同じくらい、むしろさつきより多い乗客が乗ってきて、日曜昼間の御堂筋線ばかりの大混雑を見せる。幸い、数駅先の清水で少し緩和されたものの、依然としてまだまだ客は乗っている。

そして浜松から乗つて途中で降りたあの電車の終着駅、興津に到着。ちなみに東京から帰る時は浜松行きはここ始発が多いので、逆にここで乗り換える事になる。

ちなみに、他の部員はどうと…

「「「ZZZ…」」」

俺以外全員が寝ていた。しかも俺もかなりやばくなっている。ただ、俺が起きてたのには理由があつた。

「うーん、香里奈。起きろ…」

「ふわああ、…総一さん？もう熱海についたんですか」

「まだやけどな、アレを見せたくて」

「アレ？」

すると、電車は興津を出てしばらく走っていたトンネルを抜け…

「あ、富士山…」

「そう、ここを見せようと思つてな」

右には太平洋、遠くには富士山がくつきりと見える。今通つているこの場所は薩埵峠さつたとうげといい、東海道新幹線、国道1号線、東名高速道路、そして東海道本線が集結する交通の要所。あの歌川広重の浮世絵『東海道五十三次』に描かれるほどのビューポイントで、俺と香里奈が座つている海側の座席で富士山が見える数少ない場所でもある。

「結構くつきり見えるんですね」

「ほんまは冬の間が空気も澄んでて見えやすいんやけど、今日はちょうど見えるねん」

「これ見せるためにずっと起きてたんですか？」

「まあ、それもあるな・・・」

「ふふつ、ありがとうございます。確かに、ここは有名な撮影スポットですけど行つたことはありませんでしたね」

「さすがにお父さんの付き添いでも行つたことはないか」

「はい」

そんな会話を小さい声で交わす。

ちなみに、俺たちよりはるかに富士山を見るチャンスがある山側の座席に座っていた部長、紗里、圭人の三人が起きたのは由比から7駅東京側にある原駅。そこからでも富士山は見えんことはないが、だいぶ東に行つてしまつたので、すでに見えにくくなつて、あとで「なんで起こしてくれなかつたんや」って言われた。いや、混雑してたつちゆうのに出来る訳ないやん。

そんなこんながあつて、某・太陽輝くスクールアイドルの聖地でおなじみ、沼津に到着する・・・かと思えば、なんとホームはまだ先なのに電車が減速し始める。一瞬、俺の頭の中には人身事故の四文字がよぎるが、そんな心配はすぐに吹っ飛んだ。

『この電車はこの駅で前に電車を繋ぎます・・・』

なんや、増結やつたんか・・・。アナウンスの通り、沼津駅のホームには211系の増結2両が待ち構えていて、係員の誘導でドッキング。ここから熱海までは5両編成となる。言うてあと3駅なんやけど。それでも座りたい人はいるのか、立っていた人はゾロゾロと増結した2両へと向かつていった。

函南駅きのみやを出て、東海道本線最長の丹那トンネルを通過すると、伊東線の来宮駅きのみやが見え、長かつた長かつた静岡県区間もクライマックスを迎える。

そして、15時14分。

『熱海、熱海です。ご乗車ありがとうございました・・・』

静岡県内最後の駅、熱海に到着。そしてほぼ6時間お世話になつたJR東海ともお別れ。いよいよ首都圏を抱える日本最大の鉄道会社、JR東日本のエリアへと入つていく・・・

第三十三話 「緑のアイツ」

ついに静岡県最東端の熱海駅までやつてきた俺達。いよいよ次の電車で東京入りできる。

ここまで5両編成（うち2両は沼津から）の電車に乗っていたが、ここから東京方面は編成が一気に長くなる。

これから乗車する15時26分発普通上野東京ライン経由宇都宮行きはE231系5両とE233系10両を連結した15両編成なので座席取りはめちゃくちやラクだ。しかもセミクロスシートがある。

・・・ただ、逆はどうなるか言うまでもないやろ。

ここで他の面子を見てみると、全員げつそりした表情を見せてくる。ムーンライトがあつた去年でもここまで疲れていたが、大荷物で何回も乗り換えして、ゴミのように人がいるロングシートに乗り続けた結果だろう。まあ、俺は乗り鉄なのでこれぐらいは慣れたもんなんやけど。

「ああー、4時間ぶりのクロスシートだあ・・・」

「ずっとロングシートばつかやつたから、セミクロスとはいえ、ありがたいな」

「これでぐつすり・・・」

「・・・あの」

「「「？」」「」」

クロスシートがあることの喜びを分かち合っていると、突然圭人が声を上げる。

「どーしたの？」

「あの・・・せつかくこの電車に乗るんですから、その・・・グリーン車に、乗つてみたいんです」

圭人の提案に全員がハツとした。首都圏のJRのうち、東海道線や横須賀・総武快速線、常磐線、湘南新宿ライン、上野東京ラインといった中距離の路線には普通列車でも優雅に座れるグリーン車がついてるのだ。どうやら圭人はそれに乗りたいらしい。ただ・・・

「グリーン車ねえ・・・俺はあんまり金は使いたくないな」

「まあまあ、そんなこと言わないでください。グリーン車に乗る機会なんてそういうんですから」

「そーだよ。みんなで一緒に乗った方が楽しいじやん☆」

「ハア・・・。わあつたわあつた。ほな俺が五人分買つてくるわ」

「発車までは・・・あと7分か」

ホーム上には券売機があるのでそこで買うのもアリだが・・・

「なんやこれ」

「ええ・・・」

なんとその券売機はICカード専用、しかも使えるのはS u i c a、P A S M O、T O I C A、K i t a c aの4種類のみ。我らがI C O C C A、もちろん現金など使えないという西日本の民にとつては鬼畜極まりない券売機なのだ。

「どないしよ・・・」

こうなると改札外に出てグリーン券を買うことになるが、18きっぷは自動改札を通れず、有人改札を通らないといけない。となるとタイムロスになるのでせつかく券を買ったのに電車が出て紙切れと化す最悪の事態が起きかねない。

考えに考えて・・・

「おし、いつたん乗ろう」

「「「えつ！」」

「いや、今からグリーン券買うんつて間に合わへんし、車内で買つたら余計に払わなあかんやん。流石に追加で260円はよう払わんで」

「でも、それやつたら・・・」

「やからな・・・」

結局、15時26分発に乗車して熱海を出発。しかし、当初予定していた東京までは乗らない。え？、ほなどこの駅で降りんねんって。まあ慌てなさんな、もう降りるから。

そして降りたのは・・・

『国府津ー、国府津ー。ご乗車ありがとうございました』

熱海から7駅、JR東海の在来線最東端の国府津駅である。

「いやー、総一頭ええなあ。確かにこつからやつたら本数増えるからな」

「ふあいんぶれー」

「総一さん、流石です」

そう、電車の本数が増えるのだ。熱海からだと1時間に3本程度の頻度だが、この国府津駅だと16時台は7本が運転される。昼間だとこの駅の始発はないが、東海道線の電車の寝床、国府津車両センターがあるのでちょうどこの時間帯に始発が出てくる。実は電車に乗っている時に小田原・国府津・平塚のどこで降りようか迷つたが、時刻表で調べてここにした。

いやー、自分で自分を褒めたいね！（・・・▽・・）

そんな訳で次に乗るのは16時13分発、始発の普通上野東京ライン経由古河行き。もう五人分のグリーン券も買つたので今度こそグリーン車に乗れる。ちなみに俺と部長は近距離券売機で、後の3人はみどりの券売機で買つた。

そして、俺達はグリーン車がある5号車へ。

「おおー、誰もいない」

「・・・やつた」

みんなは目を輝かせている。何せ始発駅で土曜日ということもあって車内には誰もいない。

つまり、選びホーダイ。

「ありがとねー、そーくん」

言つて紗里が抱きついてくる。いや、気持ちは嬉しいんだけど、香里奈がハイライト失踪状態の瞳でこっちを見てくるんよ。あれ、なんか咳いてませんか・・・

そんなこんながあつて、座席を回転させ、ボックスシートにして俺、香里奈、紗里、圭人の4人が座る。部長はくじ引きで当たりを引いたので後ろの席へ。

右手にはホームが目線ぐらいの高さに見える。これが見たくて階下席を取つたのだ。

「そーくん、乗り気になつてるー」
「ふふつ、素直じやないですね」

16時13分、国府津を出発。今度こそ東京へ向かう。朝7時に大

阪を出発してすでに9時間が経過し、既にみんなは疲労困憊。グリーンアテンダントの車内検札が済ませるとみんな寝てしまう。ただ、俺はなぜかあまり眠くならない。不思議やなあ、乗り鉄し過ぎて不眠症なりかけてるかもしらへん・・・

そうして、電車は北上して行き、横浜に到着。ここまで来るといよいよそこかしらビルばかりになる。ここからは普通を名乗つていてるくせに品川まで二駅で着いてしまうので実質快速みたいになる。首都圏に新快速みたいなやつがないのってこういうのも理由なんやろうか。

そして、多摩川を渡つて東京都に突入。いよいよ、この旅もクライマックスだ。

そして、17時28分。

『東京ー、東京ー。ご乗車ありがとうございました』

「「「ついたー!!」」

大阪から10時間28分、ついに東京駅に到着。五人全員が降りたのを確認して全員でガツツポーズをあげた。

第三十四話 「夢の国への道のりはいささか過酷である」

大阪から10時間と28分と半日近く電車に揺られ、ついに東京駅に到着。

さつきまでの疲れは何処へやら、気付けば鉄道部員全員が元気120%になっていた。

一体、有楽町ぐらいまで爆睡していたこの4人は、どないしたらこんな短時間で元気になれるんや。

「部長・・・それで、これからどうするんですか・・・」

「せやな・・・まず毎年恒例の記念撮影や」

東京駅での記念撮影は鉄道部の東京遠征の毎年恒例のオープニングイベントだ。毎年、東京駅のどこかの出入口で記念撮影を行うのだが、それを選ぶ方法は・・・

「それじゃあ、部長。どうぞ引いてください」

香里奈がリュックから中に紙が入った小さな透明な箱を取り出す。もう分かつたか？

せや、くじ引きや。

この箱の中には東京駅の全出入口のうち、『丸の内口』、『八重洲口』、

『日本橋口』、『京葉地下丸の内口』の4つの出入り口の名前が書かれた紙が入つていて、その年の部長がくじで引いた出入口で記念撮影をするという慣例になつていて。参考に過去4年のくじの結果は・・・

2017年	八重洲口
2018年	日本橋口
2019年	日本橋口
2020年	丸の内口

となつていて。

さらに、丸の内口は丸の内口でも、『京葉地下丸の内口』は一番のハズレくじ。東京駅の構造をよく知らない人は『同じ丸の内口なんやから近いんちやうん?』と思う人もいるかもしれないが、この出入口は「ぬわああああつ! 京葉が当たつてもうたゞ!」・・・一番のハズレが当たつてもうたみたいや。現に、部長の顔色は真っ青になつている。

「あ、朝潮・・・引き直していいか?」

「ダメです♪」ニコツ

「クソがッ!」

「・・・お、落ち着いてください・・・」

「そーだよ、ここ駅のホームだよ」

「ハツ!」

紗里の言葉で部長は我に還つたようで、キヨロキヨロとホームを見回し、自分に視線が集まつてゐるのを自覚して、顔を真っ赤にする。「それで・・・今年は京葉地下丸の内口か。ここ数年は出てへんかったはずなんやけど」

と言つて頭を抱える。ちなみに最後に京葉丸の内口が当たつたのは7年前の2014年。上野東京ラインが出来てからは一度も当たつていなかつた。

「あ、とりあえず行こか」

「ええ・・・」

そんな訳でその改札口がある京葉線ホームへ向かう。ところがその京葉線ホームというのは鉄ならご存知の通り、アホみたいに遠い。

もともと新宿方面に延伸できるようにつくられた成田新幹線用のホームを流用したせいで普通に500mぐらい離れているのだ。これは東京メトロ丸の内線の新宿→新宿三丁目間（約300m）の方が短いという酷い有り様。

しかも、大荷物を背負っているのでかなりしんどい。エスカレーターの上にある表示には「あと350m」の文字が。

「あと、350mか・・・まだ歩くんやな」

「しんどーい」

見回すといっぱい人が歩いていて、中には某夢の国に向かうと思しきネズミの耳のカチューシャをつけたミーハーどもちらほら見かける。しかし、そんなもんは俺達には関係ない。

「あ、歩く歩道だ」

しばらく歩いていると梅田でよく見る歩く歩道が見えてくる。もちろん使う。ああ、ラクや。

そこからは、また少し歩いてようやく京葉地下丸の内口に到着。徒步20分もかかった。

「ようやく着いた・・・」

「いやー、大変やつた」

「ほな、早速で悪いけど香里奈、撮影頼む」

「任されました！よいしょっと・・・」

そう言つて香里奈は愛用のカメラバッグからD6を取り出す。

「じゃあ、皆さんちよつと移動してください」

そして、人の迷惑にならない場所に移動して、香里奈がバッグから三脚を取り出し、立てる。・・・ようそんな華奢な体で重い荷物ばかり持つてこれたな。

「はい、じゃあ撮りますよ」

タイマーを設定し終わつて、香里奈が戻つてきて、いよいよ準備完了。

カシヤ

「あ、確認するんでちょっと待つてくださいね」

「写真、大丈夫やつた？」

「はい、見てください、バツチリです」

カメラの画面には全員がしつかり改札口の全景に収まつていて、完璧な集合写真になっていた。

「おし、これで記念撮影は撮れたな」

「じゃあ、次行きましょうか」

第三十五話「O r a O r a d e S h i t o r i e g u m o」

「ほな部長、次はどこ行きます？」

「うーん、ちょっと早いけどまずホテルやな。この荷物をどないかしないかん」

「そうですね、もう持つてるだけでしんどいですもん」

「あたしも、さつさと荷物置いて自由行動したいからねつ」

「…僕もそう思います」

全員の意見が一致したのでこれからホテルに向かう。しかし…

「これ…またあそこまで戻るん？」

「「「うわー、やつてもうたなこれ」」」

忘れてる人がいるといけないので先に言つておくが、今俺達がいるのは京葉線ホーム。

そう、最早東京駅と呼ぶのもおこがましいほど他の路線のホームと離れているあの京葉線ホームだ。（ここに来た経緯は第三十三話に書いたあるから、それ見てくれ）

「どうする？もうそんなに体力残つてへんし」

「ていうか、めちゃくちゃタイムロスなりません？こうなつたら一旦京葉線乗つてもうて、八丁堀か新木場で乗り換えるつてのも…」

「総一さん、それもいいですけど、もう有楽町まで歩きませんか？」

「「有楽町…ああ、その手があつたか」」

香里奈が名案を示してくれた。実は、東京駅の京葉線ホームから山手線とかのホームまで行くより、一駅となりにある有楽町駅まで歩いた方が速いのだ。事実、新橋・品川方面から有楽町駅と京葉線の東京駅まで、またはその逆の経路との間には改札外乗り換えの特例があるほど近いのだ。逆に、どれだけ他の東京駅から離れているかがこれで分かる。

「ほな、有楽町まで歩く？」

「そうするか」

「・・・仕方ないですね」

ここまで来てしまつたら、もはや歩く以外で京葉線以外の路線に乗る手段が存在しないので仕方がない。

そんな訳で、有楽町まで歩くことに。ただ、土地勘は全くないのでその乗り換えを取り上げているブログを見ていると、どうやらルートはこのまま、東京国際フォーラムを突つ切つて有楽町駅に行く方法と、地上に出て線路沿いを歩き続けて有楽町駅に行く方法の二つあるらしい。個人的にはここから少し歩いた京葉地下八重洲口から出る少しレトロな雰囲気を味わえるルートが好きだ。

「なあ、俺ちょっとこっちのルートで行つてみたいんやけど」

「え？ こっちからですか？」

「え、それ、ちょっと遠回りのルートやん。俺はこっちのルートで行きたいんやけど」

まあ、そら近い方行きたいですよね。そんな訳で、八重洲口ルートで行きたがっているのは俺だけだった。ただ、どうしても諦めきれないので俺は八重洲口ルートで、後の4人は東京国際フォーラムから有楽町駅まで向かうことにした。

京葉丸の内口から少し歩いて着いたのは京葉地下八重洲口。地下の改札なのでさつきとあまり変わらないように見える。

ただ、地上へと上がる階段を登つて振り返つてみるとそこにあつたのは申し訳程度にJR東京駅と書かれたちつさいアーチ状の建物だつた。

「これほんまに東京駅か？ ちょっと信じられへんな・・・」

足元にはお菓子のゴミもあつて、テレビとかで丸の内や、八重洲の駅舎を見慣れている俺にとつては、ほんまにここが同じ駅なんかと疑いたくなるほどの閑散ぶりだつた。

ただ、ここは地下街増設や新線ホームの増設など、ブクブクと拡張を続けた東京駅の果てなんや。何はともあれ、ここから有楽町駅までは線路沿いに歩くことになるが、途中にはレトロな店も多く、個人的には結構楽しい。さらに・・・

「うわっ、ここめっちゃええやん」

途中で丸三横丁というめっちゃディープな通りを見つけたのでちよつと寄り道して写真を撮る。こういう「ディープな雰囲気は新梅田食道街とか、阪神とJRの連絡通路に最近まであつたアリバイ横丁とかを思い出して、ちよつとだけノスタルジーな雰囲気になれた。

そこから、薄暗い高架下の商店街を抜けて有楽町駅に到着。既に時刻は6時半前で西日が傾き始めていた。

「総一さん！」

他の4人は既に到着していて、香里奈が手を振つて俺を呼んでいる。

「いやあ、お待たせお待たせ。結構レトロで楽しかったわ」

「ほな、全員揃つたことやし、今度こそホテルいこか」

「「「はーい！」」」

第三十六話 「日本一警備の厳重なホテル（多分）』

有楽町からはJRには乗らずに隣にある東京メトロ有楽町線の入り口に向かう。今回泊まるホテルはとんでもない場所にあるのだ。ヒントは『日本一警備の厳重なホテル（多分）』。

これで分かるかな？

俺達は事前に渡された黄色い切符で改札内に入る。この黄色い切符は『Tokyo Subway Ticket』というもので、なんと通常の一日乗車券よりもかなり割安な値段で、東京メトロ・都営地下鉄が一定時間乗り放題になるというお得なチケットなのだ。

しかも、このチケットには24時間有効、48時間有効、72時間有効の三種類があるが、今回はその中で一番有効期間の長い72時間有効のチケットを使う。

ちなみにこれを手配してくれたのは漫画研究部。委託販売のお返しらしい。

・・・しかし、一つ疑問がある。

このチケットは、基本的には関東1都7県以外のコンビニと旅行代理店で手に入るのだが、このうち、コンビニでの販売は、現時点では関西エリアでは一切行われていない。しかも、旅行代理店ではパックツアーリーとの抱きかかえでしか売っていない。俺達は個人旅行なのでもちろん対象外だ。一応スマートEXの特典で買えることはないが、もちろん在来線で来たので対象外。

となると、アイツらはどうして買ったんやろか・・・

・・・まあ、ええか。そんなん気にしてもしやあないし。

そんな事を考えている間に、他の4人は既にホームに入っていたので俺もそれに続く。

それと同時にやつてきた34分発の石神井公園行きに乗りこむ。車両は有楽町線開業から走り続け、ついに全車引退が発表された7000系。

「お、7000系やん」

「やつたー、結構珍しいやつだ」

「あれ? 平林、7000系つてまだ結構走つてると思うんやけど・・・」

部長が紗里にそう問いかける。

「そうですよ。でもねえ、有楽町線ではあんまり見かけないんですよ」
「?」

「実はですね、7000系つて8両編成と10両編成があるんですけど、10両編成の本数自体がかなり少ないんですよ。しかも、10両編成は副都心線にも入る・・・」

「はあ・・・」

「さらにつ! 有楽町線は10両編成しか運用されません。そんな訳もあって、この路線で7000系を見かけるのはすづく難しいんです。元々、有楽町線用の車両だつたはずなのに副都心線が出来て、そつちに回されて、古巣ではほとんど見かけない・・・皮肉な結果ですよ」

紗里は、普段の彼女では見られないような真面目な口調で部長に説明する。読者の諸君は忘れてるかもしねないが、紗里は車両鉄なので車両についてはかなり詳しい。鉄になつて1年ぐらいしか経つてないのにどうしたらこんな成長を遂げるんやろか・・・

「そ、そうか。ありがとな」

「いえいえ、車両鉄ならこれぐらいは知つとかないとねつ☆

説明し終わると、元のギャルっぽい口調に戻る。

そんな事を話していると乗り換える駅である市ヶ谷駅に到着。ここからは南北線に乗り換えるのだが・・・

「香里奈ー、行くで」

「ちよつとだけ待つててください、もう撮れるんで・・・」

さつきの紗里の話に触発されたのか、香里奈がカメラを構えて撮影していた。しかも、わざわざ、人の迷惑にならないようなスペースを見つけて。ようそんなとこ見つけたな・・・

香里奈が撮り終わるのを待つて、少し歩いて南北線ホームに到着。この路線のホームには大阪ではニュートラムぐらいしか見かけないフルスクリーン型のホームドアがあるのでみんな興味深そうに見ていた。まあ、後2年ぐらいしたら大阪駅でも見られるようになるんやけど。

次に乗るのは50分発の白金高輪行きの普て・・・各駅停車。関西では南海以外で各停つてあんまりないからな。言いなれへん。

それに揺られてホテルの最寄り駅である溜池山王駅に到着。そこから少し歩いて今回泊まる大手チエーンのビジネスホテルに向かう。で、これのどこがどんでもない場所にあるかつていうと、このホテルのある場所は『溜池山王官邸裏』。

もう名前でわかつたやろ、このホテルはなんと総理大臣官邸の裏つ

側にあるのだ。嘘やない、ほんまにあんねん。

「ほ、本当に官邸が目の前にあるんですね・・・」

「この中に時の總理が・・・」

「しかも、バリケードあるじやないですか。これどうやつて通るんですか・・・」

そう、ホテルへ向かう道にはなんと警察官が見張りしているバリケードがあるのだ。流石、官邸の隣だけある。しかも、後で調べたらこれ、24時間体制だとか。これが冒頭に出したヒント『日本一警備の厳重なホテル（多分）』の正体だ。

「すいません、ホテルに泊まるんですけど」

「ホテルですか？どうぞお通りください」

俺がホテルに泊まる旨を伝えると警察の人がバリケードをどかしてくれた。なんかすごい。

そんな訳でホテルには7時ぐらいに到着。

今回は夏休みシーズンで4部屋しか取れなかつたので、恋人関係である俺と香里奈が同じ部屋に泊まることになった。

そして、その辺のサイ?リヤで夕食をとつてすぐにホテルに戻る。

そして、時刻は深夜の0時50分、事件は起こる。

「それじゃあ、始めるか・・・」

「ええ・・・」

第三十七話 「腹を割つて話そう」

（s i d e 部長）

ここは総理大臣官邸の真裏にあるビジネスホテル。既に日付を回つていて、廊下も真っ暗だ。俺、岸辺弦一郎は昨日の10時間の行軍の疲れを少しでも取ろうとぐつすり眠ろうとしていた。しかし、あのバカツップルによつて事件が起ころ。

「部長、どないしたんですか」

「どないした？ やないねん。俺はもう電気を消して寝てたんや。そこにバカツップルのキミ達がだあ！ ドアをノックしまくつて何やと鍵開けたら、なんであんたらが入つて来て『腹を割つて話そう』つて言いに来たんよ！ ちゅうか待て。なんでカメラ回してるんや。学校に流すつもりか。よし、分かった。全校生徒と教職員と読者に訴えてやろうやないか。今日ここで何があつたんかをな」

「部長、メタイです」

尚も俺はまくし立てる。

「あんたらに言われたないわ。そんで、読者のみなさんもご存知、俺達は東海道線を大阪から東京まで10時間半かけてやつてきたんや。みなさん見たやろう、私は青山町から実質、12時間も電車に乗り続けた弦一郎さんですよ。クツソ重い荷物で東京に行つて、一駅分歩いて、地下鉄を乗り換えてこのホテルに着いたんですよ。着いたのは夜の7時過ぎや。もう家出てから14時間も経つてたんや。そつからあんたらが『サ??ゼ行きたいです』つて言つて一駅隣の赤坂見附まで行つて飯を食つて、もうくたくたでホテルに戻る途中で道に迷つたせいで時間はもう9時過ぎや。それで明日の確認とシャワー浴びてさあ寝ようとおもたんが10時半や。ぐつすり寝ていたのに突然やつてきたんがこのバカツップルちゅう訳ですよ」

もうお分かりだろう、某テレビ番組のごとく総一と香里奈のカツップルが浴衣姿で部屋にやつてきたのだ。しかも香里奈の方は少し色っぽくなつていて。・・・こいつらヤルことやつてここに来たんか・・・「何をどち狂つたかは分からへんけど、このアホどもがやつて来て、別

に話すこともないのに『腹を割つて話そう』とこのバカツプルは俺の部屋に乱入したゆうわけや」

「別に俺はこいつらになんの蟠りもない、頼もしい後輩や。別に腹割つて話すことなんてないはず。ところが彼は俺に『腹を割つて話そう』と言つてここに居座つて……時計見てくださいよ」

俺はベッドの上にある時計を指差す。

「今、0時54分や」

既に乱入から1時間近く経つてるんや。

「もう彼らは1時間ここから離れようとしないんや。せやろ？まだあるんですよ。それで私は再三『帰れ』って言つてるわけや。もう可愛くて、有能で、俺が引退しても鉄道部を任せられる。そんな奴らなんですよ。しかも俺はこいつらに一度も叱つたこともない」

「そんな人達にさつきから俺は『アホンダラ！』『帰れ！即刻帰れ！』と再三罵声を浴びせているにもかかわらず、帰らないんですよ。そして私は苦肉の策として別の部屋にいる、これまたアホのギャルなんだけども、平林にい！電話をしたわけですよ『バカツプルが帰らへん。部屋に戻してくれへんか』と。そしたらね、彼女なんて言つたか分かります？『そなんんだー。わつかりました。じゃあ、カメラ回そつか』ていつて今、平林はスマホのカメラを回してるんです！どうですか皆さん、おかしいでしょ？この人達はあ！」

「どうもー、平林紗里でえす」☆（ゝ。）

「俺はね、寝かしてくれつていつてるわけですよ。皆さん、俺達が何時に起きなあかんかご存知ですか？俺は4時にい！4時にコミバの最終確認をして始発でりんかい線の国際展示場駅まで行くんですよ！この時点での私の睡眠時間は3時間です。いやこれね、本家よりひどいよ」

本家は5時起きやからね。しかも、これで三バカどもは大爆笑。
「しかも、こんだけ電車に乗り続けてまだ疲労が抜けきつてない。なのにい！このアホンダラは大爆笑しながらまだ俺と腹を割つて話をうとしてるんですよ！この状況をどう思いますかあ！」

一通りジタバタして、叫び終わると、今度は香里奈が口を開く。

「いや、私達が言いたいのは、明日の朝4時に起きなきゃいけないって
いう『確認』に来たんですよ。明日始発で行きますから」

「あー、はいはい」

「急いでくださいねっていう・・・」

「それやつたらそう言つてくれたら良かつてん。何もな、『腹を割つて
話そう』と息巻いて入つてこんで良かつた話やん」

「4時やからね、決して遅れへんようになつて事を言いに来たんですよ
「そーですよ」

こんな風に適当に受け答えしてたら飽きて帰るやろ・・・と思つて
いたが、

「言いに来たら、なんか部長が・・・腹を割つて話そうと」

香里奈の一言でまた話が振り出しに戻つてしまつた。

「ちーがーうだろ、違うだろ！それは全然ちやう！別に俺は何も話す
ことはない！」

（10分経過）

「ええか？ある男がな、夜中の0時にや。もう4時に起きなあかん男
やねん。もう10時半回つてたから寝ようかと、それでぐつすり寝て
いたところに『腹を割つて話そう』と言つて入つて來たカップルが1
時間居座つてゐるわけや」

現在俺は2回目の説明タイムに入つてゐる。もうこいつら分かつ

てるやろ。

「「W W W W W W」」

「そんなアホに『おい帰れ！』と言つたことはなんの不思議もないんや！」

「いや、ですから。部長が怒つてないつて言葉を聞かさせてくれたら……」

「さらに5分経過」

「ハア、わあつた。朝潮、明日4時に起きるんやんな？」

「はい、4時起床です」

「あつ、てことはあ、後3時間しかないわ。こらいかん。申し訳ない」

「お互いに失笑するが、俺の目は全く笑つていな」

「ですよね？私達は早く寝て朝に備えてくださいねつて言いに来たんですね」(^ ω ^ @)

「そうか、早く寝ないと大変だよつてわざわざ1時間もかけて説いてくれたんやな。そらありがとう。やつと分かつたわ」

（20分経過）

「もう話すことはありませんか？」

「うんうん、もう聞きたいことは全部聞いたから」

「頑張つてください、部長」

「ぶちよー、がんばつてねっ☆」

「うん、明日売つて売つて売りまくるからな。いよーし、よしよし……」

「ほな、4時にお願いしますね。おやすみなさい」バタンツ

1時間40分ぐらい居座つてようやく帰つていった。流石に本家みたいに二回目は来ないと信じたい。あいつらも4時起きやし……

（総一 sides）

時刻は2時ちょうど。今、俺は部長の部屋の前にいる。もちろん、香里奈とカメラ役の紗里も一緒だ。俺達は再び部屋に侵入して電気をつける。

「すんません、部長」

「www」

部長はぐっすり寝ていたようだが電気がついてすぐに苦笑混じりに起き上がる。

「あれ？ どないしたん？」

「あつ、鍵持つてつたんか」

「そうそう、部長の部屋のカードキーとうちの部屋のカードキー間違えちゃつたんです。夜分にすいませんね」（ノ∀、。）。。アヒヤヒヤ、

「「ハハハツ」」

そこから少し経つて・・・

「帰りなさいよ」

「帰りなさいよやないですよ！ 今、この鍵を間違えてね・・・」

「そこからまた10分が経ち・・・」

「ハア、トランプでもあつたら夜を明かせるんやけどな。後、どうせ出来ひんと思うけど4人で卓を囲みたいな・・・」

「トランプ・・・はないですね。でしたら、スマホ持つてます？」

「スマホ？ ああ、あるけど」

部長がそばにあつたスマホを手に取る。

「トランプは出来ませんけど、麻雀やりましよう！」

「ハア？ いやな、確かに俺は麻雀出来るよ。でも、そういう意味で言うたんちやうんけど・・・何もこんな丑三つ時に麻雀することないや

ん・・・

「ええやん（いいね！）やろうやろう！」

「これで部長以外の3人が賛成。これでもう断られへんやろ・・・

「ハア・・・分かった。やるよ、やつたろうやないの」

ついにやる気になつたようだが、なんか部長の様子がおかしい気が・・・

「乗り気になつてくれましたね部長。それでどうしますか？もう夜ですしき、一局清算でも・・・」

「・・・いや、一莊戦や」

「「「？」」「」」

部長の言葉に俺たちは戦慄した。というのも麻雀は東一局から南四局まで八回対戦する半莊戦はんちゃんせんが基本なのだが、部長はさらに西一局から北四局までもう八局行う一莊戦いっちゃんせんを行おうとしているのだ。一莊戦は麻雀の中では一番対局数が多く、日本ではほとんど行われていな。部長はそれをこんな夜中にやろうとしているのだ。しかも香里奈が用意した麻雀の対戦サイトは一莊戦にも対応していた。つまり俺たちに逃げ場はない・・・

「そ、そーくん。アタシ達どんでもないことになる気が・・・」

「奇遇やな。俺もそう思うわ」

現に部長の周りにはドス黒いオーラが漂つていて・・・

「ハハつ、散々人を寝かさずによう弄んでくれたわ・・・」

「「・・・」」ワナワナ

「さあ、今夜は寝かさへんで」

「ロン！立直・一発・三暗刻・対々和・連風牌・ドラ×6！締めの数え役満、48000点や！」

「「・・・」」「チーン

え？あの後どうなつたかつて？部長がバーストモードになつてオーラスまでトップ独走や、俺たちの最終持ち点を合わせても10000点いかへん。部長の完全勝利やつた・・・

「ハハハッ、やっぱりあんたらとおると楽しいわ！一生飽きへんな、これ！」

「さ、さいですか・・・」

今、部長は頭のネジがぶつ飛んだようでめちゃくちや元気になつている。

ハハッ、やつぱり人の寝込みに乱入するもんやなかつたな・・・

第三十八話 「さあ、本番だ！」

「ハハハツ、もう4時になつてもうたわ」

「「ああ・・・眠い」」

まさかの麻雀対決で『腹を割つて話そう』の借りを返されてしまつた俺達は疲労困憊の状態でコミバへ向かうことになつた。

「あ、あの、白庭先輩・・・」

「？」

「なんで・・・みんなこんなに疲れてるんですか？」

「そんなん気にしたらあかん。いよいよ本番やからな」

圭人の質問に俺は笑つて返す。

そして、朝食のことだが、もちろんレストランなど開いているはずがないので事前に買つたおにぎりと10秒チャージのゼリーを食つていよいよホテルを出発。

まあ、出発するということはもちろんあのバリケードを通る訳で：「あれ、君達こんな時間からそんな荷物背負つてどこに行くんかい？」

警察官に止められてしまつた。

「今から始発電車でコミックバザールに行くんです」

「ああ、あの始発電車で行くんだね。あの電車はとにかく混雑してのから氣をつけて」

「はい」

「じゃあ、通つていいですよ」

事情を理解した警察の人が開けてくれた。いやあ、理解のある人で良かつた・・・

一応、乗換案内で調べたら目黒経由のルートと新橋経由のルートがあつたが、今回は電車の時間が遅い新橋経由のルートで向かうことになった。目黒経由やつたら17分待ちがあるからな。

という訳で本日最初の電車は銀座線の一番電車、5時11分発の浅草行き。

「誰もおらへんな・・・」

「銀座線つて言つても一番電車ですからね」

そんなほど貸し切り状態の電車に揺られて3分ほどで新橋駅に到着。ここでJRに乗り換え、りんかい線の乗り換え駅、大崎駅まで向かう。

途中には最近開業した高輪ゲートウェイ駅や、田町車両センターの成れの果ての留置線群を眺めて、大崎駅に到着。

跨線橋を渡つてりんかい線のホームに着くと・・・

「うわっ、こらひどいな・・・」

「覚悟はしてたけど、ここまですごいとは・・・」

既にホームの上は人でいっぱい、何とか歩けるぐらいの隙間しかなかつた。まあ、埼京線とかは大崎からの始発は遅いが、山手線は俺たちが乗つた外回りだけでも既に4本（始発除く）やって来ているので混雑は予想してたけど、まさかこんなまで混んでいるとは思わんかつた・・・

「去年は7時ぐらいにゆりかもめで会場に行つてましたからね」

「ま、まあ、これのために来たんや。怖気ついてられへんわ」

そんな事を言つてはいるとりんかい線の一番電車、5時40分発新木場行きが入線してくる。こいつはりんかい線内しか走らないが車両はJRのE233系だつた。とりあえず出口に近い4両目の前から4つ目のドアから乗ろうとするとかなりギチギチになつていた。

「こ、こんな混雑、御堂筋線でも、見ませんよ・・・」

「そら、日本全国、下手したら海外からも來てると思うからな。ほら、見てみ」

俺が指差した方向には座席に座つて困惑した様子で話す外国人と思しき男女二人組が。

・・・恐ろしきクールジャパンや。

『2両目と4両目は大変混雑しております、ご乗車のお客様は後ろの10号車をご利用ください・・・』

さつきからこんなアナウンスがひつきりなしに流れていて、発車間になつても多くの人が編成中程に乗り込んでいた。あと、冷房がガンガン効いてるはずなのに暑い。心なしか、湯気が立ち込めている気がするんやけど・・・気のせいやろか。

♪♪♪

そんな事を考えていると発車メロディが流れ定刻通りに大崎を出発。

山手線と分かれてしまふと地下に潜つていよいよ地下区间がスタート。

ここから国際展示場まで約15分通勤ラッシュ並みの始発電車に乗るのだが・・・

『大井町、大井町です・・・』

電車は最初の停車駅、大井町に着いたが、ただでさえ乗車率が100何%ある電車に、京浜東北線と東急の乗換駅ということもあつてか、ドアが開いた瞬間、雪崩の如く人が入ってきてあつという間にすし詰め電車が完成した。

「あかん、暑苦しい・・・」

「えぐすぎ・・・」

そんなこんなで時間は過ぎていき、一駅前の東京テレポート駅を出ると、にわかに車内がざわつきだす。いよいよ国際展示場駅名物、始発ダッシュの時間や。

「ええか?ここで歩いてもうたら、かえつて後ろの人々に突き飛ばされるかもしらんから、全速力で逃げるんやで」

「「「はい」」」

そして、

『・・・The next station is Kokusai-tenjijo, station number R03. The doors on the right side will open.・・・』

この放送が聞こえるとざわついていた車内は一気に殺氣立つ。

「ヒ、ヒイイイイ・・・」

「圭人、気持ちはわかる」

そら、後ろには殺氣立っている熱気ムンムンの男達が沢山いるからな。

そして・・・

ピンポン、パンポン♪

扇が開くと
一斉に車内から人が飛び出してくる。勿論、ドアの真
ん前にいた俺たちは、そころてんみたうに人に押し出される事に。

しかも、後ろには大手サークルの同人誌や企業ブースで販売されるグッズなどの目当ての商品を手に入れるべく、一秒でも早くビッグサイトに向かいたい何百人の人々。そんな光景を目にしたら……もう分かるやんな。

逃げろー！

俺達は一目散にエスカレーターを駆け上がり、すぐ上の改札口へ向かってダッシュする。

危ないです！走らないでください！」

駄馬さんかノガホンで注意しているものの、歩いていると後ろに餌み込まれてしまうので走らざるを得ないのだ。

ただ、俺は一番最初にエスカレーターを上がれたので、人が集中する中央部を避けて駅員室に近い一番端の改札を早歩きで通つて、コンビニの方へと捌ける。

「ふう、何とか通れたけど……他の奴らやな」

う。振り返ると後ろには紗里がいた。多分、俺の後について来たんやろ

「あとは、部長と圭人と香里奈やけど・・・」「お、俺はここやー

私も

部長と香里奈が揃つて改札から出てきた。これで圭人が揃えば全員集合なんやけど・・・

たゞ、既に改札口には人が沢山。もうしばらく出て来なそうや

圭人がやつて来たのはそれから6、7分ぐらい後のことだつた。

「さて、全員集合したんやけど、あまりにも朝早く来過ぎてもうたん
で、あと2時間半ぐらい余裕があるんよ」

「何しましょう・・・」

「麻雀やるか！」

「「「いえ、それだけは！」」

もう麻雀はさつきまで充分やつたから・・・

「うーん、ほな・・・」

（2時間後）

「あれ？ もう8時ぐらいなつてる」

「どうしてでしょ？」

「ああ、それはな、作者が面d（し一つ、余計なこと）と書いたらあかん！（
いや、何もない）」

「「「？」」」

ううん、俺が言おうとおもたのに、主に口止めされてしまった。

「まあ、ちょうどええ時間やし、そろそろサークル入場口に行くか」

「「「はい（わかつたー）」」」

そして、広い通路を歩いていくとビッグサイトが間近に現れて、サークル入場口に到着。係員にサークルバスを見せて中に入る。

「さて、今年も壁スペースが当たつたからな。ジャンジャン稼いで部費の足しにしな」

部長が言う壁スペースと言うのは文字通り壁際に配置されたスペースのことで、基本的には長蛇の列が予想される超有名サークルのことで、俺達、長堀学園高校鉄道部はそんなに有名ではないものの、コミバの中でもトップクラスの連続出展回数を誇っているので、半ば年の功という形でスペースが与えられている。

スペースに行くと、そこには既にダンボールが7箱ほどが置かれていて、そのうち3箱には鉄道部、2箱には委託販売の漫研部の同人誌、後の2箱にはコスプレ衣装などその他諸々が入っている。一応、他にも荷物があるが・・・ギターケースっぽいのと細長い何かが置かれていた。

中身を確認したら、本の一部をデスクに載せて事前に作ったポップを置いていく。

「あ、香里奈と紗里。もう更衣室開いてる思うから着替えて来たらええんちゃう？ 利用券渡しとくわ」

「分かりました。じゃあ、後はお任せしますね」

そう言つて二人は更衣室利用券と衣装を持ってどこかに向かう。

その後は釣り銭の準備などの作業を済ませ、二人の帰りを待つ。しかし・・・

「あれ？なんか遅ないか。もう更衣に行つてから40分ぐらい経つんやけど」

「k、更衣室が混んでるんじや・・・「お待たせー！（しました）」」 言つてたら来ました・・・」

「いやー。なんかね、着替えはスムーズに済んだんだけど、どう見ても

本物のリサ姐とりんりんだつていろんな人に騒がれちゃって、その人達を撒いてたんだ」

「似過ぎることの弊害がこんな所に・・・

「そうや、この荷物何か分かるか？」

「あ、それ私達の楽器です。せっかくガールズバンドのコスプレをするからには、楽器がないと話にならないじゃないですか」

「だから、自分が弾ける楽器を家から持つて来たんだ」

ほら、と二人は自分の楽器を見せてくる。紗里は焦茶色のベース、香里奈は銀色のショルダーキーボード。担当楽器まで本家と一緒に揃つて・・・

「でも、調べてみたら楽器自体は微妙に違つてたんですよ。本家はベースは赤色、キーボードは肩掛けじやない普通のでしたから」
肩掛けはフィンランドのハーフが使つてますと補足して説明する香里奈。よう、そこまで調べたね。

全員揃つたので、両隣のサークルに挨拶をし、10時に一般入場が開始。

最初は何回も来ていると言う常連さん（大体40代くらい）達や元鉄道部の先輩方が買いにきてくれたが、時間が経つにつれ、二人の 모습が増えた人達があれよあれよとやつて来る。

「香里奈、大丈夫か？」

「は、はい。に、二回目、ですけど、き、緊張つ、します！」

「――「おおー！」――」

「今の、聞いたか？」

「ああ、本物に似過ぎてさむけがしたぜ！」

「はーい、ご購入の方はこちらでーす」

「は、はい。260円のお返しです・・・ありがとうございました」

撮影のついでにと買ってもらい、飛ぶように本が売れていき、昼ぐらに漫研部の同人誌が完売。俺達の同人誌もほとんどが売れてそのまま16時前に終了。

急いで片付けと搬出を済ませて、会場を後にした。

く ゆりかもめ 東京ビッグサイト駅く

「圭人、初めてのコミバはどうやつた？」

「ネットでは見たことあつたんですけど・・・全然違いました」

「せやろ、やつぱりリアルが一番やからな」

「じゃあ、総一さん。今からどこ行きましょか」

「なんか東京名物でも食べたいな。もんじや焼きとか一回食つてみた
いな。なんか皆、ゲロみたいな見た目しててるからまずそうつて言つて
たし」

「じゃあ、そこに行きましょか」

「さんせーい！」

そんな訳で打ち上げはもんじや焼き店でうことになつた。

第三十九話 「3Dアニメなのに一人だけ2D作画の人」

東京ビッグサイト駅からは豊洲行きに乗つて終点の豊洲まで行き、有楽町線に乗り換える。

やつて来たのは西武線直通石神井公園行きの各停。車両は西武の最新鋭、40000系やつた。車内はあの始発ほどではないものの、始発の新木場から乗つて來たと思しき乗客が多く乗つていて既に席は優先座席以外ほとんど埋まっていた。まあ、次で降りるから関係ないんやけど。

電車は2分ほどで月島駅に到着。この辺りはもんじや焼きで有名で、ここから少し離れた佃地区は40年間休まず連載し続けた漫画の主人公の祖父が住んでいる場所としても有名だ。

名前は・・・両津勘兵衛やつたかな。

そして、少し歩いて着いたのは『環たまき』というもんじや焼き屋。結構な老舗で味は確からしいのでここを予約した。
「いらっしゃいませ！」

応対してくれたのは黒いジャケットに青と白のボーダーシャツとエプロンを纏つた若い女性の店員さん。

「5人で予約した岸辺です」

「岸辺様ですね、こちらへどうぞ」

言つて6番という札が置いてある座敷に案内される。

「ほな、なんか注文しよか」

「一応、お好み焼きもあるみたいですが、やっぱりもんじや焼きですか」

「まあ、友達が散々ゲロやゲロや言うてたけど、うまなかつたら人気にはならんからな。ほな頼もか。すいませーん！」

部長が手を挙げてさつきと同じ店員さんに注文すると、喜八洲の包装スピード並みの速さで具材が入つてくる。

「あ、あたしやつてみたい」

「別にええけど、ちゃんと作つてや」

「ふふん、この紗里ちゃんに任せなさいつと」

言つて紗里は早速スプーンで具材をすくつて、鉄板で炒め始める。

・・・手際良くないつすか？めちゃくちや上手に焼いているんやけど。

言つてる間に紗里は既に土手を作り終わつて出汁を流し込んでいた。

そして、もんじや焼きが完成。見た目は本当に美味そうで、店の人
が作つたんちやうんかと言う程の出来栄えだった。

「じゃあ、お疲れさん言うことで食べましょう！」

「「「はーい！」」」

「・・・なんやこれ。めっちゃ美味しい」

しかも味も一級品。材料がええ言うのもあるかもしないが、それ
以上に紗里がうまく作つたので端的に言うと、めっちゃ美味しい。

その出来栄えに、どうやら店員さんも感嘆したようで・・・

「キミ、すごいね！うちで働いてみない？」

「いやー、あたし、家が佃らへんにあるんですよー」

「佃!?いいじやん、そこなら定期代ぐらいこつちで出せるよ。時給
も弾むよお〜」

「マジですか!?」じゃあ、ちょっと定期代調べますね」

もう気付いている人がいると思うが、紗里が言つている佃は『大阪
市西淀川区』の佃で店員さんが言つている佃は『東京都中央区』の佃
である。無論定期券代はアホみたいに高いに決まっていて・・・

「出ましたー」

「どれどれ・・・」（。Д。）チーン

金額を見た店員さんが失神してしまった。金額は阪神・JR西・F
LEX2区間・JR東・東京メトロの1カ月定期を合わせて41万4
700円。そら、失神するやろ・・・

その後、事情を説明してなんとか誤解が解け、打ち上げを続け、終
わつたのは大体19時過ぎぐらいだつた。

「ありがとうございましたー」

精算を済ませて外に出る。

「ほな、ホテル戻るか」

「あ、すいません。私、ちょっと撮りたいものがあるので、後で帰つて来ていいですか」

全員で戻ろうと駅まで戻り、電車に乗っている途中、香里奈がそんなことを言い出す。

「別にええけど、帰つてくる時にはMINEで連絡しといてくれ」

「分かりました」

そう言つて香里奈は有楽町で降りていった。何を撮るんやろう‥‥

（香里奈 sides）

さて、今私は有楽町から京浜東北線に乗つてある場所に向かっています。その場所とは‥‥

『御徒町一、御徒町一。ご乗車ありがとうございました』

上野駅の一駅手前、御徒町駅です。時刻は20時25分。一体なんでこんなところに撮影にきたんやつて思いますよね。実はリアな電車がもうすぐやってくるんです。

撮影場所を構え、カメラの準備を済ませるとまずやつて来たのは、常磐線快速の成田行き。実は成田線開業120周年記念のスカ色帯のマト139編成が連結されてるんです！さつき、すきま時間に運用表調べてたらこれを見つけて私大興奮です！

そんな訳で早速撮影。いい写真が撮れました。

そして、いよいよ本命がやつて来ます。

やつて来たのは湘南帯のE233系。ここまでなら普通の光景ですが、行き先表示には『普通 黒磯』と書いています。これが本命。実は黒磯行きと言うのは小山以南では1日1本しか走っていません。ていうか小山～宇都宮間も数本しかなく、こんな長編成で走らないので激レアなんです。昔は沢山走つてたんですけどね。しかも、熱海始発で宇都宮以北の最終という属性でんこ盛りの電車です。赤髪ツインテールで主人公の妹で秘密組織の司令官の某精霊みたい。

私は絶対に逃すまじとシャツターレを切ります。撮影成功でした！でも、スカ色帯の編成と1日1本の黒磯行きどどつちが本命かわからなくなりますね。どつちでもいいか。

そんな訳で大満足の私は急いで総一さんにMINEを送つてホテルに帰りました。

第四十話 「フタリのdestination」

朝6時半、俺は起きて出かける支度を始めていた。去年まではコミバが終わつた日のムーンライトで帰つていたのだが、ムーンライトが無くなつて、鈍行乗り継ぎになつた今年からは2泊目の後に青春18きっぷを1枚づつ渡して現地解散をするという方式になつた。いわば、すぐに帰るか観光して帰るか選べるのだ。ただし、ホテルは各自で取るようにとのこと。

ちなみに俺は今日大阪に帰る。決して作者がネタが切れた訳やないからな。しかし、せつかくならということであることをやつてみようと思う。

「……ん？ 総一さん、もう朝ですか……」

ちようど香里奈も起きたようだ。眠そうに俺に話しかける。

「いやあ、今日帰ろうと思うんやけどな。せつかくやし、中央本線経由で帰ろうと思つてな。時間はかかるけど東海道本線よりおもうそろやし。香里奈も行くか？」

そう、中央本線経由で大阪に帰るのだ。正確には名古屋までなんやけど。

「ええ、総一さんが行くなら。でも他の人に連絡を……」

「大丈夫や、3時ぐらいにMINEに送つたら、みんな既読ついたからな」

「皆さん、そんな朝っぱらから何をしてるんですか……」

「ナニでもしてたんちやうん？」

「ハア、女子の前でそんなこと言わないで下さい」

「ああ、すまんすまん」

「まあ、連絡は入れたんですね。じゃあ、準備するんで、テレビでも見て待つて下さい」

言つて香里奈が着替え始める……待て、目の前で着替えんの？

香里奈つてこういうとこあるんよ。結構、彼氏（俺）の前では結構無頓着になるとこ。

あんまり見ても仕方がないので、テレビを見て待つことに。なんや

この日テレポシ??って、こんな通販番組聞いたことないで。ビート??プスなら聞いたことがあるけど。あれか、関東ローカルか。

なんてことを考えていると準備ができたようだ。それと同じタイミングで部長からお呼び出しがかかり、全員集合。部長からきつぶをもらい、『まあ、次は始業式で会おう』という言葉で全員解散。早速ホテルを・・・

「そーくん、もう帰るの？」

「紗里、せや。ちょっと昨日張り切つて疲れてもうたしな」

「じゃあ、一緒に帰つてもいい?あたしもそーくんと帰りたーい」

そう言つて紗里が腕に抱きついてくる。そんなことしたら・・・

「平林さん、そんな事を私が許すと思いませんか?」

そら見たことか、香里奈様がお怒りや。

「えー、いーじやん。好きな人と一緒に帰つて何が悪いのさ」

「昔ならともかく、今の総一さんには私という彼女がいるんですよ。これから大阪まで私が彼を独り占めするんです」

「むむむー!」

現場は一触即発のムード。今にも殴りかかりそうや。

「ハア、そんなんやつてるんやつたら俺一人で帰るで」

仕方ないのでそう言い放つと二人は途端に絶望したような表情になり、

「仲良くするんで一人で帰らないで下さい!」

と涙を浮かばせて懇願してくる。そんなに俺と帰りたいんか?

「ほな、喧嘩して他の人に迷惑かけたらあかんで、もちろん俺にもな

「はい!」

二人と約束を交わしたら、早速ホテルを出て溜池山王駅・・・ではなくすぐ近くの国會議事堂前駅に向かい、池袋行きに乗つて東京駅に向かう。

東京に着いたのは7時ちょうど。早歩きでJR線のホームに向かい、道中のコンビニで食料を購入する。行きの東海道本線経由とは異なり、中央本線経由は非常に大回りになる上に、東海道本線は一番本数が少なくても30分に1本程度だが、こちらは2~3時間開く区間

が存在するので、かなり時間がかかる。タイトな乗り換えも勿論あるのでここで食べ物を買っておかないと大変なことになりかねないのだ。

「ほな、ホーム行くか」

一通り食料を買って、上越・北陸新幹線ホームの増設で地上3階に追いやられた中央線のホームに行く。京葉線といい、総武快速線といい、中央快速線といい、東京駅は縦にも横にも広い駅だと改めて実感した瞬間であつた。

最初の電車は7時37分発、765T中央特快高尾行き・・・765!?

「おー、アイマスっすねー」

「私、283のプロデューサーなんです・・・」

「ううん、俺は昔はミリシタやつてたんやけど、今はポプマスPやからな・・・」

「え？ 香里奈つてシャニマス派なの？」

「ええ、私の推しは風野灯織と和泉愛依です」

「正反対やん」

「ええ、でもこの取り合わせがまたいい・・・」

などと香里奈が恍惚とした表情で両手を組む。

「この人百合好きっすか？」

「いえ、単純に面白いからです。あと、総一さんはこんな二人の比じやないです」

「自分の推しをこんな呼ばわりするなんて・・・」

香里奈、灯織Pと愛依Pに謝つときなさい。でも、それだけ俺が愛されてるんはちょっと嬉しい・・・

そんな脱線しまくった話をしている間に発車時刻をむかえ、7時37分の定刻通りに東京駅を出発。これから大阪へ向けて長い旅路が始まるのだ・・・

第四十一話 「とある中央の特別快速」

7時37分、東京駅を出発。ちなみに座席は何とか確保出来た。

「でも、中央線の方は同じ電車なのにロングシートなんですね」

「そーだよ、昨日乗った3000番台はセミクロスだけど、この0番台は全部ロングシートだからね。だから約1時間このままだよ」

「1時間ですか・・・まあ、島田から熱海までの電車に比べたらまだマシですね」

「しかも、土日ダイヤで一番早いやつやからな」

一応説明しておくと、中央線には各駅停車と特急と快速のほかに、中野から西、立川まで快速運転する下りしかない通勤快速、通勤快速+荻窪・吉祥寺を通過の中央特快、中央特快の青梅線直通ver.の青梅特快、中央線最速、高尾まで快速運転する上りしかない通勤特快という5種類の快速、さらには平日と土休日で停車駅が違うので計6種類の快速が存在する。そのうち通勤が頭につく2種別は平日しか運転しないので今日みたいな土休日ダイヤの日はこいつが最速になるのだ。

ちなみに今乗ってる中央特快は同区間のただの快速より12分速いよ。

以上、白庭総一 present s『中央線快速を知ろう』でした。

「そういえば、もうすぐあそこを通りますね」

「?、あそこって?」

「ほら、今通ってるよ」

俺が指差す先には上下線が広がって、その間にガラス張りのホームつぽい建物があるのが見える。

「ここはな、万世橋駅言うて、100年ぐらい前の中央線つてここが終点やつてん。東京駅みたいな立派な駅舎もあつたんやけど、東京駅まで伸びてから駅がシヨボくなつて最後は無くなつてもうてん」

「まあ、書類上は休止駅なんですけどね。それでさつきのは商業施設が出来た時にデツキになつた部分なんですよ」

「へえー、それは知らなかつたな」

それから十数分して、電車は新宿を出発し、二つ先の東中野駅を抜けると、定規を引いたような直線区間に突入する。複々線は三鷹まで、直線区間 자체は立川まであるという前面だけ見ると線路しか見えない恐ろしい区間や。

そんな区間を電車は緩行線を走る各駅停車を横目に見ながら、快調飛ばして西へと向かい、8時18分にとあるアニメの聖地・立川に到着。ここでようやく直線区間が終了。ここから高尾までは各駅に停まるので種別が消える。

ただ、何も話すことがなくなつたので俺が好きな鉄道Youtuberの動画を見て時間を潰す。

そうしているとあつという間に時間がすぎて、1本見終わる間に高尾駅に到着した。

この高尾駅からは運転系統が一気に変化。本数が1時間に1~2本まで減り、電車も新型のE233系から、他路線のお下がりの211系が大多数を占めるようになる。

今から乗る8時45分発の小淵沢行きも終点まで乗り通すと2時間39分かかるロングラン電車である。ちなみに、これは余談だが、1日1本だけここから245km先の長野まで5時間近くも走り続ける441Mという電車があるらしい。余裕ができたらぜひ乗つてみたい。

ここから先、お世話になるアルパインブルーとリフレッシンググリーンの『長野色』を纏う211系には元の所属の違いでオールロングの車両とセミクロスの車両が混在しているが、幸い、今回はセミクロスやつた。ここでロングを当ててしまふと静岡以上の惨劇を見てしまうからな・・・

「ほな、ちょっと遅いけど朝飯食うか？今はそんなに人もおれへんし」「そうですね、そろそろお腹も空いたんで。じゃあ、平林さん。バッグ出してください」

「はーい」

言つて紗里はエコバッグを出し、中から東京駅で事前に買った三種類の弁当を取り出す。

「ほな、食うか」

「「いただきまーす!」」

その後は三人でおかずを交換しあつたりして和やかな雰囲気で8時45分の発車時刻を迎えた。

第四十二話 「東京脱出」

少し遅めの朝飯を食つてゐる間に発車時刻を迎えたようで、電車はゆっくりと動き出す。

いよいよ東京都を脱出して、相模湖駅からは神奈川県を通る。意外かもしれないが、中央本線つて、ちょっとだけ神奈川県を通るのだ。関西でいう、福知山線が神戸市を一駅だけ通るようなもんやな。

それと同じように、相模湖駅の次の藤野駅を抜けるとすぐに山梨県に入つてしまふ。

そして、某大喜利番組の水色の着物を着てゐる落語家『(自称)アラ〇・ドロ〇』の故郷、大月に到着。ここからラインカラーと路線記号も変わり、東京からのE233系もJR線はここまでしか乗り入れず(一部は富士急の河口湖まで)、完全に東京の通勤圏を脱出する。

富士急のホームを見てみると、金色の車体に富士山のシルエットが所々にある電車が停まつていた。あれは確か・・・

「6000系の6700番台だつたねー」

ナイス、紗里。この車両は元205系の6000系、その中でも最新鋭?の6700番台だ。この6000系、種車が量産先行車を組み込んだ編成やつたり、埼京線内最後の205系の編成やつたり、先頭車化改造を施した編成やつたりとバラエティーに富んでいて、個人的には結構好きな系列である。

それを横目に大月を出発、いよいよここからは山岳区間に突入して行き、往年に使用されていたスイッチバック構造が、か弱い保線用車のために残つてゐる初狩駅に到着。ホームからはその構造を眺めることができる。

そんなスイッチバックが必要だつた程、急勾配な区間を電車はモーターの音を喰らせて、勾配などものともせず進んでいく。

そして、10時23分に山梨一の都市、甲府に到着。

「おし、ここで降りよか」

「え?そーくん、小淵沢まで、まだ結構あるけど」

「いや、そこで乗り継ぐ電車が甲府始発やからな。早いとこ席は確保

しとかないとられてまうで

東海道線程ではないものの、18きつぱーは結構おるからな。

「分かつた」

「いやー、総一さん。これだけ乗つてまだ甲府ですか」

「せやねん よう考えたら中央線の方が普通に乗つてる時間が長かつたわ」

実は、東海道線は普通しかない区間は熱海～浜松間と静岡県内に集中して、しかも時間帯が合えばホームライナーで半分ほどの区間をショートカット出来るのだが、中央線は高尾、正確には各停区間が始まる立川を出てしまうと、次に快速が頻発している区間は岐阜県の中津川、しかもその快速は4駅しか通過せず、先行の電車を追い抜かない、宝塚線の急行並みの鈍行野郎なので実質は愛知県手前の多治見まで、全ての駅に停車することになる。

(一応中央線でも、瑞浪からはホームライナーが出ているが、土休日は全く走つていないので対象からは除外している)

・・・いや、えぐいな。確かにこれは過酷やな。

「まあ、快速走らせるほどの需要はありませんしね。特急と1時間に1本の普通があればいいってことなんでしょう」

と駅掲出の時刻表を見ながら香里奈が言う。

「それで、次の松本行きは58分発ですか。まだまだ時間がありますね」

「じゃあ、あたし何かお土産買つてくる」

「お土産・・・あ」

うつわ、東京土産買うんすつかり忘れてた。いや、別に家族とかクラスマートからなんか買ってきてくれとは頼まれてないんやけどな。単に俺が「ま○ま○」食べたかっただけなんやけど。

「あはは・・・やつちやいましたね」

「ハア、ほな紗里。一緒にお土産買いに行こっう」

「え?!いいの?じゃ、一緒に行こっか」

「香里奈はどうする?」

「うーむ、悔しいですが今は無理ですね。今、ふじかわがあそこに停

まつてるんで・・・」

そう言つて香里奈はカメラを構えてここから少し離れた身延線ホームに向かつた。多分、今停まつてるふじかわ6号を撮りに行つたんやろう。

「よし、買いに行こう」

「せやな。多分、香里奈もすぐ戻つてくるやろう」

第四十三話 「白庭総一の決断」

香里奈がふじかわの撮影に行つてゐる間、俺と紗里はお土産を買うことになり、土産物屋を探してはいたが、どうやら改札内には無さそうなので一旦改札を出る事に。

「まさか、甲府で途中下車をすることはな」

「まあ、それも旅の思い出になるんだし、それもまた一興、だよつ☆」

「そんなもんか？あ、あつたわ」

駅直結の商業施設に入るとすぐに土産物屋を見つけたのでそこに入る。

中には色々な土産物が所狭しと並んでいるが、俺はその中からあるものを選ぶ。

「そーくん、それ何？」

「これ？信玄餅やけど」

俺が手にしているのは、求肥という和菓子にきな粉と黒蜜をまぶした山梨名物、信玄餅。実は、俺の中では密かなマイブームになつてゐる。もともと和菓子の類は好きな方やしな。

「へー、あたしは食べた事ないけど・・・そんな買う？」

紗里は俺が持つてゐる信玄餅が15個ぐらい入つたカゴに目をやつてゐるようだ。

「そら、本場やしな。あと、東京で土産買つてへんからやケなつてるんもあるわ」

「そ、そう」

後は、ほうとうや信玄餅のアレンジ商品などを買って、土産物屋を後にする・・・よう考えたら、東京に行つたはずやのに、買ったんはみんな山梨土産という訳の分からん事になつたな・・・気を取り直して、時間を見てみると10時47分。もう香里奈も写真を撮り終わつてるやろ・・・

「あ、総一さん」

改札の前で首からカメラを引っ提げた香里奈が待つてゐた。

「か、香里奈。今、土産物を買い終わつたんやけど」

「そうですか、じゃあ行きましょう」

言つて二人一緒に改札を通り、次の電車、10時58分発の松本行きが停まつているホームへと向かう。

「あ、信玄餅じゃないですか。後で食べてもいいですか」

「ちよつとぐらいならええけど、好きなん?」

「めちゃくちゃ好きつてわけではないんですけど、和菓子は好きなんで……あれ? そう言えば平林さんはどこ行きました?」

「紗里やつたら、トイレ行つてるわ。もう電車ん中で待つといでやつて」

「そうですか……」

「……香里奈。どないしたん? そんな暗い表情して」

「……総一さんは、本当に私の事が好きなんですか?」

「えつ?」

「最近、平林さんがベツタリしてきて、彼女ばっかりに話して……あんまり構つてくれなくなってきた気がするんです」

「……」

「確かに、平林さんが総一さんに対し好意を持つていても、貴方が人の好意を無碍に断れない性格であるのもわかります。ただ……私は白庭総一の彼女で、貴方の事が大好きである事。それだけは忘れないでいて欲しいんです」

香里奈の表情は今にも泣きそうな顔をしていた。

「香里奈……すまん。そんな思いをさせてたんやな」

「なんかごめんね。香里奈があたしのせいで苦しんでたなんて……」

「いえいえ……ん?」

「紗里（平林さん）!?」

俺の後ろにいつの間にか紗里が立つていた。

「紗里、帰つてきてたんやな」

「うん。トイレから帰つて来たら、なんか二人が話してたから……」

「それを聞いてたと」

「うん……あたしね、好きになつた人にはついついベツタリして接しちやうんだ。一年の時にフラれてから、諦めよう、諦めようと思つて

も諦めきれなかつた。それだけはそーくんはあたしの中で大きい存在だつたんだ。でも、その振る舞いで悲しんでる人がいる事をすつかり忘れてた。香里奈……本当にごめんなさい」

言つて紗里が頭を下げる。彼女がこんなに眞面目な口調で話すことはほとんど無いので本人の中でも相当反省しているようだ。

「いえ、平林さん。まだ総一さんの事、諦めきれないんですね」

「……うん。多分、一生諦めきれない」

「では、総一さんを私との共有財産にすると言つるのはどうですか？勿論、正妻は私ですが」

ん？なんか香里奈がとんでもない事を口走つた気がするんやけど。「香里奈？今、俺の耳がイカれてへんかつたら俺を、香里奈と紗里の共有財産にするつて聞こえたんやけど」

「はい、言いました」

「それつてまさか……」

「ハーレムです」

「言いよつた！こいつ言いよつた！男子高校生の妄想ちやうんやで！」

「香里奈、一旦落ち着いてくれ。紗里の気持ちに押されたんは分かる。ただ、一時の感情でそれを決めるのは……」

「実は私、前々から考えてました。親にも相談しました」

「親にも相談したんか!?」展開が序破QのQ並みに早すぎてついでいけないんやけど！

「勿論、OKが出ました」

勿論つてなんやねん！よう親御さんOKしあつたな……お父さん、現職の国会議員やろ。もう、読者が置いてきぼりになつてる気がするんやけど……

「そーくん、あたしが彼女は……いや？」（？。）

なんか紗里が上目遣いで俺を見つめてくるんやけど。おい、作者！さつきまでしんみりしてたのにしつちやかめつちやかになつてもうたやないか！

「さあ……総一さん（そーくん）。どうするんですか（どーするの）」

そんなん言われても・・・どうすれば・・・



俺が悩んでいると、発車メロディが鳴ったので、急いで電車に乗り込む。これを逃すと次は1時間後なので、かなり大変なことになる。ハア・・・どないしよう。

そして、俺が出した決断は・・・

「・・・ハア、分かった。こんな彼氏で良けりやあ、付き合ってくれるか?」

「はい！もちろん！」

電車に乗つてから悩んだ挙句、結局、二人の頼みを断る事ができず、

俺はクズ野郎になった。とどのつまり、香里奈に加え、紗里も彼女に迎えてしまったということだ。まあ、ここで無碍に断ると紗里だけやなくて、これに関するノリノリな香里奈まで失いかねへんかつたからな。それに・・・紗里も好きやつたことは事実やし。

「でも、そーくんも好きだつたら最初からまとめて付き合えばよかつたじゃん」

「せやかて紗里、普通は日本ではハーレムは忌まれる事や言うのに：ラノベとかでハーレム物が人気なんも現実で出来ひんからつてのが大きいんやで」

「フフフ、三人で墮ちてしまえば、怖くありませんよ。私の後ろにはいろんな人がいますから・・・」

正直、香里奈の家系つて、親戚の人が、与党の最大派閥の元締める、幹事長の職についてたり、キー局の社長だつたりでかなりバラエティに富んでるからな・・・しかも、本家本元の跡取り娘・・・何をしでかすか分からん。もしかしたら、本気で一夫多妻制の法律をこしらえてくるかも。

「別にいいじゃん。こんな可愛い二人の彼女に愛されるつて中々ないよ？」

「そうかもしけれへんけどさ・・・倫理的にぶつ飛んでいるつて言うか」
「どうすんねん、これでUAとかお気に入り登録が減つたら。いや、そんな問題やないか。

「しかも、ずっと立つて話してたから気づかんかつたけど、こいつオールロングやん」

そう、この小説にあるまじき展開すぎて全く気付かなかつたが、今乗っている電車はオールロングシート、しかもさつきの電車の半分、3両編成だったので席はほぼ埋まつていた。

「座れないのは残念やな」

「まあ、空きが出るまで待ちましようか」

「そーだね」

座席はほぼ満席だつたのに対し、網棚は誰も使つてなかつたのでそこに重い荷物を置かせてもらうことに。これでだいぶ身軽になつた。

「あれ、そういうえばここどこだつけ」

「確か……華崎ぐらいでしたね」

「華崎か。華崎といえばあれやな、小林一三」

「ああ、そういうえばそうでしたね」

「小林一三って確かに、阪急グループの創業者だつけ。こことなんか関係あるの？」

「いや、その人な、こここの出身らしいねん。俺もずっと関西の人や思てたんやけど、Wiki見てたらこここの出身やつて」

「へえ」

そんな話をしていると電車は日野春駅に到着。甲府から小淵沢まではこの駅と竜王駅しか待避線がないので、普通はこの駅でちよくちよくあずさの通過待ちを行っていて、この電車もこの駅で甲府を30分ぐらい後に出てあずさ13号の通過待ちで6分ぐらい停車をするらしい。

「総一さん（そーくん）、一緒に降りましょ（ようよ）」

二人が片方づつ手を引つ張つて俺を車外に連れ出そうとする。まあ、ずっと車内にいても息は詰まるから、そういうのもええか……おわわわっ！

「そ、総一さん！」

「大丈夫!?」？

「だ、大丈夫や……」

ビックリした……段差ない思つて普通にホームに出たら、普通に段差あつたわ。嵩上げ工事してへんのかい。

せつかく来たんやし、駅名標でも撮つと。パチリ

そんな事をしていると接近放送が流れ、E353系が通過していく。やっぱりカツコええな。

「ほな戻るか」

多分特急を見送つたらすぐ発車すると思うのですぐに電車に乗り込む。

既に二人も戻つていたようだ。

「そーくん、香里奈。急でなんなんだけど、ちょっと寄りたいところが

あるんだ

「寄りたいところ？・それってどうや

「それはね・・・」

第四十四話 「ナイスですねえ！」

『上諏訪ー、上諏訪ー。ご乗車ありがとうございました』

日野春を出てから48分。俺達が降り立つたのは諏訪湖のほとり、長野県は上諏訪駅。

毎年、8月15日に行われる諏訪湖祭湖上花火大会などには多くの人が訪れ、乗降客数も県内第5位を誇る主要駅である。ちなみに、この駅の手前の信号場から岡谷までは単線区間になっている。東京の複々線をつい5時間ぐらい前まで見ていた身からすると、本当に同じ路線なんかと思ってしまうんやけど、そう思つてるのは俺だけでしょうか。

「香里奈も（紗里も）そう思います」

彼女一人がなんかボケ始めた。

「やめとけやめとけ。読者はそのネタ知らんと思うから」

もし知らない人はニコニコ動画で『ワイトもそう思います』と調べてみよう。

そんな話をしながらホームを歩いて行くと、目的の場所に着く。目の前に見えるのは『素足で湯つたり、座つてのんびり』と書かれたえんじの暖簾と、岩の目隠し、その中にはいかにも暖かそうな足湯があつた。

実は上諏訪駅のホーム上には、上諏訪温泉から引湯してきた足湯があり、有効な乗車券や入場券があれば、タダで入る事が出来るのだ。まあ、実質乗車券代で金を取られるようなもんだが。

「でも、こんなあつつい時に足湯つて・・・」

「いや、暑い時に足湯をするのって案外健康に良いんですよ。冷房や冷たい食べ物で冷えた体を温めて、血行を良くして、不眠が改善したり、免疫機能の向上に繋がるんですって」

「へえ、そなんや」

「じゃあ、早速はいろいろか」 チヤポン

「せやな（そうですね）」

・・・やつぱり暑いな。

それから数分後・・・

「そろそろ上がりりますか？」

「そーd・・・あ、待つて」

「?」

「折角だし、記念写真でも撮ろうよ！」

「記念写真？まあ、それもええな。旅の思い出にもなるし」

「そうですね、初めてのスリーショットですし」

そう言つて紗里はカバンの中から小さい三脚を取り出し、スマホに取り付けて湯船のへりに置く。

「はい、チーズ！」パチリ

「おお、結構ええやん」

「これ、待ち受けにしておきましよう

「ほな写真も撮つたし、出るか」

「ええ（分かつた）」

その後は、改札を出て、信州そばの店に行つてお昼をとる。本場のざるそばめっちゃ美味かつた。

駅のホームに帰つてきた頃にはもうすぐ時間だつたので、そのままやつてきた13時13分発の松本行きに乗車。今回も座席が空いていなかつたので、先頭車両に乗つてかぶりつきを楽しむ事にする。

乗つてからしばらくして、岡谷駅に到着。ここから中央本線は、天竜川に沿つて走る旧線と塩嶺トンネルでぶち抜く新線に分かれ、この電車は新線経由で走る。

岡谷を出ると3本あるうちの両端の線路はカーブしながら上がつて行き、真ん中の旧線を越えてそのまま塩嶺トンネルに突入。わあ、何も見えへん。

しばらくするとトンネルを抜け、みどり湖駅を通る。

それにしても線形が良く、しかも踏切が無い。全体的にきついカーブが多い中央本線で、都市部以外でこんだけ線形の良い区間は珍しい。まあ、まだ出来てから40年経つてへんしな。

そんな区間を走つていると左手から単線の旧線が合流し、線路の数が増えて行き、最後に別の路線が合流して塩尻駅に到着。ここからは

会社も変わつて中央本線はこの駅からJ.R東海の管轄になる。

ただ、中央本線はここから普通列車は1日12本で2～3時間運転間隔が開くなど、本数がいつもやの加古川線のようになつてしまふ。しかも、次の電車は13時45分発と時間は丁度良いが、途中の木曽福島で終点になつてしまふ。俺達が行くのは中津川なのでこいつには乗れず、14時50分まで待たなければならぬ。ただ、この時期、中央西線には救世主が現れる。

「救世主？ なにそれ」

「それはな・・・これや！」

俺が指差したのは中津川方面の電光掲示板。そこには『14：18
臨時快速　名古屋』と書かれている。

「快速？」この区間に快速は一本もないはずですけど

「本来はそいやねんけどな、実はこの時期だけ臨時で快速が出てんねん」

その快速の名は『ナイスホリデー木曽路』。本来、中津川～名古屋間で運転される定期の快速1往復が、土休日ダイヤ適用日のうちの特定日に限つて塩尻～名古屋間で運転されるというとつてもナイスな快速だ。

と言う説明をすると、

「へえ、ナイスですねえ」

「言うと思った！ ノリのええ紗里の事やし、絶対言うと思つた！」

「じゃあ、これに乗るんですね」

「せや。これ乗つたら名古屋到着が1時間も早なるからな」

「という事で、この臨時快速で一気に名古屋までワープする事に。しかし、この電車まちと思しき人達が集まり始めていたので列に並んで電車が入線するまで待つことにする。

『まもなく、4番線に電車が参ります。危ないですので黄色い線までお下がりください・・・』

お待たせしました。いえ、お待たせしすぎたかもしません！と言わんばかりに14時8分、これから乗る電車が4番線に入つてくる。気になる車両は313系1300番台。見たところ特に表示幕はただの『快速』のようだが・・・

俺達は最前列にいたので席は容易に確保出来た。しかし・・・

「総一さんの横に座るのは私です！」

「いや、あたしだね！」

誰が俺の隣に座るのかで、彼女達が言い争いを始めてしまう。この小説つていつからラブコメになつたん？

「まあまあ、途中で交代したらええやん。このままやつたら人の迷惑になるで」

その言葉でハツと気がついたのか、二人は顔を赤らめて座る。最初に隣に来たのは香里奈だ。

「す、すいません。つい熱くなっちゃつて」

「もうええよ。次からは自重してくれ」

「はい・・・（あー、優しすぎます！もつと惚れちやいますよ・・・）
／＼」

それをみていた他の乗客は・・・

「コーヒー飲みたい・・・」

あの、これって鉄道小説ですよね？

そんなこんなで14時18分、座席を全て埋めて塩尻を出発。左を見るとさつき通った東京からの路線が分岐していく。この塩尻駅はもともと東京方面と名古屋方面の線路は繋がっていたが、長野への篠ノ井線と直通しやすくするために工事が行われ、線路が分断されてしまい、中央本線の東西を跨ぐ貨物列車や臨時列車などは塩尻でスイッチバックするか、塩尻を通らない連絡線を通らないといけなくなつた。

しつかしこの快速、何と言つても一番の売りは速達性やろう。さつき香里奈が言つた通り、木曽方面と名古屋を行き来するためには高いお布施を払つて特急しなのに乗るか、『遅い』・『少ない』・『短い』の三拍子揃つた普通列車に乗るかしかない。しかし、この快速、中津川まではほぼ特急並みの停車駅で走つてくれるので18きつぱーにとつては非常にありがたい。ただし普通より10分速いだけというのはツツコんではいけない。

電車はスイスイと進んでいき、車窓も風光明媚になつていくが、それと同じ様にスピードも落ちていく。こここの区間は峠越えの区間なのでカーブも多く、しかも、単線区間がちょこちょこがあるので、いくら快速といえども、振り子装置のない313系ではスピードが出ないのだ。

途中の駅でも乗り降りがあるが、乗客の数は少し増えたくらい。

電車は上松、南木曽と過ぎていき、長野県最後の駅、田立を通過して、岐阜県に突入。そして中津川駅に着いたのは15時48分。これから名古屋方面は電車も1時間に2本に増え、この8828Mも、定期の快速5744Mと番号を変えて名古屋まで直通する。

しかし、さつき俺はこう言つたはずや。『中津川までは特急並みの停車駅で走つてくれる』と。中津川からは定期の快速になるが、その

快速の停車駅は多治見までの各駅、高蔵寺、春日井、勝川、大曾根、千種、鶴舞、金山とともにかく多い。中津川～名古屋間、21駅あるんやけど、停車駅の数は実に17駅。たつた4駅しか通過しないのだ。これは高山本線の始発と最終の一部通過の普通列車より通過駅が1駅少ない。だらしないで！快速が普通に負けるなんて！さつきまで特急並みの停車駅で運転していたのに急に各駅に停まり始めるのを見ていると泣きたくなつてもうような速達性だが、そこらへんはJRさんが需要をよく考えて作った停車駅仕方がない。

中津川を出て、電車はのんびり各駅に停車していく。紗里も香里奈もとつくに寝てしまつていて。俺も夢見心地になつてきたのか、この辺りはあんまり覚えていない。次に覚えているのは多治見を出たあたり。ここからやつと通過運転を始めるが、4駅しか通過しないので全然快速の感じがしない。そして電車は各停区間に再び入る大曾根駅に到着。ここからまで来ると電車はかなり混雑してくる。この快速6両やからな。

そして17時16分。中央本線の終点、名古屋駅に到着。ここまでで約10時間。まだ、関西は遠いな・・・

第四十五話 「大阪よ、私は帰つて來た」

『お客様に列車の運転見合わせについてお知らせします……17時2分ごろ、東海道本線の大高駅にて発生致しました人身事故の影響により、岡崎駅から大垣駅間の上下線の列車の運転を見合わせています……』

はい、今俺達は名古屋駅にいますが、状況は上の通りです。何でこんな時に今から通る区間が運転見合わせになるかなあ……おかげで今から乗るはずだつた17時半の新快速米原行きも到着時刻になつても駅に来ない。

「香里奈、どないする？」

「どうしましよう……」

「どうしようかね？（？）？？”

「待て、紗里。お前なに食うとんねん」

「いやー、お腹空いてきたから手羽先を食べようかなつて」

紗里の手には名古屋界隈では有名な『幻の手羽先』が握られていた。
なんてマイペースな奴なんや……

「二人も食べる？」

「……食べようか」

もうヤケや。いつ復旧するか分からんし、なんか食つて待とう。

その後、家族などに遅れる旨の連絡をとつて運転再開を待つていて
と20時前ぐらいに運転再開すると放送が流れる。

「これ今日中に大阪着けるかな・・・」

「どうでしょう。24時10分が最終なんで、24時までに着かない
と・・・」

「俺も24時7分が最終やし・・・」

「まあ、乗つてみないと分からぬからね」

「ここでぐちぐち言つてもしやあないしな・・・」

「名古屋駅5・6番線ホーム」

「うわ、人いっぱいやな・・・」

案の定、運転再開を待ち望んでいた人でホームは溢れかえっている。

そんなホームにやつて来たのは特別快速大垣行き。本来17時15分の発車予定だったが狂いに狂つて約3時間遅れで名古屋にやってきた。

無論、我先にと人が乗り込んで、東京にいた時に乗つたりんかい線の始発電車以上の混みようになつて、駅員も『これ以上はご乗車頂けません！次の電車をご利用ください！』と呼びかける程混んでいた。勿論、これには乗らない。て言うかこんなん乗れへん。

しかし、団子運転のような状態になつてているのですぐに次の電車がやつて来る。ダイヤなぞあつてないようなもんや。

幸い、さつきの特別快速が乗客をたくさん乗せていつてくれたので、次の新快速では席を確保することが出来た。しかし、この新快速は米原行き。大垣から先に行く人とか、さつきの特別快速に乗りそびれた人とかが乗つて来るので、さあ大変！結局、さつきほどではないけれど満員の客を乗せて、電車は20時22分に出発。

岐阜辺りからは少し余裕が出てきて、大垣を出たあたりになると立ち客は名古屋の半分ぐらいになつたけど、それでも米原直通ということもあってか乗客は多く、結局、米原まで混雑したままやつた。

米原まで来てしまえば後は大阪まで一本で行ける。

今回の旅のラストランナーは21時34分発の最終新快速の網干行き。

ここで一気に12両に増えるので車内はさつきまでの新快速と比

べてだいぶ余裕が出来る。

「うーん・・・やつと大阪に帰れるう」
「やつとですね・・・」

朝7時に東京を出て15時間近く経つて、すでに三人とも疲労困憊。

出発前にぐつすり寝てしまつたので、あんまり乗つた時のことは覚えていない。

まあ途中で紗里が二人目の彼女になつたり、人身事故に巻き込まれたりと色々あつたが、個人的には一番楽しかつたな・・・
そんな感傷に浸つていると、もうすぐ大阪に着くので慌てて二人を起こし、降りる準備をする。

そして22時57分、ついに大阪に到着。十六話ぶりに帰つて來たんやな・・・

「ねえねえ、そーくん」

「ど、どないしたんや」

「せつかくだし、今日はそーくんの家に泊まりたいなっ」

「ハア!? そんなんいきなり言われても・・・第一、親に連絡は取つたんか」

「もうとつてまーす」

「い、妹に電話さしてくれ」 プルルル・・・

『もしもし、どうしたの?』

用件を伝えると・・・

『ふーん、面白そうじやん。別に来てもいいよ』

・・・どうやら俺に逃げ場はないらしい。しかも、スピーカーにしていたのでバツチリ聞かれている。

「じゃあ、決まりだね!」

「早速行きましょう!」

「ハア・・・わかつたよ」

その後、彼女二人を連れて帰つたら妹に『ハーレムじやん』とめつちやからかわれました。え、その後はつて? やつたに決まつてるやろ。

第七章「総一いいええええ！今から俺ん部屋でゲームせえへん？」

第四十六話「ゲームしようや」

「ふわああ・・・」

昨日は朝っぱらから電車に乗り続けて、電車が止まつたせいでもういたんが夜の11時。しかも、車内でぐっすり寝ていて体力が回復して、いた二人に運動（意味深）をさせられ、もう俺の体はクタクタや・・・。今も、左腕に紗里、右腕に香里奈が抱きつきながら寝ていて、リアル両手に花状態になつている。一応言つておくけど、何も着てへんよ。

朝ごはんを作らないといけないのでとりあえず腕を抜く。

「ふわああ・・・おはようございます」

「あれえ？ もう朝？」

「せやで、とつぐに7時前や。俺、3時間ぐらいしか眠れへんかったな・・・」

取り敢えずキツチンに行つて冷蔵庫から卵とかチーズ、それと激激打破を取り出す。

この激激打破はカフェインがドバドバ入つていて、スッポン、マカ、高麗人参、蟻、更には馬の心臓まで入つていて究極の栄養ドリンク。ただ、こんな激ヤバなモンが入つてるので味は察して欲しい。ウエエエ、まづ。

それを飲んでひとまず活力をつけて朝食を作る。今日は二人増えるから大変やな。

「ほれ、トーストと目玉焼きでけたで」

「「はーい！」」

俺、遥、香里奈、紗里の四人で朝食を食べる。

「それでさ、お兄ちゃん。香里奈さんは彼女だから分かるけど、なんで紗里さん？ だつけもうちに来たの？」

「じ、実はな。紗里h 「二人目の彼女になつたんだ！ よろしくね、遥

ちゃん！」 オイ・・・

心の準備してたのにい・・・。さて、妹の表情は・・・

「ふーん…お兄ちゃん。まさかやとは思つてたけど、ハーレムを作つてたなんてねえ・・・」

めっちゃ白い目で俺を見ています。そらそうか・・・妹は常識人やもんな。しかし、予想外の一言が飛び出す。

「・・・でも、なんか面白そうやん！」

「えっ」

前言撤回。どうやら俺の妹も相当頭がぶつ飛んでいたようです。

「おっ、遙ちゃん。気が合うね♪☆」

「フフフ、実は薄々気が付いてたんですよ。最初はこのアホ兄貴はつて思つてたけど、くつついちゃつたんだつたらそれを楽しまなきや損損！だから電話で面白そうつて言つたんだよ」

何ということでしょう。あの常識人の妹がハーレムを容認するなんて・・・

そんな事を考えているとあつという間に朝食を食べ終わつてしまつた。

「ハア、今日はどうする？」

「そうですね…今日は家で遊びましようか。何か総一さん、疲れてそうですし」

「おう…どこか出かけようつて言われへんかヒヤヒヤしてたからな」「じゃあ、何する？」

「一旦俺の部屋戻るか？なんか遊べそうなものがあるかもわからへんし」

という訳で自分の部屋に戻る。あ、布団買えとかな。結構濡れてるからな…ナニがとは言わへんけど。

「あ、これ遊んでみたいです」

「ん？ああ、それか」

香里奈が持つて来たのは『日本一周鈍行旅行ゲーム』というボードゲーム。有名な『日本一周特急旅行ゲーム』の同人版で、大阪のコミバで親父が買って来て、しばらくは友達で遊んでいたゲームやつた

な・・・

「ほな、久しぶりにこれで遊ぶか」

「ええつ（うん）！」

ほな、早速始めるか。

ルールを説明しておこう。

このゲームは本家と同じようにガイドブックに書かれた名所をめぐつて、最初に東京駅に戻つて来た人が勝ちになるが、このゲームの特徴は『JR線全線の駅十並行在来線全駅が対象で、特急と新幹線は原則利用不可』という事。そのため、ボードがかなり大きく、しかも全ての駅が書いてあるのでかなり字が細かい。しかも本家の醍醐味である付属の時刻表を使うという要素は、何と、実際の時刻表を使う要素に変わつた。なので年度が変わる度に利用出来る電車が増えたり、廃止になつたりするのだ。しかも特急や新幹線は原則利用不可なので普通や快速を使うしかない。なので終わるまでめちゃくちや時間がかかる。実際、友達で遊んだ時もゴールまでに合計で10時間以上かかつてしまい、以後は収納棚に封印されていた。

「なんか、すごいゲームですね」

「こんだけ作り込まれてるのに、難易度が異常に高いからな」

「まあ、やつてみようよ」

「折角やし、遙誘つてくるわ」

その後、遙を誘つてみたが、『鈍行つて聞いただけで、時間がかりそうだからバス』と断られてしまつた。まさか見抜かれていたとは…：

遙には断られたので三人で始める事に。

「ほな、始めるか」

「「はーい」」

こうして始まつた鈍行ゲーム。

一体誰が勝つんやろうか・・・

第四十七話 「やつぱり鈍行だけは無理つすよ」

「おし、ほな始めよか」

そして裏向けにしてどんな種類か分からないようにしたガイドブックを一つづつ取っていく。

さて、どんなガイドブックが当たったやろか・・・

「おっ、なかなかやつが来たな・・・」

俺が引き当てたのは『タラタラ行こうぜ！ローカル新幹線駅巡り』というもの。

その名の通り、ローカル新幹線駅、つまり一番下の種別しか停車しなかつたり、本数が少なかつたりする駅を巡るもので、今回は厚狭、新白河、古川、鬼石、奥津軽いまべつの5駅が掲げられている。・・・結構ハードなやつちやう？

紗里が引き当てたのは『バチッと切り替え！デットセクション境界ツアーノ。交流と直流が切り替わるデッドセクションの境界駅を巡るもので、村上、黒磯、門司、藤代、南今庄の5駅が設定されている。前半の三駅は主要駅やから行きやすいけど、後の二駅がな・・・

そして香里奈の方を見てみると・・・

「・・・」チーン

見事にOTZの体制になっていた。握っているガイドブックを見てみるとそこには『秘境駅探検隊 hard course』という文字があり、指定されていたのは糠南、宗太郎の2駅。なんや2駅かと思う人もいると思うが、この2駅を知っている俺からするとご愁傷様としか言いようがない。

「・・・引き直していいですか？」

「ダメよ、ダメダメ！」

「・・・」OTZ

まあ、こんな茶番やつてもしゃあないし、始めるか。

「1ターン目（5時）」

このゲームは1ターンにつき、1時間ずつ時間が進む設定になつていてその時間帯に走つている電車を市販の時刻表から見つけ、ルー

レットを回して行く駅を決めて乗車するという風になつてゐる。ちなみに、ルーレットは1～10の数字と終という文字があり、終マークが出るとその電車の終点まで乗ることが出来る。また、ターン中、駅で降りずに電車に乗り続けている場合はそのターンはルーレットが回せない。（例：敦賀5時34分発の播州赤穂行き新快速で終点まで行くと赤穂着は9時42分なので6時分と7時分と8時分のルーレットが回せない）

スタートは5時。このゲームは分単位は切り捨てになるので、5時台の電車なら原則どれでも乗れるのだが、俺はこの5時20分発の始発の沼津行きに乗る。さて、ルーレットを回そうか・・・

クルクル・・・『8』

8駅やから辻堂やな。辻堂到着は6時12分。良かつた、次も回せるわ。

「よーし、じゃあ行こつか。あ、あたしは山手線を使うね」
紗里は・・・『5』か。山手線で日暮里駅に行つたな。という事は常磐線で藤代駅を狙うんか・・・。

「じゃあ、次は私ですね・・・。5時1分の京浜東北線で行きましょう」
次に香里奈がルーレットを回す。

「あ、終マークが出ました」

いきなりか！ちなみに香里奈の乗つている京浜東北線は大宮行き。
という訳で彼女は大宮までコマを進める。

これで5時台のターンが終了。これが一連の流れだ。

♪2ターン目（6時台）♪

次に俺が出したのは『3』。という訳で6時31分の熱海行きで辻堂の3駅先、大磯へ向かう。大磯つて・・・

「あたしは・・・『7』だね」

紗里は『7』を出して、6時7分の水戸行きで日暮里の7駅先、天王台駅までコマを進める。これで1つ目のチェックポイント、藤代駅まで後2駅となつた。

「ふふふ、ここでこれを使います！」

言つて香里奈はガイドブックの一番後ろの『新幹線回数クーポン』

というページを掲げる。

各々のガイドブックの一番後ろのページにはクーポン券があつて、これを使ってゲームを有利に進めることが出来る。今、香里奈が使う『新幹線回数クーポン』は通常では使用出来ない新幹線が最大4つ先の停車駅、または終マークが出た場合は終点まで、計3回まで使用可能なクーポンである。

「これでどこまで・・・」

香里奈がルーレットを回す。

「やつた！終マークです！」

なんと、2回連続で終マークを出しやがつた。めっちゃ引きええな・・・

「それじゃあ、6時57分のはやぶさで一気に新函館北斗まで飛んじゃいます！」

香里奈は北海道入りを選択した。多分、宗谷本線の糠南駅から先に巡るんやろうな・・・

その代わり、香里奈はこれから3ターン、ルーレットを引けなくなるので、その間に何か対策を打つておかへんといけないな・・・

（3ターン目（7時））

次に俺が回すと『9』が出たのでこれでちょうど熱海まで行くことが出来た。熱海駅のマスは他の駅みたいな白色ではなく、黄色のマスだった。

「お、カードが引けるみたいやな」

「カード？ここに置いてあるやつのこと？」

「そうそう。特定の駅で特殊効果があるカードが引けるんよ。結構役立つことがあるからな・・・おっ、『終点カード』やな」

カードの効果は・・・まあ、名前の通りや。

「じゃあ、あたしの番だね。2が出てくればいいんだけど・・・」
言つて紗里がルーレットを回す。

「うーん、5か」

紗里は目的地の藤代にはたどり着けず、ひたち野うしくまで連れて行かれた。

て い う か、ま だ 7 時 台 な ん？こ の ゲ ー ム、1 時 台 の タ ー ン ま で あ る
か ら な ． ． ． 先 が 思 い や ら れ る ． ． ．

第四十八話 「えつ、終わり？」

その後、8時台のターンでは紗里が藤代駅に到着。チエックポイント一番乗りを果たした。そしてそこからいろいろあって現在、11時のターンを迎えている。

ここで現在地を書いておくと・・・

【俺】 豊橋

【紗里】 上野

【香里奈】 新函館北斗

となつていて。ここで新幹線でスキップ扱いになつていた香里奈が戻つてくるが・・・

「そ、そんな・・・」

時刻表を見て絶望していた。何せ次に長万部方面へ抜けられる普通列車は14時59分発。函館に着いてからさらに2ターン動けないという状態に陥つてしまつたのだ。

「で、でも59分ですから。後もう1分ずれてたら14時台も動けませんでしたからね」

などと自分に言い聞かせるように呟いている。何かかわいそうに見えてきた・・・

まず俺がルーレットを回す。えつと・・・『4』か。

ここからは快速が使えるので早速、新快速で刈谷まで向かう。この区間は快速がバンバン飛ばしてくれるのありがたい。

「じゃあ、いくよ・・・おお『9』だ！」

紗里は一気に9駅進んで宇都宮線の白岡駅へ。しかもこの駅はカード駅なのでカードが入手できる。その内容は・・・

「クラシックカード『白鳥（I）』？」

こいつ、やばいカードを引きやがった。クラシックカードは廃止になつた特急や急行、長距離鈍行に乗ることが出来るカードで今、紗里が引いたカードはかつて日本最長距離を誇つた大阪～青森間を走つた昼行特急『白鳥』に乗車可能なカードなのだ。

「へー、すゞ」 どうなカードだね」

ただ、紗里は今のところは使いどころがなさそうやけど、この後に要注意やな・・・ていうかクオリティやけに高いな。完全に本家超えとるで。

その後も白熱した展開は続く。

「第10ターン（15時）」

俺は今、京都駅までコマを進めている。ルーレットは『2』が出たので、新大阪へ。紗里は黒磯に到着して、さらに北上した豊原からスタート。ルーレットを意気揚々に回すが・・・

「ホアッ!!?」

何と『1』だけだつた。これでは白坂か黒田原しか行けない。

「ハア、新白河にも行けないなんて・・・ショック」(@ー@)

仕方ないなと言つて紗里は白坂駅にコマを進める。

香里奈は前のターンで『2』を出したので大沼駅からスタートだが、大沼発の普通列車は17時46分発までないのでまた2ターン休みになつてしまつていて。ちなみに、この時点では香里奈は今日中の普通列車での札幌到着は不可能になつています。ご愁傷様（笑）

「わ、笑わないでください！北海道は列車の本数少ないし、でつかいどうなんですかから仕方じやないじやないですか！」

よつぽど嫌やつたんやろうか・・・涙目になつていて。

「第11ターン（16時）」

俺の番が回つてきたのでガイドブックのクーポンで新幹線に乗車する。ルーレットで出たのは『8』。これで福山乗り換えで一気に厚狭まで行くことが出来る。そのかわり、2ターン休みになるが。

その後は紗里は『2』を出してしまい、白河止まり。ここに来て急に牛歩になつたな。

その後は俺がチェックポイントの厚狭に着いたこと以外は特にゲームは動くことなく、時間が進んでいつた・・・

（第108ターン目（17時））

・・・え？ 飛ばし過ぎやつて？ 何、何十ターンも飛ばしてんねんつて？ しゃあないやん、特に書くとこなかつたんやから。ただルーレット回す所を何十回も繰り返し書くなんてシユールにも程があるやろ。という訳で気を取り直して、現在の場所

【俺】蟹田（津軽線）

【紗里】小月（山陽本線）

【香里奈】魚住（山陽本線）

現在、俺と紗里はチエックポイントを何とか回り終えてゴールの東京駅に戻る途中、香里奈が二つ目のチエックポイントの日豊本線宗太郎駅に向かっている所だ。これだけ見れば香里奈が圧倒的不利のよう見えるが、香里奈はどつかの駅で『凱旋カード』なるものを手に入れていて、このカードを所持しているプレイヤーが最後のチエックポイントを回ると、その時点で当該プレイヤーはゴールの東京駅にワープ、すなわち、香里奈が宗太郎に着けば、東京駅に戻ることなく大逆転勝利をしてしまうのだ。

なので、現在は俺と紗里が東京駅に着くのが先か、香里奈が宗太郎駅に着くのが先かという勝負になつていて。

しかも、紗里が『日本列島総ローカル線化カード』というカードを50ターン目ぐらいで発動していて、それのせいで新幹線は各停の種別、在来線は特急、急行、新快速、特別快速、通勤快速の類が使えず、使えるのは普通と快速のみ、しかも効果は基本的に永続。これがが出された時は殴り合いの喧嘩になつたな。

一応、解除は出来るが、それをやるために地方交通線を3つ以上全線完乗しなければならぬので、この状況では事実上不可能。

「やばいな・・・」

紗里が余計なことをしてくれたせいで、終わりが見えかけていたのに、いつ終わるかわからない状況に逆戻りしてしまった・・・つてあれ？ そういうや、今何時やつたけ？

「なあ、香里奈。今何時やつたつけ」

「今は・・・あ。もう6時過ぎですね」

「ヤツバ！ それじやああたし達、10時間ぐらいやつてたつてこと!?」

?

「どないする？ どつかの誰かさんが変なことしたせいで、終わらなくなりかけてるけど」

「うーん、じゃあゴールに一番近い人が優勝でいいですか？」

「せやな・・・まあ、俺はかなり遠いし、紗里と香里奈がほぼ同じくらいから、二人の優勝でいいんちやう？」

「いいんですか？」

「別にええよ。なんか商品が出るわけでもないし」

「やつたー」

そんな訳でこのゲームは香里奈と紗里の優勝ということで終了。

後片付けをして二人は帰つていった。

唐突に終わったのは許してくれ。

第八章 「鉄分マシマシな日常（改）」

第四十九話 「そうだ、乗りバスしよう」

東京から帰ってきて数日、特にやることもなく、俺はゴロゴロしていた。

しかし、ふとあることを思いつく。

今日は8月15日。俺達の学校の始業式の1日前だ。

折角なので、一発旅をかまそう！ということで今、阪神の大阪梅田駅にいまーす。

時刻は既に2時半を回つていて、普段早朝から動き始めることが多い俺にしては結構珍しい。自分で言うのもなんか変やけど。

今日使うのは普通の乗車券。一応、阪神には『阪急阪神1Dayパス』という、ちょっと前の投資関係のゴタゴタで阪急と阪神が経営統合した結果、それぞれの一日乗車券も統合した事で生まれた、1200円で京阪神とキタ・ミナミを巡れるというある意味一番コスパの良いフリー切符などがあるのだが、今回は近場なので、それでは元を取れないので普通にICOCAで入場する。今思えば、定期以外でICOCA使うん初めてな気がするな・・・ごめんね、イコちゃん。

早速、切符を通して改札に入る。やつて来たのは青胴車という名前でお馴染み、5000系の普通高速神戸行き。これ乗ろう。

そして電車は立ち客が数人出るほどの混み具合で、大阪梅田を出发。途中、野田や千船で優等列車に煽られながら十数分で目的の駅に到着。その駅とは・・・

『杭瀬ー、杭瀬です。お忘れ物ございませんようお降りください・・・』

阪神本線の尼崎市最東端の駅、杭瀬駅である。

一見すると、何の変哲もない普通しか止まらない駅のようだ。まあ実際、何の変哲もない普通しか止まらない駅なんやけど。強いて言うなら、商店街とか、近くに工場が多くあつて尼崎らしいと言つた所やろうか。

そんな杭瀬駅を出て少し歩くと国道2号というでつかい道路に出る。

ここには阪神バスの『阪神杭瀬駅北』と言う停留所があり、二つのバス停のうち、一つからは尼崎や昆陽を通つて、宝塚を結ぶ『杭瀬宝塚線』が20分間隔で発着していて利用者が多い。他にもこのバス停からは朝だけ阪神甲子園まで行く『尼崎甲子園線』というのも走っている。しかし、用があるのはもう一つのバス停。こちらは国道2号線を東に進み、大阪方面に向かうバス停なのだが・・・

発車予定時刻表（土休日） 7・31改正

15：48 野田阪神前行き（当停留所始発）

※平日の運行はありません

はい、これだけです。たつたのこれだけです。しかも赤字のところ見てください。

こいつ、平日は全く走らないんです。

このバス停より西側は最低でも20分間隔、多いところだと10分未満の間隔で走っているのに、ここを境に土休日にたつたの1往復。
・・・ちょっとおもろそうに見えへんか？

という訳で、今回は鉄道からはちょっと離れて、バス旅を楽しんでみようと思います・・ええかな？ええよね！答えは聞いてないツ！

第五十話 「青色＆肌色吐息」

杭瀬駅北のバス停で待つ事、10分ぐらい。

西の方から回送表示でバスがやつてき……あ、『野田阪神前』の表示に変わった。

という訳で、今回はこのバスに乗つて野田まで戻ることにする。早速車内に入つて、発車を待つていると……

「兄ちゃん、あんたバス好きかい？」

運転手に話しかけられた。

「ああ、はい」

「そうかそうか、この路線に乗る人つて、よっぽどの物好きやからな」

「まあ、そうですよね」

「まあ、写真撮りたかつたら好きにとつてええからね。どうせ誰も乗つてこーへんし」

「ありがとうございます」

見た目とは裏腹に、結構優しい運転手やつたな……

結局、俺以外は誰も乗つて来ずに定刻通りに阪神杭瀬駅北を出発した。

まあ、この路線知らん人が多いと思うから一応、説明しこうか。
この路線の名前は『野田尼崎甲子園線』といい、遙か昔は野田から

神戸まで1本のバス路線で繋がっていたが、これが阪神甲子園で切られた路線がルートになつていて、つい十何年前までは15分に1本とかなりの高頻度で走つていたが時代の流れで減便。特に大阪市内の減便が凄まじく、2013年の改正の時点では、野田まで来ていたのは途中の尼崎浜田車庫発着の1往復だけになつていて、それが今年の改正から野田発着は杭瀬で完全に切られた上、土休日のみの運行と行くところまで行つてしまつた。次は多分、年一運行か廃止やろうな。バスは発車すると川を渡つてすぐに大阪市に入る。

しかし、大阪市内に入つても誰も乗らない。

というのも、ここにJR東西線が走つてゐるから、それに乗客をほとんど取られてしまつてゐるのだ。そういうや、この路線の減便が始まつたのも、東西線が開業してからやからな・・・。

そしてバスは淀川を渡り、淀川区に突入。ここまで来れば野田阪神はもうすぐなんやけど、ここに来て大渋滞にハマつてしまい、定刻より5分ぐらい遅れて、阪神バスの大坂側の拠点（笑）、野田阪神前に到着。

ここにはそれなりの規模のバスターミナルがあるんやけど、そのほとんどが大阪シティバスの路線。阪神バスの路線は今乗つて來た路線と今から乗る路線の二路線しかなく、どちらも免許維持路線に成り下がつてゐる。一応営業所はあるらしいが、クツソちっさい。これでも、20年前は案内所まであつた程の拠点やつたんやろ？これを（笑）と言わざして何と言つたらええんやろうか。

バスは俺を下ろすと、表示が変わつてすぐ先の乗り場に向かう。

表示は『天神橋筋六丁目』これが今から乗る『北大阪線』という中津経由で天神橋筋六丁目まで向かう路線。こいつも土日1本の免許維持路線である。

ちなみにこいつ、もともとは阪神北大阪線という路面電車、まあ、いわゆるチン電として走つていて、廃止後もしばらくは15分間隔で走つてたんやけど、こつちはシバスの58系統というほとんど同じルートを通つて大阪駅前行く路線に客を取られて、今では見る影もない。シバスの方は大阪駅まで行くので当然つちやあ、当然の結果な

んやけども。

一応、乗り場の前には何人か人がおるな。乗るんやろうか……

「つてあれ……？」

誰も乗る様子を見せない。

「なんやなんや……」

調べてみるとこれの7分後にシバスの58系統が出るらしい。

確かにこれは免許維持なるわ……

という訳で、この便も俺以外誰も乗せず野田阪神前を出る。
それから10分ぐらいで中津に到着。先月末まではここで折り返す便がちょっとあつたんやけど全部あぼーんされてしまった。ショツギヨムツジヨやな。

ちなみに、この路線の中津から先の停留所はまんまチン電時代の停留所の名前を受け継いでいて、『北野』とか『南浜』とかいう今ではもう町名に残っていない名前もあつて結構おもろい。あと、『天神橋筋六丁目』も町名として残つてなかつたりする。

その後も誰も乗らないままそのまま天六に着いてしまつた。そして乗る人もだれもいな……ちょっと待つた。いたわ。多分同業者やけど。

あ、写真撮つてる。同業者や。

ちなみに、この路線はループ運行なので別に天六で降りなくともいいんやけど野田まで戻るのは時間も金もかかるのでやめとこう。
運賃は210円。本来、阪神バスの運賃は220円だが、大阪特区という『往年の名残』でちゃんとシバスの運賃と同調しているのだ。
そつからは商店街とかをぶらぶらして色々物を買ったあと、一駅ぐらくならうと思つて歩いて家に帰ることにした。案の定、汗ダクダクになつた。

第五十一話 「始業式」

8月16日。今日は我らが長堀学園高校の2学期の始業式である。久しぶりにクラスメートと再会して談笑し、講堂へ向かい、校長のありがた―――い話を聞くという最早恒例と化しているイベントを済ませ、HRを済ませる。

HRが終わつたらすぐに鉄道部の部室へ向かう。

「あ、総一さん。お久しぶりです」

「そーくん、おひさー」

左から香里奈、右から紗里がやつて来てそれぞれ俺の腕にドッキングする。特撮か？

しかも。それで通りかかった人の注目を集めるんやけど・・・「別にいいんじゃないですか？きつと私達のことが羨ましいんでしよう」

「そんなもんか？」

「そーだよつ☆」

なんか殺意のある視線を向けられてるんやけどな・・・

そんな事を考えていると部室の前に到着。ドアを開けて中に入る。

「部長、お久しぶりです」

「おう、総一と香里奈か。今日もバカツブルぶりを：：つて、あれ？」

「な、なんで・・・平林さんも腕に抱きついて・・・」

「ちよつといろいろあつてな・・・彼女が二人になりました」

一瞬、部室に静寂が訪れる。そして・・・

「「ええええええええっつ！」」

一齊に叫び声を上げる。そら、二次元の世界でしか見ないようなハーレム主人公が今、ここに立つてゐるからな・・・ってあれ？なんか一人多ない？

見てみると、部長と圭人以外にもう一人、茶髪の男がいるのに気付く。

「あれ？部長、この人は・・・あつ！」

「そうや・・・コイツ！」

「よう、お久やな。総一」

「ちよつと待つてくれ。この人知つとるんか?」

「おう、何しろ、コイツは俺の中学までの友達やからな」

「「「は・・・」」

「「「はあああああああつつつ!」」」

本日二回目の絶叫でござります。隣の迷惑なるよ。

「あ、せや、隆。俺の彼女と読者の皆さんはお初やから改めて自己紹介したげな」

「唐突なメタやな・・まあ、自己紹介はしとかんとな。平林さん・・と朝潮さんやつたけ? 桜川隆太つて言います。趣味は総一と同じ乗り鉄! どうぞよろしく」

「よ、よろしくお願ひします (よろー☆)」

「にしても、総一。こんな正反対の彼女を作つたんか・・・」

「まあ、成り行きなんやけど、結構楽しいで」

「ええなあ! 俺なんか、ついこないだ告白したら大爆死してもうたらな」

「ハハ、お前らしいわ」

「ねえ、そーくん。あたしも中学一緒だつたけど、この人知らないんだけど」

「そら、中二の時に転勤で広島に引っ越したからな。紗里が俺と一緒にクラスになつたんは中三の時やろ? 覚えてなくとも不思議ちやうで」

「ご名答。今年の夏で親の赴任期間が明けたから晴れて大阪に戻つて來たちゅうわけよ」

そんな話を少しして席に座る。

「それで隆。ここにいるつてことはお前も・・・」

「せや。鉄道部に入ることになつたんよ」

なるほどな・・・

「まあ、歓迎するわ」

「そりやどうも(笑)」

「それで、久しぶりに集まりましたけど何するんですか? 部長」

「せやな・・・何がええ?」

「な・・・なら、模型を買いに行くのどうですか?」

「模型か・・・確かに、それ関連は最近はほとんどやつてへんかつたな」「まあ、乗つてばかりだとあれだしねえ、旅行部とかぶつちゃうよね」と紗里が部長の言葉に続く。この学校つて部活の数が多くすぎて、さつきの旅行部とかジオラマ部とかつていう活動内容が似通つてる部活がたくさんあるからな・・・

「それじやあ、土曜日の放課後に模型店、行きますか?」

「「「「賛成（さんせー）！」」」

「ほな、今日はこれで解散にしよか。お疲れさんでした!」

部長の挨拶で今日の鉄道部はお開きに。

「ほな、隆。積もる話もあるし、帰りどつか寄ろうや」

「おう、ええで。で・・・そこの彼女さんはなんかあんたに用があるみたいやけど

「え?」

左には香里奈が何やら言いたそうに立っていた。

「か、香里奈。どないしたんや?」

「実はですね・・・」

第九章 「指令！アズナスを全店制覇せよ！」

第五十二話 「Let's go AS soon as！」

「か、香里奈。どないしたんや」

「実はですね、今度、一緒に行きたい場所があるんですよ」

「行きたい場所？別にええけど・・・」

「ありがとうございます！それじゃあ、時間と場所は追つて連絡しますね」

言つて香里奈は部室を後にしていった。

「・・・ほな、行くか。場所は俺が決めてもええ？」

「どうじどうぞ」

俺たちも続いて部室を後にする。

それから俺達は『栗生くりお

』という居酒屋で夕食がてら、話をすることにし、多分結構かかりそうなので、妹も呼ぶことにした。

「お兄ちゃん・・・ここつて居酒屋やんね」

「せやけど？」

「いや、大丈夫なの・・・その、未成年がこうやって集まつても」

「ハハ、居酒屋に未成年が入つたらあかんなんてどこの法律や条例に書いてあるんや。酒を飲んだり、10時以降も店におらんかつたらええ話や。それに、この店は隆の知り合いの、宮浦さんつて人がやつてる店やからな」

「そういうわけやないんやけど・・・もういいや」

遙はどこか諦めたようにため息を吐く。

「おし、ほな頼もか」

俺は店員に注文を伝え、料理を持つて来てもらう。

「改めてやけど・・・隆。おかえり」

「おう！」

俺は隆と（烏龍茶が入つた）ジョッキで乾杯をし、友達の再会を祝つた。

それから何日かが経つて日曜日。俺は早朝の誰もいない阪急大阪梅田駅にいた。あの後、香里奈から『5時に阪急梅田集合でよろしくお願ひします』と言われていたのだ。アイツ、どうやら始発で来るらしいが、谷町線はまだ電車が動いていないので、俺はわざわざ都島から徒步で来る羽目になつた。ちくせう、でもこれも可愛い彼女の頼みやし・・・

そんな事を考えていると、宝塚線の始発電車が梅田駅に到着。降りて来た人はまばらで、その中から白いロングの美少女を見つけるのは

容易だつた。

「おーはよー」ざいます！」

「香里奈・・・元気やな」

紗里といい、香里奈といい、なんでこんなに俺の彼女は元気なんやろう・・・永久機関でもあるんか？

「それじやあ、総一さん。これをどうぞ」

香里奈が1枚の切符を俺に渡して來た。あ、『阪急阪神1Dayパス』か・・・

「それじやあ、早速行きましょうか」

言つて早速、5時ちょうどに出発する京都線始発の京都河原町行きに飛び乗る。車両は8300系の復刻編成『classic 8300』やつたな。

「それで、香里奈。今日はこんな朝っぱらから何をするんや？」

「総一さんは、アズナスつて知つてますか？」

「アズナス・・・ああ、エキナカのコンビニのやつか」

説明しよう！アズナスとは阪急阪神が展開する独自のエキナカコンビニのことで、基本は阪急と阪神の駅構内に店舗を置いている。ちなみに、日本初のエキナカコンビニを作つたのも実はここである。「実はですね・・・アズナスつて無くなつちやうんですよ」

「えつ、それホンマか」

「はい、全部○ーソンになるんですよ」

「○ーソンか・・・なんか意外やな。ちゅうことは、からあげ○ンが食えるかもな」

「それで今、消えゆくアズナスを写真に写真に記録してるんですよ。既に宝塚線のアズナスは大体制覇したんで、後は京都線と神戸線なんですけど、どうせなら一緒に行こうかなつて」

「ゲツ、長くなりそうなやつや」

「フフフ、もう逃げられませんよ」

香里奈がしてやつたりと言わんばかりの笑みを見せる。

「ハハハッ、分かつた分かつた。もうやけや、とこん付き合つてやろうやないの」

「それでこそ、総一さんです」

こうして、丸一日、アズナス巡礼に出向くことになった。

第五十三話 「A l l o n s • a s n a s!」

「それで香里奈さんヨオ、まず最初はどこに行くのよ？」

「そうですねえ・・・淡路は全部閉まっちゃつてますから、まずは南茨木を目指しましようか」

最初の目的地は南茨木となつたが・・・一つ疑問が。

「行くのはええんやけどさ・・・この時間からは空いてへんやろ」

アズナスつて早くても6時ぐらいにならへんと開かへんのちやうんかつたつけ・・・

「確かに開いてませんけど、今日は店の外観を撮るのが大きな目的ですからね。レシート集めだつたらアレですけど・・・流石にお金が・・・

「ふうん、小遣いいくらもらつてるん?」

「そうですね・・・大体月に1万5000ぐらいですかね・・・」

「あれ?思つてたより少ないな・・・てつきりもつと貰つてるんかと思つてた」

「両親が若いうちに浪費癖をつけておくのはよくないって」「結構しつかりしてるんやな・・・」

そんな会話をしているとあつという間に南茨木駅に到着。

改札を出るとすぐに目的のアズナスが見えてくる。勿論、シャツターが下されている。香里奈は早速、例の高級カメラを取り出して写真をパチリ。撮つた写真を見て満足そうに頷く。

「じゃあ、撮れたんで次行きましょう」

「おう」

次にやつて来たのは46分発の同じく京都河原町行き。さつきのと同じ、早朝しか見られない、河原町まで優等列車の待避を受けずに逃げ切る電車である。

この電車で次は隣の茨木市へ。

主要駅ということもあって、複数の店舗がある。まず最初に向かったのは改札のすぐ側にある小さいアズナス。こういう形態は『アズナスエクスプレス』という名前になつている。

まあ、シャツターが閉まつてるんやけど。

この後、改札周辺を巡り終えて、改札内に戻り、この日3本目の普通に乗車。高槻市へと向かう。高槻市駅は特急停車駅かつ昼間のほぼ全ての普通が折り返す程の主要駅だが、意外にも無印のアズナスはなく、エクスプレスが1店舗あるだけ。

なので、撮影はすぐに終わった。

そしてこの日4本目の普通京都河原町行きに乗車。次の目的地は京都府内なので、ここでようやく大阪府を脱出することに。初めは長岡天神を目指していたが、既に閉まっていたことがわかり、更に北へ向かうことになつた。

「香里奈・・・あと京都線のアズナスつて何駅残つてるん?」

「そうですね・・・今日の時点だと、東向日と桂と大宮が残つてますね」

「うわ、結構残つてんな・・・」

その後も途中下車を続け、何とか大宮店までたどり着き、京都本線は制覇。

7時14分発の快速急行で一気に十三へとんぼ返りを決める・・・

「何を言つてるんですか? 淡路で降りますよ」

えつ? 淡路は全店閉まつてるんちやうんか・・・

「千里線を忘れてませんか?」

あつ・・・千里線か。

という訳で十三に行く前に淡路で下車し、千里線に乗り換える。

電車は7時51分に出発。しばらくは高架化工事真っ只中の区間を進む。個人的には下新庄駅が結構おもろいなつて思うんですけどね。というのも、この辺りで東海道新幹線の高架を跨ぐ関係で、高架化した曉にはめちゃくちゃ高い駅になるのだ。多分、河堀口とかと同じぐらいなんちやうんかな。高架化予定の区間が終わると、途端に大きなカーブを描き出す。途中の千里山まではこんな風にグニャグニヤしたルートを進んでいく。

だが、千里山を出ると一気に直線区間へと変貌。ニュータウンの路線らしくなる。

そして南千里、山田を巡つて京都線系に残るアズナスは全店制覇。しかし、俺達は梅田方面に引き返さずに、そのまま改札を出て行く。

え？お前、うどん行くんやつて？まあ、どこに行くかは次の機会に話すわ。

第五十四話 「V・m o n o s a a s n a s !」

山田駅に着いた俺達はバス乗り場に向かう。

乗ったのは吹田市内線18系統 千里中央行き。実は阪急阪神グループのよしみとして、北急線内にもアズナスがあるのだ。ちなみに、北急線内のアズナスは元は別の会社が経営していた（もしかしたら、直営やつたかな……知ってる人いたら教えてくれ）らしいがいつの間にかアズナスに変わっていて、今回のローソン化で二度目の転生を果たすことに……

バスは49分に千里中央に到着。久しぶりに来たな、二十六話以来か。えつ、メタいつて？ 諦めろ、これはそういう小説やから。

ここで、朝飯を食べていない事に今更ながら気づき、駅近のロッ○リアで絶品なチーズバーガーを食つて、すぐに駅に向かう。千里中央駅にはエクスプレスと亞種のエクスプレス——なるものがあり、まづはbやない方へ。ここつて結構狭いスペースに店が密集していて、個人的にこういう雰囲気は結構好きやねんけどなあ……

そんな事を考えていると目的地に到着。しかし……

「あちゃー、撮りづらいですね……」

店の前の通路には人が沢山いて、なかなか撮りづらい。こういうのを撮る時はトラブルを防ぐために人が多いときにはなるべく撮影を控えるようにしているのだ。

「どうする？」

「このまま待つても良いんですけど……まだまだ先は長いですからね」

「ほな、ここはまたの機会つてことか？」

「はい……千中はまだ行きやすいですから学校の帰りしなに寄る事にしましよう」

という訳でこの『千里中央3号』はまたの機会にする事に。ただ、この駅にはもう1店舗、bの方が残つてゐる。

ただ、bは改札内にあるので切符を買ってホームに入る。

「あ、あつたあつた……つてちつさいな」

「ここはbの中でもかなり小さい部類に入るんですよ。見てくださいよ、こっちから見たら自販機しか見えないから、元ラガールショップの自販機コーナーみたいになってるんです」

香里奈、阪急民でも忘れかけてるラガールショップを引き合いに出すんじゃありません。他の地域の奴らは絶対ボカンとしてるから。

そんなこんながあつたが、こっちのbの方は撮影に成功。

北急線内にはもう1店舗、江坂にもあるのだが、江坂店は日祝日は休業なので今回はバスし、直接、この9時8分の電車で梅田に向かう。車両はアイボリーの車体に、赤とマルーンの帯が特徴の北急の800形。あのピュアアアアン!!?って警笛が特徴のやつやな。

出発してからはちょっと地下区間を走ると、すぐに新御堂筋の間から顔を出し、数キロ先の淀川あたりまでずっと道路と並走。しばらくは余裕のある車内だったが、新大阪で一気に人が乗つて、あつという間に満員電車が完成。梅田で降りるんめっちゃ大変やつた・・・土日は梅田まではあんなに混まへんのになあ・・・おい作者、何でもかんでも混雑させりやあいと思つとんのか!!?

「そのとーり!」

クソツタレ!こんな終わり方しやがつて!

第五十五話 「駆け込み乗車ダメ、ゼツタイ」

時刻は10時前、俺達は地下鉄の梅田駅を出て、本日二回目の阪急梅田駅へ向けて歩みを進めていく。

「えー、次は神戸線やつたか？」

「はい。もうちょっとで普通が出ちゃうので急ぎましよう。次は園田ですよ」

梅田駅のエスカレーターを早歩きで上つて改札へ向かう。最近はしきりにエスカレーターで歩くなつて言つてるけど、急いでる時は無理があるわ・・・

改札を通つてホームに入ると、既に目的の電車、9時31分発普通神戸三宮行きが待ち構えていた。

しかも、既に発車メロディーが鳴つていたので急いで最後尾の車両に乗り込む。

みんなは駆け込み乗車、やつたらあかんで！

梅田のターミナルを出ると、お馴染みの三複線に入り、宝塚線の7018Fと並走する。あ、ちなみにこの普通は7014Fやで。

そして中津を出発した辺りで、2分遅れで出発した京都線の行きが乱入・・・つてこいつも70000系列かい、しかも異端の73324F。まさかの70000系列三つ巴、しかもおんなじ顔で並走バトルつて・・・シユールやな。

バトルの結果は宝塚線の7018Fが優勝。次に我らが7014Fが続き、途中乱入した73324Fは最後に失速し、ドベになつた。十三を出ると、ぐんぐんスピードを上げていき、あつという間に園田に着いた。

競馬に詳しい人なら、園田の地名は聞いたことあるやろう。

この駅は普通しか止まらないものの、実は特急が止まる夙川や岡本より乗降客数は多く、結構賑わっていて、競馬場へ向かうファンバスもレース開催日には頻発している。

そんな園田のアズナスは改札を出てすぐのところにあつた。

更に、もうすぐ閉店するエクスプレスーbの方も写真に納め、一駅

隣の塚口へ。

無論、ここにもアズナスはあるのでその写真を撮つて、急カーブ上にある伊丹線ホームへ。

「あつ、6012Fやん」

「確か、後ろの窓が無い編成でしたつけ。ちょっと前まで宝塚線で走つてたんで、これは知つてるんです」

どうやら8両時代の時に乗つてたらしい。この6012F、今では阪急では3編成しかない『運転席の後ろの窓が無い』車両なのだ。昔は6000・7000系は大多数がこのタイプやつたんやけどな……勿論（？）、俺達は運転席の後ろの座席に座る。

電車はキイキイと車輪を軋ませながら直角カーブを通過。ここを過ぎると、複線になつて、終点の手前まで直線が続く区間に早変わり。稻野、新伊丹と停まつていき、高架区間に入つて、伊丹駅に到着。元は宝塚への延伸を見込んでさつきの園田駅みたいな構造になつていたが、阪神淡路大震災でブツ潰れて、今は頭端式のホームになつている。太陽が西から登らん限り、宝塚への延伸の可能性はないやろう。勿論、アズナスも忘れずに訪問。

時間も惜しいので、折り返しの電車で塚口に戻る。

その後、武庫之荘の店舗を巡つて、いよいよ神戸線の中間地点にして、阪急随一の主要駅、西宮北口に向かう。

この駅で乗客の大半が降り、進行方向左側の扉から降車ホームに向かつたり、右側の扉から2号線の特急に乗り換えたりする。俺達は前者である。『コウシャ』なのに『ゼンシャ』、こりやあうまい！

「何言つてるんですか・・・」

ア、スマセン。でも、その冷たい目で見られるのもまた・・・

「シメますよ？」 ポキポキ

ア、スマセン、ホントスマセン。

香里奈に冷たい目で見られながら、多くの人が行き交う西宮北口の駅構内を歩いていく。阪急ナンバー3の乗降客数を誇る駅だけあって、複数のアズナスがあつて、ホーム上有る店舗は7日に閉店していたので訪れることが出来なかつたが、他の店舗についてはまだ

空いていて、訪問に成功。せっかくなので今津線ホームでお菓子を
買って、次の目的地に向かう。
ちなみにこんな店舗でした！

第五十六話 「ヅカたるもの、ふいーばー！」

その後、西宮北口のアズナスを一通り巡り終わって、俺達は次の目的地に向かうべく、特急に乗車し、神戸へ向かう・・・とでも思つたか？

俺もさつきまでそう思つてた。

しかし・・・現在乗つてるのは阪急随一の魔改造系列、5000系5012F。

勘のええ人はこれで俺らがどの路線に乗つてるかわかるやろ？

そう、今津（北）線である。

いや、ホントはそのまま岡本に行こうと思つたんですけどね。香里奈が『今津線にもアズナスはあるんです！』って言つて俺の手を握つてそのまま停まつていた電車にぶつ込まれました。力めつちや強かつたです・・・まるでゴリr『総一さん？シメられたいんですか？』アツ、スマセン。

そんな事がありまして、現在俺達は西北から3駅、仁川駅にいます。

ここアズナスはエクスプレスのbやない方、つまり改札外にあるので改札を出る。

「しかし、実際に見ると壯觀ですね・・・」

「今日はレースがあるからな。午後になつたらフル稼働や」

この駅の改札は阪神競馬場の最寄りだけあつて改札機の台数はめちゃくちや多い。多分、梅田の次に多いぢやうんやろか。ただ、常時フル稼働だとただただ電気代を食つていくだけなのでいつもは駅員室近くの6台しか動いていない。午後のレースが始まる頃には全部稼働するんやけどな。

そして、仁川駅といえどもう一つ、名物の改札機があるんやけど、それについてはまた別の機会で触れよう。

次に訪れたのはさらに2駅先の逆瀬川駅。

駅前は近くに宝塚市役所や消防署がある事や、西側の住宅地へのバス路線も高頻度で来ていることもあって、駅前は活氣がある。しか

も、高級邸宅街が近くにあるので雰囲気もなんとなくハイソ。前に香里奈と雲雀に行つた時もこんな感じやつたな……。

その後は、宝塚駅まで行つてここアズナスも廻り、折り返しの電車で西北に戻る。

その途中・・・

『宝塚南口一、宝塚南口です・・・』

「あ、音楽学校の子や」

宝塚の次の駅、宝塚南口で某華撃d・・・あつ、字イ違う。某歌劇団の養成学校の学生と思しきグループを発見。

「よく分かれますね」

「いや、あの学校つて、皆なんかリーゼントみたいな髪型してるから、一発で分かんねん」

「なんであんな髪型してるんやろなあ。

「あ、お辞儀しましたね。それも深いやつ」

「多分先輩か先生が乗つてるんやろうな。あの学校、礼儀の作法はめっちゃ厳しいからな」

「ええ、確か入学前に自衛隊から直接、礼儀作法に関する指導を受けるとか」

「よう知つてんなあ」

「実は私の母がこの学校の卒業生で、元男役なんです。そうりゆうはくと蒼柳白鷺そうりゆうはくとって言う芸名だったんですけど・・・」

蒼柳白鷺・・・なんか聞いた事あるな・・・調べてみよか。

「・・・つてこの人月組のトップスターやん！しかも女優やし。だから聞いたことあつたし、何回か家に行つてるけど会うてなかつたんか・・・」

父親は衆議院議員、母親は元トップスターの女優・・・恐ろしい家系やな。

その後もそんな話をしていると、気付けば既に西北に着く直前になつていた。

いやあ、驚きやつたわ。

さあ、気を取り直して神戸本線に戻ろう。

今津線で結構時間を食つたらしく、次に乗つたのは11時13分の特急。車両は8003Fやつた。

ここで乗客がかなり入れ替わるので、座るのは簡単やつた。

数分後、神戸市内最初の駅である岡本駅に到着。ここはホーム上有るので撮影は容易だつた。

それを終えると、後続の普通に乗り込んで六甲駅へ。ここが8月17日の時点ではこの駅が阪急線内最西端のアズナスになる。

これでアズナスは全駅制覇・・・と言いたいところだが、まだまだ店舗は残つていて。

次の電車でやつてきたのは神戸三宮駅。降りたついでにちょっと前にグランドオープンした阪急のビルを撮影。震災前にあつた線路を跨ぐアーチは復活せえへんかったけど、レトロな雰囲気になつていて、めつちや雰囲気に合つていた。ここアズナスはつい先日に最後の1店舗が閉まつて現在はアズナスはないんやけど、ここにきたのは乗り換える為。

そう、阪神電車である。

第五十七話 「カツでも食つて活力つけよう」

前の話で神戸三宮に降り立つた俺達。

ここからは始発から約7時間乗り続けた阪急に一旦別れを告げ、ここからは阪神電車に乗り換える。

それにしても・・・

「やっぱり神戸は違うなあ・・・」

俺が住んでいる都島の街や、梅田の雑多さとはまた違う、繁華街なんやけど、どことなくおしゃれな感じがブンブン漂っているのだ。それがまた神戸に来た実感を湧かせる・・・

ヽグウウウウ

なんか腹減ってきたな・・・もう12時回ってるんか。

「なあ、そろそろお昼やし、なんか食うか?」

「そうしましようか。私もお腹が減つきましたし」

という訳で、こちらで腹ごしらえをする事に。

「それじゃあ、どこに行きましょう?」

「始発から乗つてあんまり食うてへんから、ガツツリしたもの食いたいんやけど・・・」

「全然いいですよ!」

香里奈は笑顔でOKしてくれた。普通の女の子はこんな事言うとあんまりええ顔しないんやけど、彼女は全然嫌な顔せずに聞いてくれる。無理してる感じもないし・・・

前に大丈夫か聞いた時も『総一さんと一緒に食べるものはどれでも美味しいから大丈夫です』と言つてきたからな。そんなところが大好きやで、香里奈・・・

「も、もう・・・いきなりそんな事を//」

アカン、いつの間にか口に出してたみたいや。香里奈はゆでダコみたいに真っ赤になつてる。

「ハア・・・//。気を取り直して、行きましょうか」

「せ、せやな」

そこから三宮周辺を歩いていると洋食屋を発見。メニューを見て

も結構安かつたので、この店を選んだ。

昼食どきで混雑している店内に入り、注文して数分後、料理が運ばれてきた。香里奈はグラタン、俺は名物のとんかつ定食である。

「いただきまーす」

食べ始めるとなつかつはめちゃくちや歯応えがあつて、衣もサクサク。ソースも手作りらしく、非常にこのとんかつにマッチしていた。ホンマはもうちょっと美味しい事を伝えたいんやけど作者の野郎がこれが限界だと言いやがる。もうちょっと仕事しろ。

グラタンを食べている香里奈の方を見てみるとこちらも恍惚の表情をしている。

結論、めっちゃ美味かつた！

ランチを終えて、今いるのは阪神神戸三宮駅。

今の時点では三宮唯一のアズナスとなつたこの東口のエクスプレスを撮影して、ホームに入る。

数年前に大リニューアルを終えて、見違えるほどにきれいになつていて、近鉄直通の快速急行が主に発着する2番線は開業当時の形状に復元されている。

俺達が乗るのは今やつて来た普通大阪梅田行き。車両は・・・ドン

！

なんと5550系がやつてきました！

「これって珍しいんですか？見た感じは普通の5500系っぽいですけど・・・」

フツ、甘いな香里奈。この5550系は阪神最後の看板車の代替と

して作られたこの1編成しかなく、しかもアルミやステンレス車体が当たり前になつた今の車両にしては珍しく、普通鋼で作られている。見た目は5500系っぽいけど、実は結構な異端児なのだ。

「へえ・・・平林さんだつたら喜びそうですね」

ここで香里奈は俺のもう一人の彼女の名前を出す。アイツ、誘つて来たらよかつたな・・・

「でも、平林さん、朝苦手だつたはずですよ」

「あつ・・・せやつたな」

そう、紗里はとんでもなく朝が苦手なのだ。どれくらいかと言うと、鉄道職員御用達の、時間になると送風機で膨らむ布団を使つても起きない程。

今日は始発から動いているので、多分無理やつたやろうな。

電車は地下区間を抜けると、踏切を一つ挟んですぐに高架区間に突入し、大石駅に到着。

勿論、アズナスの写真も忘れずに撮つておく。

そして、一本後の普通に乗つて、一路東に向かう。

第五十八話 「緑輝く我が名ぞ・・・」

大石からジエットカーに乗つて3駅、御影駅に到着。この駅では優等列車を2本待避するために2番線に入る。

アズナスを撮影した後、特に何もすることもないで待つていると、通過放送が流れる。梅田方面は女性のアナウンスやけど、聞いて安心する声やな・・・

『まもなく、1番線を電車が通過します。黄色い線の内側へお下がりください・・・』

その後、音楽が流れて2本目の電車、快速急行がやつてくる。この駅のホームは急カーブ上にあるので、ホームが近鉄車両6両分を確保できず、快速急行は全列車通過しているのだ。ちなみに、1本目の直通特急は改札を出ている最中に通過しましたのであしからず。

「う、うるさいですね・・・」

今、快速急行が通過してゐるやけど、車輪がキイキイ軋む音でめちゃくちやうるさい。

さつきも言つたんやけど、急カーブ上に駅があるので制限速度も遅く、両数も8両と長いので通過時間が長いのだ。

十何秒かかつてようやく電車が通過していく。長かつたなあ。

次に向かつたのは二駅先の魚崎。

ここも巡礼も済ませて、神戸市を脱出。西宮の次の駅、今津に殴り込み、いよいよ我らがタイガースの聖地、KOUSHIENに足を踏み入れる。

「あー、ついたついた」

「虎党たるものここは外せませんからね！」

言つて香里奈は甲子園にあるうちの1店舗、甲子園西口店の写真を撮る。この店は甲子園球場のレンガをモチーフにした店で、タイガー・スグツズも売つてゐるという。流石です。

しかし、この店は2018年に開店したばつかの最新鋭の店舗なのに僅か3年でアズナスの看板を下ろすという、ある意味一番不憫な店舗なのだ。合掌。

この後、東口の店舗にも行つて甲子園を制覇。字面だけ見ると、めっちゃすごいことやつた風に見えるな。

「もう10時間近く乗つてんのか・・・いつ終わるんやろ?」

「でも、まだまだ店舗は残つてますからね。撮り鉄の意地にかけて、総一さんを置いてでも、撮りますよ!」

「ちやつちやと撮つてくれよ。読者も絶対飽きが来てるからな」

ただでさえ山場を作りづらい話なんやら、そろそろ終わらせておかな・・・

ホームに戻ると、次にやつて来たのは阪神の初見殺し、快速急行は近鉄奈良行き。

一体何が初見殺しかというと、こいつ、停車駅が一定ではないのだ。種別的には特急の下位互換にあたるこの種別、しかし、さつきも言つたようにこいつは特急停車駅である御影、土日ダイヤに至つては芦屋も通過するのだ。こういう『千鳥停車』は阪神のお家芸で、昔は特急が止まるのに準急が通過したり、甲子園→梅田間をノンストップで走つたりする電車があつたりと昔はカオスそのものやつて、だいぶマシになつたんやけど、依然として、お家芸は継承されているのだ。これに乗つて次に向かつたのは尼崎。言わざと知れた車庫の最寄駅やな。

尼崎にもアズナスはあるのだが、一旦なんば線から先に巡ることにしているのでここは素通り。

そして、西九条駅に到着。ここでも巡礼を済ませ、いよいよ2009年開業の区間へ。

ただ、この区間は防音シエルターのせいで眺めは最悪。せいぜい安治川を渡る時にチラツと見えるぐらいで、その後はすぐに地下区間に入つてしまふ。くそう、につくシエルターめ。

ドーム前店は2009年に開業した区間の中で唯一のアズナスで、全店舗の中でも一番南側に位置している。難波は近鉄のテリトリーやからな。

ホームも吹き抜け構造でとつてもキレイ。

「それじゃあ、尼崎まで戻りましよう!」

これでなんば線内は全て制覇。残すは阪神本線の大阪梅田～尼崎間のみで長かつたアズナス巡礼もようやく終わりを迎える。

そして、尼崎まで戻つていよいよラストスパートをかけていく。

まずは大阪市内最西端、千船駅。ここで直通特急の通過待ちをするので急いで改札まで降りて、巡礼を済ませる。おかげで、10分の口スを回避することが出来た。

「さあ、総一さん。急ぎましよう！」

次に姫島駅。ここを済ませると、阪神本社の最寄り駅、野田。ここを巡ると残すは一駅となる。

「つ、次で最後やな……」

「は、はい……」

既に半日以上も電車に乗り続けて俺も香里奈も疲労困憊。香里奈はさつきまで張り切つてたけど、やつぱり無理してたんやな……そして、今回の巡礼最後の駅、阪神大阪梅田駅に到着。残るアズナスの写真を撮つて行き……

パシヤ

「こ、これで終わりか……？」

「はい……お疲れ様でした！」

「終わつた……！」

5時に出発してから13時間19分、ついに今行けるアズナスの全店制覇に成功！

「……ふふつ、こうやつて一緒に疲れるまで電車を乗り尽くしたのもいい思い出になりますね」

「最初、香里奈に巡礼やるでって言われた時はゲツつて思つたけど、終わつてみれば、楽しかったな……」

「そうでしょう、そうでしょう。まあ、今日は疲れたんで、帰りましょうか」

「おう、そうか。おつかれ総一さん、ちよつと……」

俺が背を向けて帰ろうとするとき、香里奈が呼び止めてくる。

「?なんや」チュツ「!?!?」

気が付けば、香里奈が俺の唇に自分の唇を重ねていた。

「今日はありがとうございました。また遊びましょうね！」タツタツ

タツ

言つて香里奈は顔を赤らめながら阪急百貨店の方に駆けていった。
そしてあっけにとられている俺が一人残される。

「・・・香里奈」

（その不意打ち、ずっとこいわあ～！）

こうして、アズナス巡礼はひとまず終わりを迎えた。

第十章「第四十二代鉄道部部長選抜問答」（正式名称）

第五十九話「見下げてごらん」

アズナスの巡礼を終えた後、先の東京遠征などで懐が南極並みに寒くなっていたので、しばらくはいつも通りの日常に戻り、勉学に励んでいた。

そしてある日、やるべきことを済ませて鉄道部の部室に入り浸れていいると、

「なあ、総一。これ見てみてや」

同じく鉄道部員にして俺の親友、桜川隆太が俺にスマホの画面を見せてくる。

「どれどれ・・・京阪電車のダイヤ改正？」

その内容というのは大阪府の北河内地域、京都府の中南部、滋賀県大津市にかけて路線を持つ関西五大私鉄の一つ、京阪電鉄のダイヤ改正に関するものだつた。そういう、なんかどつかで小耳に挟んだな・・・どういうところが変わるんやろ？

「えーっと・・・うわ、なんやこれ」

「せやろ、俺も最初見た時は正気を疑つたわ」

そこに書かれていたのは減便、減便、減便の嵐。

まず、昼間時間帯は10分ヘッドから18年ぶりに15分ヘッドに減便。^{あほーん}さらにはラッシュ時間帯も減便、^{あほーん}作業時間確保の名目で最終電車の繰り上げなど終日にわたつて減便

・・・これ、大丈夫か？

「特に大阪市内とかやばいで。普通が15分に1本つて、俺が使つてる谷町線の半分にもならへんやん」

「確かにせやな。ただな、この改正であるもんが出でくんのよ」

「ほう」

「快速急行が昼間に復活すんねん」

「えつ、快速急行が!?」

俺は目を見開いた。京阪の快速急行は中之島線が開業した200

8年に出来た比較的新しい種別で、当初は出町柳～中之島間で1時間に2本設定されていたが、中之島は知つてゐる人はわかると思うが、バリバリのビジネス街で、観光地らしきものは皆無に等しく、他路線との乗り換えも絶妙にしづらいというのもあって、全然人が乗らず、わずか1年でメスが入り始め、改正の度に減便や、淀屋橋への行先変更を繰り返し、中之島線の快速急行は現在、平日に樟葉行き1本のみ。土日は設定なし、というか土日ダイヤはそもそも優等種別すらない。

そんな不遇な快速急行、今改正で普通や準急の減便の煽りを受けた大阪府内の主要駅の救済のために10年ぶりに昼間時間帯に復活するのだ。あ、勿論淀屋橋発着つすよ？

「まあ、今改正の目玉といえばこれとライナー増発ぐらいしかないんやけどな。後は最悪よ」

「確かにこれは京阪民にとつちやあ阿鼻叫喚ものやな。でも、快速急行の復活はおもうそうやな。今度行つてみよ・・・あつ？」

「?どうした」

「今、金がないねん」

最初にも言うたけど、俺の懐は南極になつてゐるからな。財布温暖化が進行するまで待つておかな。

「ああ～、そういう事か」

隆は苦笑混じりに納得した表情を見せる。

「やから、当分は大回りとか、安く行けるところやな」

「出かけない言う選択肢はないんかい」

「ないつ！」

「即答!!?」

そんな話をしていると、

「すいません、遅れました」

「おつ待たせしましたー☆」

香里奈と紗里の二人が同時に部室に入つてくる。

「よつす」

「おつ、こんにちは」

俺達も挨拶を返す。

「えへへ、総一さん♪」ギュウ

「アハハ。ええな、総一。こんな可愛い彼女さんがおつて……」

隆が苦笑混じりに返してくる。その表情は少し悲しそうだつた……

「そういえば、総一さん。なんか部長が話があるつて言つてましたよ」

「部長が？ そういえば部長、どこおんのよ」

「こゝや、こゝ」

「え？ あ、本当だ。さつきまで一緒に居たのに」「…………（「…………」）

”キヨロキヨロ

「今もおんねん！」

「本当ですね。どこに行つたんでしょう？」

「・・・おーい、ここや！」

「あ、ぶちよーの声だ。でも、声しか聞こえないな」

「そうですね。あつ・・・ぶ、部長ー、どこにいるんですかー？」

「朝潮、目エあつたやん！ 絶対気付いてるやろー！ ハア、これ言わな先に進まへんのかい・・・『見さあげてごらん』♪

部長の声のする方へ近づいて、顔を見下げてみると……

「「「うわっ！」」

なんとそこには部長の姿が！

「やつぱりこのネタか！ 僕は○だか師匠みたいに背は低ないで！ ついでに、このネタはほんまに関西人しか分からんやつやん！ 圭人を見てみろ、何が起きてんのか全く理解できない顔やん！」

部長が指差す先には何が起きたか分からず、混乱している圭人の姿が。東京人には分からんかつたか……。てか、いつの間にいたんや。「「「まあまあ部長、ウケたんやからええやないですか」「」「ようないよ！ ハア……」

「こゝ、これは一体……？」

「まあ、大阪人のボケよ、ボケ」

頭上にはてなマークが浮かんでいる圭人に部長が疲れ声で説明する。

「あ、そういえば部長。大事な話があるつて聞いたんですけど」

「そうそれや！ やつと本題に入れるわ。実はな……」

第六十話 「さあ、答える」

「あ、そういうえば部長。大事な話があるって聞いたんですけど」

「そうそれや！やつと本題に入れるわ。実はな、今日来てもらつたんは他でもない。次期部長についてなんや」

「「「「？」」「」」

「そうか、もうそんな時期やつたか・・・」

この学園では部活の部長の任期は1年間と定められていて、その交代日となる日が近づいているのだ。2年生部長の場合だと、部員の総意次第で続投も可能で、俺が知っている限りやつたら茶道部、アルティメット部、ホスト部、映像研究会がこれにあたつてたはず。しかし、うちの部長の岸辺弦一郎はご存知の通り、3年生。という訳で新たな部長を決める必要に迫られているのだ。

「成程・・・では、一体誰にするんですか？」

「2年生から選ぼうとおもてるんやけど・・・正直言うと決めかねてんねんな・・・」

「「「「・・・」」「」」

「一応、入部したての桜川を除いた2年生組3人に絞つてあんねんけど、みんな部長としてやつてけそうなポテンシャルがあるから」

「どうやら部長候補は俺と香里奈と紗里のようだ。」

「それじゃあ、どうやつて決めるんですか？」

「それはな・・・鉄道クイズや」

「「鉄道クイズ」」

「せや。やつぱり、伝統ある鉄道部の看板を背負う以上、鉄道知識に精通していないと話にならん。そこで、鉄道部の部長になるにふさわしいやつをクイズで決めようつちゅう訳や」

「成程・・・」

香里奈が腕組みをして考えるそぶりを見せ、紗里もなにか考えているようだ。それにしても部長をクイズで決めるつて・・・まあ、選出方法は各部に任されてるから別にクイズでもええんやけど。

「まあ、やつてみたいっていう気持ちはあるねつ☆」

「そうですね。自分で部のあり方を決められるって言うのもいいです
し」

「俺もやりたくない言うたら嘘になるな」

「おし、ほな決まりや！ちょっと準備するから待つとき」

「言つて部長が部室から出ていき、何処かに行つた。

「・・・それにしても、まさか恋人同士で鬭うとはな」

「ええ、でも総一さん。私、負けませんからね！」

「フフフ、あたしも全力で勝ちにいくよ☆」

「おう、望むところや！」

三人で火花を散らしあつていると、

「あのー。俺達の事、忘れてませんか？」

苦笑を浮かべる隆と圭人。あつ、ごめん置いてけぼりになつてた
ね。

そこから数分待つていると・・・

「お待たせ！」

部長が道具を何個か携えて戻ってきて、それらを机に配置していく。
その中にはクイズ番組とかでよく見る、ボタンを押すと○が書かれた板が立つ機械もあつた。要はめちゃくちゃ本格的に作つていて。
「いやー、一度やつてみたかったんよ。クイズの回答者」

いや、部長。それが本音やろ。

ガヤガヤ

「？おい、なんか人が集まつてへんか」

「あ、ギヤラリーの皆さん。どうぞどうぞ、入つてください」

おい、ギヤラリーまで呼んどつたんかい！鉄道に興味があつたん
か、クイズに興味があつたんか、それともただのミーハーなんか知ら
んがいっぱい来たな。

訳のわからない状況に戸惑つている俺たちを他所に、部長が声高ら
かにクイズの開始を宣言する。

「それでは、ハーレムカップルによる部長職争奪、鉄道クイズを始めた
いと思います！」

『ワアアアアア！』

「「おい、岸辺ッ!!?」」

なんちゅう文句でギャラリーを集めとんねん！でも事実やから言
い返せへん・・・

「このクイズは作者の予定によつて問題数が決まるという自由度が高
い s s ならではの仕様となつていて、全問題終了時に最も得点が高
かつた人が第42代鉄道部部長となります！」

「本当に珍しい仕様ですね・・・」

「おい、作者！とつとと終わらせてくれよ！
うーん、どうしよつかなあ。

「それでは参ります、第1問！」

第六十一話 「部長選抜クイズ（前編）」

「それでは、まいります。第一問！」 デツ、デン
いよいよクイズのスタート。効果音が鳴つて後ろのテレビから問
題が映し出される。

そこには・・・

『第一問 JR西日本で運転される新快速は何両で運転されるか答え
よ』

やつぱり一問目いうこともあつてかなり簡単な問題が出て来た
な。答えは勿論12両のはず・・・でも、そんなストレートに出して
くるかな。もしかしたら・・・

「さあ、皆さん回答が出来たようです！フリップオープン！」

俺『4・8・12両』

香里奈『4、8、12』

紗里『4両・8両・12両』

「答えは・・・4両と8両と12両でした！全員正解です！」

これは二人も感づいたのか、同じ答えを出してきた。部長、ハナか
らこんな引っ掛けを出してくるなんて本気やな。

「新快速は12両で運転されることがほとんどですが、近江今津・米原
以北や姫路以西の末端区間では基本的に増解結が行われ、4両や8両
で運転されることもあります。もつといふとタラッシュ時の大阪始

発の一部は8両編成です。という訳で正解はこの3つでした！流石、我が部のホープ達！引つかかりませんでしたね」

あ、やっぱり引っ掛けにいつてたんや。

「それでは、次の問題」デッデン

『第二問 次に挙げる区間のうち、一番普通列車の本数が少ないのはどれか

- ①上越線 水上→越後中里間
- ②木次線 出雲横田→備後落合間
- ③博多南線 博多→博多南間
- ④日豊本線 佐伯→延岡間
- ⑤福塩線 府中→吉倉間』

「ああ、成程

「これは聞いたことがありますね・・・」

「何だつたけ・・・」

「さあ、回答が完了したようです。フリップオーブン！」

俺『③』

香里奈『④』

紗里『④』

「白庭候補だけ③を選びましたが、正解は・・・③！正解者は一人だけです！」

正解を聞いて、香里奈と紗里は『そうやつた！』と言わんばかりに顔を歪ませる。

選択肢はいずれも本数が普通列車の本数が約5往復以下という僅少区間ではあるが、博多南線については普通列車が0本、つまり1本もないのだ。

多分、この二人は博多という大都市の名前に釣られたんやと思うけど、博多南線つて在来線なんやけど、新幹線の車両を使うから全列車特急扱いになるからな。

ちなみに、一人が間違えた④も普通列車が僅か1・5往復しか走つておらず、度々18きつぱーを悩ませてきた難所ではあるんやけど、今回は不正解。

これで俺が頭一つ抜け出した状態に。
「それでは第三問！こちらは早押しクイズです。この写真が撮影された駅を答えてください！」

今度はモニターにこんな写真が表示された。

白と赤の電車やから、間違いなく近鉄やな。となると・・・
ローン

「ここで押したのは朝潮候補！答えをどうぞ」

まづい、撮り鉄に先越された！

「えーっと、名張駅です」

「・・・」

ピロピロピローン！

「正解！ 答えは近鉄大阪線の名張駅でした。正解者に拍手！」

写真系の問題はやっぱり強いな。流石撮り鉄ガチ勢といつたとこ

やろうか。

「ふふ、これで並びましたよ」

「さあ、まだまだいきましょう第四問！ の前に・・・」

『??』

「一旦C Mです！」

『ズコーン！』

この場にいた全員がずっこけた。

第六十二話 「部長選抜クイズ（中編）」

『・・・ヤトリーはレジャービル♪、グラントーへいらっしゃい！』
「はい、CMが明けたところで第四問にまいりましょう。問題！」デッ
デン

どうやらクイズ再開のようだ、しつかし、グラントーのCMつ
て最近あんまり流れへんくなつたなあ・・・えつ、何でCMが流れ
たんやつて？細えことに首突っ込むんやないよ。

『第四問 交直両用特急電車である485系のうち、ジョイフルトレ
インに改造されずに残つていた最後の編成名を答えよ（早押し）』

うわ、ムツズいの来たなあ。これ何の編成やつたつけ。新潟のやつ
やつたつてのは覚えてるんやけど。

ローン

まず最初に押したのは香里奈。

「ふふつ、こんなの簡単ですよ。私、お父さんにこれを撮るためにわざ
わざ糸魚川まで連れてつてもらつたんですから。これで正解出来な
きや、コスプレしてやりますよ！」

「おお、自信満々ですね。では答えをどうぞ！」

「答えは・・・R26編成です！」

『・・・』

部室に数秒の間、沈黙が続く。そして、
ブブーツ！

「!?!?」

「残念、不正解です！朝潮候補はお手つきということでの問題の解
答権を失います」

「」

ローン

すかさず回答ボタンを押したのは紗里。こちらも自信満々な様子
だが・・・

「平林候補、答えを」

「はいっ、R28編成でーす☆」

ピロピロピローン

こちらは正解。車両鉄の意地を見せた。

「朝潮候補も惜しかったんですけどね、R26編成もR28編成も最
後まで生き残っていた一般車グループなんんですけど、R28編成の方
が3日廃車日が遅いということで、正解はR28編成でした、正解者
に拍手！」

パチパチパチパチ

「そして、朝潮候補は罰ゲームとしてコスプレをしてもらいます！」

『ワアアアアア！』

「ちょっと待つて下さい！何でそんな・・・ハツ！」

香里奈は抗議の意思を示そうとするが、さっきの発言が原因である

ことに気づき、すっかり意氣消沈してしまう。

「そ、それで何を、き、着せるんですか？」

さつきまでの威勢は何処へやら、汗はダラダラ、顔色はすっかり青
ざめてしまっている。

「「ハイ！それについては我らにお任せ頂きたい！」」

そんな声が群衆の中から聞こえるのと同時に、群衆がモーセのアレ
みたいに二つに分かれ、その中央から何人かの生徒が現れる。

「あ、あれ？貴方達は」

「私達はコスプレ同好会！コスプレのことなら私達にお任せ下さい！」

そんな同好会があつたんや。まあ、ホスト部があるぐらいやつたら
これがあつてもおかしないかな。

「そ、そうですか。ならどんな衣装がいいでしようか」

突然のコス研の登場に戸惑いながらも部長は三人にそんな事を言
う。

「それなら、この衣装はどうでしよう・・・」

言つて部員の一人が衣装を取り出し、香里奈を連れてどこかに向か
う。

数分後、香里奈が衣装を着て戻ってきたが・・・

「そ、それは！」

「は、恥ずかしい・・・」

その衣装は、黒を基調とした露出度の高いスースに、裏地が赤いマ
ント、ロングブーツ。しかもね、香里奈つて結構でかいんですよ。何
がとは言わへんけど。やから非常に目の保y・・・ゴホン！やり場に
困る衣装だった。

「これって・・・」

「そう、某ミルキィな探偵の敵役、アンリエット・ミステール、またの
名を『怪盗アルセーヌ』でござります」

『ワアアアア！いいぞお！』

その場にいた群衆、主に男子が野太い歓声を上げる。でもなあ・・・
「おい野郎ども。野太い歓声上げるんは勝手やけど、彼氏がすぐそば
におんのを忘れんなよ・・・」

『は、はい・・・』

俺が少しドスの効いた声でそう言うと、たちまち歓声は鳴りを潜め
る。

「でも、この姿の香里奈も・・・悪くない」

「うう・・・」//

「おい、そこのカツプルさん、イチャイチャするんはクイズが終わつて

からにしてくれよ」

あ、そうやつた。今クイズやつてるんやつたな。

「それでは気を取り直して、第五問！」

『第五問 現在世界で一番長い鉄道トンネルの名称を答えよ。（早押し）』

「オラア！」ボーン

問題が表示された途端、ものすごい速さでボタンが押される。押されたのは・・・香里奈。

「速いですね・・・それでは、答えをどうぞ」

「ゴッタルドベーストンネルです」

「・・・正解」ピロピロピローン

「・・・はあ、もう吹っ切れました。折角、怪盗のコスプレしてるんですけどから、部長の座も華麗に頂きましょう」

そう言い放つた香里奈の声は、なんかいつもと少し・・・いや、結構違っていた。

「総一さん、ここからは本気で行きます」

や、ヤバい・・・完全に目がいつてる。

「ど、どうしよう。ちょっと怖いよ・・・

紗里が涙目で俺の腕に抱きついてくる。当然、そんな事をする

と・・・

『クソツ、このハーレム野郎が！』

『リア王・白庭総一に死を！』

あんな風に火に油を注ぐ結果になつてしましました。ああ、神様仏様お客様。私は何か気に障る事をしてしまつたのでしょうか？

しかし、そんな事を考えてもしようがない。やつてやろうやないの。

第六十三話 「部長選抜クイズ（後編）」

その後も白熱した戦いは続き、気付けば時刻は夜の7時を回っていた。

ちなみに、現在の成績は以下の通り。

俺・16pt

香里奈・15pt

紗里・17pt

前半は撮影地を当てる問題や、車両編成の問題などで香里奈と紗里が差をつけていたが、路線や運行形態など、乗り鉄有利な問題や、雑学など問題が出てきた後半で俺がが追い上げを見せ、誰が勝つてもおかしくない状況になっていた。

あまりにも長い戦いだつたので途中はギャラリーの数は少なくなつていたが、最終問題である第五十問目が近づいてくるに従つてまた人が増え始め、第四十八問が終了した時点で部室に入りきらんぐらいまになつていた。ハーレムカツブル見たさにこんな遅くまで集まるなんてお前らはなんちゅう暇人やねん!!?と言つてやりたかつたが、その中には先生もいたのでそんな事は言えなかつた。

既に出題者である部長も、前の話からコスプレしているお嬢様怪盗も、スキップしていた間に不正解をやらかし、サブキャラなのに主人公ポジの某ゴーストスイーパーに扮した俺も、晴れの国の体育会系アイドルとなつた紗里も皆疲労困憊になつっていた。

「そ、それでは、参ります・・・第四十九問」

『第四十九問 JR線の中で全ての駅が同じ駅に所属している路線はう『ボーン』あれ、まだ問題の途中ですが・・・まあええか。それではどうぞ!』

「・・・内子線!」

答えたのはアルセーヌ・香里奈。ここで正解出来ないと敗退が決まるので彼女も賭けに出たんやろうが・・・あつ、ちなみにクイズ番組とかでよくある『最終問題ではボーナスポイントで逆転チャンス!』的なものは一切ありませんよ? 読者諸君は忘れてるかも知らへんけ

ど、これは本来、鉄道部の部長を決める厳正なクイズやからな？決して恋人同士の真剣勝負目当てに何十人も集まつて見にくるようなものではないんやで？

あつ、ちなみに回答は不正解。香里奈は真っ白になつて燃え尽きました。

「えー、まだ問題文は続いています。続きをどうぞ」

『第四十九問 JR線の中で全ての駅が同じ駅に所属している路線は内子線の他にもう一路線ありますが、その路線はどこか答えよ（ただし、他JR在来線との接続がない孤立路線は除く）』

成程、もう一路線を答えてたら良かつたんやな。それなら、思い当たる節がある……！

ローン

「さあ、白庭候補。これに正解すれば同点で最終問題に入ります！」

「えー、越美北線！これでどうや……」

「……」

・・・ピロピロピローン！

「正解！これで勝負は最終問題に持ち越されました！」

『ワアアアアア！』

俺と紗里。共に17ポイントで最終、第五十問目を迎えることに。

観客も帰る様子はなく、数時間以上続いた闘いの終わりを一目見ようと目を輝かせている。

「さあ、皆さん！最終問題です！」

「早くしろー！いつまで部室使つてんねん！」

歓声の中から周りの学生より低い声が響く。どうやらいつまで経つても俺らが帰らないので。他の先生が来たのだろう。

「あ、先生！これで最終問題なんでもうちよつとだけ待つてください！終わつたらすぐ帰るんで！」

「・・・5分で終わらせろよ！」

「えー、そんなわけなんで皆さん。帰る準備を始めといてください。次の問題終わつたらすぐに鍵を閉めてまうんで」

そう部長が言つて、いよいよ最終問題に入る。

『第五十問 この写真が撮影された路線を答えよ』

・・・なんやこれ？右側を走つてる・・・。

「？」

紗里もわかりかねている様子。とりあえずカミナリをくらう前にさっさと正解しどきたいんやけどな。でも、左側の線路は電車が走つてないんか知らんけど鋸びてんねん。これがヒントになるかも・・・これまで自分が培つてきた鉄道知識を総動員して考える。そし

て・・・一つの結論にたどり着く。

(もうこの答えや。この答えしかあり得へん・・・)

ボーン

「!?!?」

「さあ、これで最終問題！正解できれば第四十二代鉄道部部長となります！答えをどうぞ！」

観客の視線が一点に集まる。そして出した答えは・・・

そして、優勝者が決まって5時間以上続いたクイズは終了。先生に部室の鍵を返さないといけないのですぐに退出。流石にコスプレ（特に香里奈のやつ）で校外をほつつき歩くわけにもいかなかつたので、トイレで着替えを済ませて、今は部員全員で学校近くの公園にいる。「えー、第四十二代鉄道部部長就任おめでとう・・・平林！」

そう、さつきの問題に正解したのは紗里。これでリードを守り切つて18ポイントで見事、新部長に選ばれたのだ。

ちなみにあれわかつた人いました？正解は京都→木津間を走るJR奈良線。新田→城陽間で撮られた写真のようで、その区間は絶賛複線化工事中で新しく左側の路線を作つていたので右側を走つている風に見えていたと言う事らしい。

「まあ、何はともあれ、部長就任おめでとう」

「ええ、悔しいですけど、おめでとうござります」

「えへへー、ありがとつ☆」

「いやあ、激しい闘いやつたな」

「・・・はい。見てて楽しかつたです。特にあのコスプレ・・・あれつてせいy」

「ストップ。これ以上は怒られてしまう」

隆と圭人が触れてはいけない話題に突入しそうになつたので止めに入る。それを無闇に話すとこの小説自体がBANされかねへん。

「それじやあ今日はもう遅いし、これで帰りますか?」

「せやな、手続きとかはもう明日からじやんじやん始めるから」

「じゃあ、これで解散という事で」

そして、公園を後にして駅へと歩いていく。あー、疲れた。

第六十四話 「脳がおかしくなるバスつて聞いたことありますか？」

皆さんこんにちは！ 私ですよ私ですよ！ 朝潮香里奈でござります！

いつもは私の彼氏、総一さんの視点なんですけど、今日は私視点でお送りしますね。

：：それにしても作者さん、閑話でこの私を使つてくるなんて。これは後で『お説教』が必要でしようか？ 「ヒツ!?!？」異存ありませんね？ 「い、異議あ」あ・り・ま・せ・ん・ね？ 「イエスマム」よろしい。

メタ苦しい所をお見せしましたね。それじゃあ、行きましょう。

今、私は梅田から電車で二駅、阪神電車の野田駅にいます。というのも、昨日・・・

「回想」

「ふわあああ・・・眠いですね」

朝、私は淀川の車窓を眺めながら通学の電車に乗つていきました。ちなみに、朝の通勤時間帯の急行だけあつてめちゃめちゃ混んでいて私はいつも立席乗車を強いられます。最寄りである雲雀丘花屋敷始発は遅い普通ばかりなのでこれを使わざるを得ないです。ああ、通勤特急を雲雀始発にしてくれたらどんなに楽できるか！

電車は淀川を渡り終えて、中津駅を通過する。横には国道176号線が並走しているのだが、ここには気になるものが。

「そりゃあ、あのバス停つていったんなんんでしよう・・・」

そのバス停というのはシバスの標柱の横に立つてある青い標柱。他のシバスや阪急バスなどはよく見かけるんですけど、あのバス停を使っているバスを見たことが無く、最近になつて気になつていました。しかし低速とはいえ、電車は動いているのでよく見えなかつたが『中津』という文字だけは見えましたね。

その後、あのバス停は阪神バスのものであると知り、早速行つてみ

ようと計画。しかし・・・

「回想終了」

「うわあ、本当に少ないじゃないですか」

何と都心のど真ん中を走るバスなのに平日の運行は無し、土休日も16時10分の1本しか来ないのだ。これ、事前に総一さんに聞いてなかつたら詰んでましたよ。ただ、これでも昔は軌道線の代替として、昼間でも15分間隔で走る程のドル箱路線だつたらしいですが、その面影は微塵も感じられませんね。シバスの58系統も3月の改正で減便大阪駅に行きませんからね。まあ、その58系統も3月の改正で減便されているのですが。

しかも、その時に総一さんが『野田は阪神バスの大坂側の拠点(笑)』って言つてましたけど、これは言う通りですね・・・

周辺を散策した後、ベンチで待つていると、シバスとは違う青とクリーム色の塗装をまとったバスが入ってくる。

そして、私が待つてている3番のりばに滑り込み、表示を『天神橋筋六丁目』に変える。どうやらこれがお目当てのバスのようですね。『お待たせ致しました、毎度ご乗車ありがとうございます。中津から天神橋筋六丁目、天六行きでござります・・・』

乗客は私一人のみ。すぐに発車して阪神電車の本社前を通る。本社の前を通るくせに週1本しかこないなんて・・・。

ただ、途中乗ってきたのは大淀中五丁目で乗つたビジネスマンだけ。確かにこれでは免許維持路線になるのもやむを得ない感じがしてきました。

そして、16時20分、中津に到着。ここで唯一の乗客であるビジネスマンが降りてしまつたので乗客は再び私だけに。ここは阪急の線路が見上げる形で通つてるので非常にいい構図で写真を撮ることが出来るんですよ。勿論、一眼レフを取り出して撮るんですけど、

乗客がいないので気兼ねなく撮れるのが唯一の利点な気がしますね。バスはその後も大阪市街を走つていき、天神橋筋六丁目のバス停に到着。実は天神橋筋六丁目つていう住所はなく、シバスは天神橋六丁目と表記しています。意外なところで軌道線時代の名残が見えました。あと、仕切りに終点終点と流れていたので降りないといけないのか迷いましたが、そのまま乗ついても何も言われなかつたので大丈夫なようです。

ちなみに、天六ではご年配の夫婦が乗つてきました。同業者でもないのにこんな週二しか来ないバスに一体何の用があるんでしょうね。天六を出てからは少し違うルートを通つてからは、行きのルートとほぼ同じルートを通つて、野田阪神前へと戻つていきます。描写は省略。おんなじこと書いても仕方ないですよね？

そして、16時52分。40分かけて野田阪神前に戻つてきました。天六から乗つた夫婦も結局降りずにここまで來ました。運賃は『往年の名残』大阪特区内なので210円。普通の人からすればわざわざ金を払つて元いた場所に戻つてくるという交通手段としてはこの上なく無駄な使い方ですが、これも悪くないです。総一さんもう思つていたんでしょうか？

ただ、まだバス旅は終わりません。

私と老夫婦を降ろしたバスは数メートル前進して一つ前ののりば、2番のりばへ。

そして表示も『阪神杭瀬駅北』に。

ここからは『野田尼崎甲子園線』という別の路線になつて、越境して尼崎市の東の端つこ、杭瀬まで走る路線になります。ただ、この路線は出入庫運用の間合いなので土休日に1本、17時ちょうどの便しかありません。詳しくは第五十話に詳しく書いてるのでcheck it out!してくださいね。

こちらは乗客が2人『も』乗つてきますが・・・アツ、同業者ですね。一目でわかります。

そしてバスは私含めた3人の乗客を乗せて野田阪神前を出発。今日は日曜日なので、野田阪神のバスター・ミナルはおろか、大阪府内に一般の阪神バスがやつて来るのは6日後です。

しばらく走つていると、バスは淀川を渡ります。夕焼けが綺麗なんで、ついつい写真に収めたくなっちゃいますね。しかもこのバスからは週二しか押めない絶景・・・撮り鉄の血が騒ぐぜ。

淀川を渡り終えて、バスは夕暮れの国道2号を進んでいきます。一応、途中のバス停も7つあるんですけど、真下にJR東西線や、他のシバスも走つてゐるのに、こんな週二のバスに途中から乗る人なんてほとんどいないでしようからどんどん通過していきます。

ただ・・・この日は物好きがいたようです。野田から4つ目、『西淀川警察署前』というバス停で一人待つてました。シバスの標柱ではなく、阪神の標柱に並んでるのでこれに乗るようですが・・・

ブロー・・・ピロツ『次は神崎大橋、神崎大橋です・・・』

「!?!?」

あれ!?!? スルーしませんでしたか!?!? 待つてた人も『あれつ!?!?』つていう表情でバス見てましたよ!?!? いくら週二やからつて乗客を無視つて・・・

ただ、バックして戻るわけにもいかないのでバスは何事も無かつたかのように走つていきます。

そして、ついに橋の先に『兵庫県尼崎市』の文字が!

こちらは正真正銘週二しか押めない光景なので写真をパチリ。そのまま終点の阪神杭瀬駅北に着きました。時刻表を見てみると、ああ!何と1時間に3本も走つています!ずっと免許維持路線に乗つてたんで完全に脳がおかしくなっていますね。公共交通機関の大切さを改めて思い知らされました。

私と同業者を下ろすと、バスはそのまま回送になつて国道2号を西に進んでいきます。ちなみに7月末まではこのバスは車庫まで運行してたんですけど、何で杭瀬で切つちやつたんでしようか?空気輸送

するぐらいなら客扱いしたほうがいいのに。

そんな事を考えながら家路に就こうと杭瀬駅の改札に向かうので
した。

第十一章「巡れ！ケーハンデンシャ」

第六十五話「シマヘ、生まれたての空気（エア）詰め込んで」

朝が肌寒くなつて秋本番を感じさせるようになつた11月某日の6時半過ぎ、俺の姿は京阪京橋駅にあつた。

今日は体育祭の振替休日ということで平日の鉄旅をしてみることにした。えつ、いつの間に体育祭をやつたんやつて？ちょっと前にやつたんよ。決して作者が体育祭を描くのめんどくさがつた訳やないからな（棒）そういう行事はすつ飛ばすのもこの小説の特徴や、よう覚えとき！

そう言うが、まずは旅の必需品を買わねば。

そんな訳で向かつたのは改札機横の駅長室。まだ早朝だが既に駅員さんが中にいた。こんな早朝からご苦労さんです。

「すいません、フリーチケットつて置いてますか？」

「こちらでしようか？ 1300円になります」

「ああ、これです」

「ありがとうございました」

手に入れたのは『響け！ユーフォニアム』という宇治の吹部を描いたアニメとコラボした切符。5000枚限定の発売で、発売から既に2ヶ月が経つていたので大丈夫かと思っていたが、そんな心配は杞憂やつたようだ。

今回はスマホのアプリを使ったアニメのARラリーも開催されるのでこれにも参加することにした。

「おし、ほな行くか……つてあれ？」

改札機に切符を入れようとすると、あることに気付く。

「……この改札、IC専用ばつかしやん……」

何とズラリと並んだ改札機はそのほとんどがICカード専用。磁気券が使える改札機は僅かに数台しかない。他の会社は『IC専用』と書かれたステッカーを床に貼っていくところばかりだが、京阪は

逆に『きつぶ専用』と書かれたステッカーが貼られていた。一応言っておくが、ここは京阪で一番乗降客数が多い駅の一番大きい改札口なんですか？時代の流れなんやろうか。

ぐちぐち言つても仕方がないので改札に切符を入れていよいよスタート。

早速京都方面ホームに上がるのだが、まだ電車には乗らない。『腹が減つては戦ができぬ』っていう言葉があるやろ？まずは腹ごしらえや。

という訳でホーム上にあるアンスリーというコンビニへGOし、名物のフランクフルトを買う。早速食つてみるとケチャップなどがないにも関わらず味が濃く、それ自体がウツボ程の太さがあるので1本だけでも腹が満たされた。これで120円は素晴らしい。阪神のミックスジュースに並ぶおすすめやから是非食つてみてくれ。

そして一本目の電車、6時56分発の特急出町柳行きがやつてくる。

車両は8000系、ダブルデッカーの階上席に乗り込む。

電車は京橋を出ると複々線をスイスイと進んでいく。普段は乗らないだけに『おはようございます』のアナウンスを聞くのもまた新鮮だ。

そしてまず最初に降りたのは大阪府内最東端の駅、樟葉。

改札には多くのスーツ姿の企業戦士達が自分の仕事を果たすべくIC片手にゲートを通つていく。まあ、せっかくの一日乗車券なので改札を出てみる。しばらく歩いていると萌葱色のジャンパーに身を包んだ男性を見つける。

「日本進歩の会、長尾でございます。応援ありがとうございます」

「…」

彼の周りには『啖呵を切るより身を切る改革　日本進歩の会』のポスターが立てかけられている。

どうやら先日の衆議院選挙で勝つて、有権者の挨拶に回つてゐたいやううな。それにしても、進歩強かつたな・・・淀川の向こうの選挙区では最大野党の副代表が進歩の新人に負けたくらいやし。ちな

みに、香里奈のお父さんも旋風に乗つて大差で当選したらしい。
まあ、特にめぼしいところもなかつたので再び改札内に入る。

「そういうや、あれが出る時間やな」

次に乗るのは通勤快急中之島行き。

折角樟葉まで来たのに、すぐに都心に戻るという乗り鉄ならではの行為である。逆に鉄やなくてこんななんやつてたら俺でも引いてまう。

京阪は少し前にダイヤ改正を行つてラッシュ時の大幅減便を行つてゐるため、どの電車も大概混むのだが、この通勤快急は樟葉始発なので席は楽に確保できた。勿論、一番前のかぶりつきである。

7時38分に樟葉を出て、きた道をずっと戻つていく。枚方市、香里園と主要駅に止まるにつれて乗客数も増えていき、寝屋川市を出るときには人で6058号車はいっぱいになつていた。これを某知事が見たら絶対『密です!』つて言うやろな。

寝屋川市を出ると京橋まではノンストップ。通常の快速急行は守口市にも止まるので朝ラッシュの大坂方面行きだけのレアな経験である。

そんな通勤快急は京橋で満員の客の7、8割を掃き出す。立客はほぼいなくなり、何なら席も少し空き始めた。この電車は中之島行きである。

天満橋を出ると、さらに少なくなつて終点の中之島に着く頃の車内は6割ぐらいにまで減つていた。いやー、ここまでとは思わへんかつたな。ピークではないとはいえ、朝ラッシュでさえこんななんやから土日の昼間つてどんなんなんやろ・・・

一応説明しておくと、中之島線は2008年にできたばかりの路線で、当初は出町柳との間で快速急行が毎時二本運転されるほどの看板路線として注目されていたはず。でも、見事に大失敗して11年には早速、昼間の快速急行を捨て、みるみるうちに普通ばっかりになつて、今や土休日に至つては優等列車すらないという都会のローカル線と化してしまつた。

この路線のために作つたはずの3000系も現在、中之島線には一

切入線しない。

『シマへ行こう』のフレーズは一体なんやつたんやろうか。取り敢えず周辺を散策しようと俺は改札口へと向かつた。

第六十六話 「止まる」とのない快特に乗ろう」

中之島駅に着いた俺は改札を通つて外に出る。周りには高層ビルが立ち並び、行き交う人も黒やグレーのスーツに身を包んだ企業戦士ばかり。流石は関西随一のビジネス街である。

ただ、特に中之島に用はないので少し歩いて、そのまま駅まで引き返す。

ただ、通路を歩いていると思うんやけど中之島線つて内装がめちゃくちや凝つてんねんな・・・ホームは勿論、改札や出入り口とかも木をモチーフにスタイリッシュに仕上がつていて、街の雰囲気にあつてるし。同じ大阪市内でも、一どこの駅も大体同じデザインで入り口も雰囲気お構いなしのオレンジ一色の某赤字路線『今里筋線』とは大違いや。

・・・まあ、こんなに金掛けてんのに本線直通なし、普通オンリーの宇治線より客が少ないという悲しい事実があるんですけど。

そんなことを思いながらホームに降りると、既に電車が停まつていた。0806列車、区間急行萱島行き。9月改正で一本だけになつてしまつた全線走破の通勤快急の折り返しである。

車両は：・ほう、6014Fか。こらまたおもろい編成が来たなあ。

この編成は制御機器の関係で7000系に3両持つてかれた代替で作られた最終増備車（10次車）が組み込まれていて、この6014だけ『6000系なのに顔は7000系』なのだ。反対側の6064は普通のお顔なので、生まれた経緯こそ違えど、阪神の8523Fと同じような状態になつている。

なので、その逆の『7000系なのに顔は6000系』の車両（7004）も存在するのだが、今回は会えませんでした。ちくせう。

この編成は今や数少ない未更新車。折角なので写真をパチリ。あ、前パンカツコええわ・・・

これに乗つて次に向かつたのは二駅先の大江橋駅。

この駅で電車を降りて、向かうのは本線の大坂側ターミナル、淀屋橋駅。

実は大江橋と淀屋橋、次のなにわ橋と北浜は地上経由で徒歩連絡が出来るほど近く、定期券も相互利用が可能なのだ。

という訳で再び地上に顔を出し、淀屋橋を渡る。この辺りも大阪市役所の最寄りだけあつてビジネスマン達がせわしなく歩いている。橋を渡つてすぐの場所にある地下鉄の入り口から入つて、京阪の改札口へと向かう。

そしてホームに降りるのだが、お目当ての電車が来るまで時間ががあるので普段は鎖錠され、入ることが出来ない切り欠けホームの1・2番のりばに行つてみることに。

このホームは15年ぐらい前までは昼間もジヤンジヤ力使つてたらしげ、中之島線が出来たり、減便したりして使用頻度がどんどん減少。今は平日しか稼働しておらず、1番のりばに至つては4番のりばの邪魔になるためか、朝に一本しか営業電車の発車がないという。回送は何本があるみたいやけど・・・

そんな2番ホームに、ズラツと並んだクーラーキセでお馴染みの2400系が回送表示で停まつていたので、ちょっと観察してみると『2525』の車番を発見。

「・・・フフッ」（・▽・）ニヤニヤ

こういう語呂合わせが出来たり、ゾロ目の車番を見つけたりするとやつぱりにやつてくんねんな。

そんな事を思つていると、そろそろお目当ての電車がやつて来る時間なので4番のりばへ向かう。

そして、無人のホームに流れる通過メロディとともに3000系が入線。

客を下ろして種別表示と行先表示を変え、鳩マークを消す。代わりに現れたのは『洛楽』の文字。

そう、次に乗るのは9時10分発の快速特急『洛楽』。既に同業者がいて席取りに必死だったので、写真は撮れなかつたのはご勘弁いただきたい。

ただ、その席取りを制し、見事かぶりつき席をgetした。

3000系は運転室の前もクロスシートなので非常に前面展望がしやすい。個人的には一番いいと思うけどどうですかね？

そして9時10分、淀屋橋駅を出発。都心部は停車駅が続くので速度は高くないが、大阪側最後の停車駅、京橋を出るといよいよ洛楽の本領発揮。

この電車は京橋を出ると京都市内の七条まで32駅連続通過、要はnon-stop！で走るのだ。

電車は通常の特急だと全列車が停車する枚方市に差し掛かる。勿論通過である。

そして朝、通勤快急に乗った樟葉。ここも通過。

後でARラリーで立ち寄る宇治線の最寄り駅の中書島。通過します。

丹波橋も通過し、電車はいよいよ京都市内の中心部へと近づいていく。 東福寺を通過すると電車は地下に潜り、32駅ぶりの停車駅、七条に到着する。

ただ、この駅に特に用はないので一旦改札を出て、階段を上り下りして反対側、大阪方面のホームに向かい、再度切符を通して入場する。一日乗車券を使つてるからこそ為せる技である。

第六十七話 「歩け！ 天気を味方につけ」

七条で洛楽に別れを告げると、すぐに改札を出場。外の連絡階段で線路を潜つて反対側、大阪方面のホームに向かい再び入場。すぐにやつて来た特急に乗車する。

この間の七条駅滞在時間、僅かに1分半。一度も地上に出ることなく七条を後にする。

今日の最初に乗った特急（第六十五話参照）ではダブルデッカーの階上席に乗車していたが、今度はその逆、階下席に乗車する。
こつちはホーム床と同じ目線の眺望で、階上席とはまた違った雰囲気を楽しむ事ができる。

という事は、頑張ればホームのへりを歩いている女性のスカートの下をなg（そーくん？）・・・ハイすいません。

なんか脳内で紗里の声が聞こえた気がする・・・
そんな事を考えているうちに、電車は中書島駅に到着。ここからはこの駅から分岐する宇治線に乗車する。

車両は13000系のトップナン、13001Fである。

13000系は9年ぐらい前から2600系等を置き換える
ている京阪の最新鋭車両で、4・6・7・8両に組成可能、0番台は昔、幌がついていたりして、2600系との共通点が見られたりする。
最近はターゲットを5000系に変えていたけど、全車引退したから今後はどうなるんやろうか。先の減便改正で0番台と2200系は休車になつてこのまま自滅する可能性があるからな。果たして次は30番台か2400系か1000系か・・・いずれにせよ、卵形車体の寿命はそんなに長くはないな。

10時10分に中書島を出発し、一路南へと進んでいく。

観月橋、桃山南口、六地蔵、木幡と続き、黄檗駅に到着。

ここで電車を降り、一旦改札を出て踏切を渡つて反対側の改札に入場。

すると、目の前に二人の女性のイラストが描かれた立て看板が姿を表す。

これが今回の目的の一つである『響け！ユーフォニアム』のARラリーのスタート地点である。このARラリーは9月から開催されているのだが、月ごとにチェックポイントと景品となるARキャラクターが異なっていて、今回は加藤葉月、鈴木さつき、鈴木美玲の三人が描かれたARがコンプリート景品になっている。

本当は、主人公の黄前久美子のARをもらおうと、9月に行く予定やつたんやけど、その日は俺のクラス全員が強制居残りを食らったので結局断念した。あの時は先生を本当に恨んで、五寸釘でも打つたらうかと思つたからな。

その看板の前に立つて、スマホの専用アプリを起動。貼付されたQRコードを読み込んでいよいよラリーがスタート。その景品としてこの看板に描かれているキャラの一人、川島緑輝と先に話した加藤葉月が描かれたARを手に入れる。

今回のチェックポイントは三ヶ所。まずは緑輝と葉月が劇中に下校途中で立ち寄つた『羽戸山緑地展望台』に向かう。まあ、生まれも育ちも都島である俺にこの辺りの土地勘など無いに等しいので文明の利器たるスマホの知識を借りることに。

専用アプリの地図を見てみると・・・まあまあ遠いな。徒步十何分と言つたところやろか。

隣にはJR奈良線が並行していて、現在は絶賛複線化工事中。数分歩いていくとJRの黄檗駅が姿を表す。こちらには小さいながらバスターミナルも整備されているが、平日は一時間に一本、土日は半減とそんなに多くなさそう。一応、目的地の近くまで行ける250A系統というバスがあるのだが、なんと数分前に出発していた。これはもう歩けつちゅうことか。

仕方がないので道路を歩いて展望台に向かうが・・・

「あつっ・・・」

ここ数日は肌寒い日が続いていたので長袖を着ていたのだが、今日は打つて変わつて日差しが強い秋晴れ。しかも土地勘がない場所で距離感が掴めず、かなりのハイペースで歩いていた為、既に額は汗びつしより。

そこから歩き続けるのだが、京滋バイパス手前の交差点で右折すると何か坂道が見えてきた。まさかあれを登るんか？

で、そこから更に坂を登つて、階段を上がつて、やつとこさ目的地の羽戸山緑地展望台に到着。早速写真を撮つてチェックイン。

ピコンツ

すぐにチェックイン完了のメッセージが出てくる。これで第一ポイントはクリアした。

「あー、疲れた・・・」

ただ、ここにくるまでに結構体力を使つたので一旦ここで休憩を取ろうと決め、ペットボトルのお茶片手に二つある石のベンチの内側に腰掛ける。

「いやー、眺めええな。ここまで登つて來た甲斐があるわな」グビグビこの辺りは京都盆地の東端近くに位置していて、この展望台からは宇治の住宅街やはるか遠くには天王山も見え、非常に眺めがいいのだ。

ちなみにこの近くには劇中で主人公達が通つているとされる北宇治高校のモデルとなつた高校があるらしい。菟道高校つて言うらしいんやけど・・・ん？『菟道』つてなんて読むんやろ？気になつたので町名板を見てみると『Todo』と書かれていた。

あ、『とどう』つて読むんや。ずっと『えんどう』か何かつて思つたけどどう読むんやね。

新たな事を知つて、上機嫌になつた俺は荷物をまとめて、坂を下つて羽戸山緑地を後にするのだった。

ちなみにさつき話に出た菟道高校、一回行つてみようと思つたが、多分道に迷うし、今日は平日。そんな日に高校の前で高校生がうろうろしてたら絶対なんか言われそうなので今回はスキップすることに。次回は行つてみようかな・・・

第六十八話 「階段ない、でも諦めない」

羽戸山緑地の展望台を出て、俺は坂を駆け下りる。

次のチェックポイントは宇治駅周辺らしいがせつかくやし、一ヶ所追加で寄つてみることにする。

アプリの地図で大まかな経路を確認し、バイパスのアンダーパスに沿つて走る歩道を歩いていく。

それを渡り終えてしばらく歩いて、宇治川の方へと向かう道に入るのだが・・・

「あれ？ 確かここのはず・・・」

角の突き当たりには階段などなく、水道橋の設備があるだけ。

一応、階段もあるにはあるのだが、その前には立ち入り禁止の看板が掲げられた柵があるので、それを登るわけにもいかない。さてどうしたものか・・・

「ハア、時間は食うてまうけど、戻つて違う筋から・・・あ」

ふと見てみると、違う角から何やら土手のほうに向かう通路が伸びていた。ただ、土手に上がる階段も置石もない。まさか、土手を直接登れと・・・？

「・・・しゃあないか」

迂回路もかなり遠いのでとりあえず登る。あれ？ 思つてたより結構急やん？

「あ、あかん。これ足滑らしたらヤバいやつや」

足をかけても大丈夫な場所を手探りならぬ足探りで探すので時間がかかる。ただ、足を滑らせるとアスファルトに真っ逆さま。打ち所が悪いと大変なことになるので慎重に登る。

そして、1分半ぐらい経つて・・・

「ふう、着いた」

何とか土手の上の道路まで登り詰めた。時間はかかったものの、迂回路を通るよりはマシやったかな？

後、疲れたわ。ちょっと土手に座るか。

この土手は観光地である宇治橋からは結構近いのだが、住宅街の中

なのでとても静かである。きっとアニメの人物もここで癒されてたんやろか？知らんけど。

「そいいえば、今何時やろ・・・」

スマホの時計を見てみると時刻は11時2分を指していた。近くにある三室戸駅の時刻表は確認してへんかつたけど、さつき降りた黄檗駅の時刻表のパターンと所要時間から逆算したら、次の電車は・・・

6分ぐらいか！

「あかんあかん、急がな！」

急いで身支度をして土手を三室戸駅の方に向かつて走る。

それから土手を降りても重い荷物を背負いながら走り、三室戸駅に着いたのは11時6分前。

これを逃すと、次は15分後やからな・・・一駅とはいえ、楽して移動したい。

電車は俺のほぼ予想通りの11時7分に到着。これに乗つて終点の宇治駅へと向かう。

そして、電車は発車した・・・が。

『まもなく、宇治、宇治、終点です・・・』

あれ、もう終点？近くないですか？

まだ三室戸駅の駅舎が後ろにくつきり見えているのに、もう宇治駅のホームが見えてきてるんですけど。

これやつたらあんだけ走らんくても、宇治駅まで歩いても変わらへんかったんや・・・

（あー、疲れ損や）

そんなことを心の内で呟きながら電車を降りたのだった。

宇治駅を降りると、すぐそこに観光名所である宇治橋が見える。日曜とか祝日になると観光客とかがわんさかやってくるんやけど、今日は平日であるためか、人は少なめである。

そういえば、次のチェックポイントってどこやつたつけ……喜撰橋？

どうやら喜撰橋というのは、宇治橋の山側にある中洲に架かる朱塗りの橋で、劇中ではここで主人公の久美子は同じ吹奏楽部の塚本秀一に告白したという。ただ、振られたんやつて。5963。早速、10円玉の表の絵柄でお馴染み、平等院鳳凰堂への参道を進んでいく。途中、中洲の方に向かう道が分岐するのでそれを進んでいくと喜撰橋は目の前に。

スマホを出し、アプリを起動してチェックイン完了。これでARラリーのチェックポイントは残り一か所、さわらびの道を残すのみとなつた。

ただ、さわらびの道は地図によると喜撰橋を渡つてしまふしあるらしいので、この橋を渡ることに。

さらにもう一つの朝霧橋を渡つて宇治川の対岸に到着。

ただ・・・さわらびの道が具体的にどこの範囲からなのかが分からぬ。

なので、チェックポイントの反応頼りにしばらく歩いていくと、チェックインボタンが押せるようになる。

勿論、チェックインボタンを押して三つ目のさわらびの道をクリア。画面には『おめでとうございます！』のメッセージとコンプリート景品の加藤葉月、鈴木さつき、鈴木美玲の三人が描かれたARが贈られた。

「よーし、これで制覇や」

せつかくなので、このコンプリート記念のARを使って写真を撮つ

ておく。

それにもしても、このARの絵柄、どつかで見たことあんねんな…
そんな事を考えながら宇治駅へと引き返すのだつた。

第六十九話「楽しまなくちや、まだまだ乗り足りない」

「ハア・・・ハア・・・急げ！」

A R ラリーが終わって、ふと時計を見ると12時6分。これまた得意の逆算を使うと、次の電車が発車するまで後5分しかないことが判明。

距離的に考えても、走ればギリギリ間に合うのでこうして息を切らしながら走っているのだ。

そんな風に無我夢中で走り続け、やつとのことで駅前のロータリーに到着。しかし、あと1分しかない！

「ヤバいヤバい、急げ！」

歩行者用の信号が青に変わる時間も惜しい。俺は車道の信号が赤に変わるために合わせて再びトップギアで走り始める。フライングである。これ、大阪駅の横断歩道でやつたら他にもフライングする人は若干おるから目立たへんけど、こんなどこでやつたら目立つのは必至。

ただ、この11分発を逃すと、次の電車が来るまで16分も待たねばならない。もう信号を待つ時間さえ時間も惜しいのだ。許してクレメンス。

そんな成果もあつたのか、発車メロディーが鳴る中、メロスがどこの刑場にやつて来たようなスピードで車内のスライディング。

それに合わせるかの「ごくドアが閉まつて電車はゆつくりと動き始める。

「ハア・・・な、何とか、間に合つたあ・・・」

動き出した電車の中でゼエゼエと息を吐く。今絶対ひどい顔してるやろ？きつとアヘ顔ダブルピースみたいになつとるんやろな。

そこから人がまばらな席に座つて息を整える。何駅か通つた頃にはだいぶ息が整つて來た。

『中書島、中書島、終点です・・・』

そして、電車は中書島に到着。降りる際に、ふと、乗つていた13001Fの前面を見ると、ヘッドマークが掲げられていた。そういえ

ばこれって・・・

「あ、あれやつたんや」

そう、このヘッドマークはARラリーのコンプリート記念のARと同じデザインだつたのだ。

成程、どうりでどつかで見たなつて思つたんか・・・

モヤモヤが一つ解決して、今度は再び本線を北上する。

ホームで待つているとやつて来たのは12時17分発の準急出町柳行き。

こいつで次に向かつたのは伏見稻荷駅。

伏見稻荷の名称から分かる通り、お稻荷さんの總本社で、世界遺産の伏見稻荷大社の最寄駅である。

ただ、時間の都合上、本殿の方までは回りきれない。今回は京阪線を乗り潰す旅なんやから、神社に行くのはまた今度や。

なので最近リニューアルした千本鳥居をイメージした駅舎の写真だけ撮つてすぐにホームに入場する。

そして後続でやつて来た同じく準急に乗るのだが、一駅先の東福寺で意外な乗客が乗り込んできた。

(え？何で警察の人がこんなところに・・・)

そう、乗つて来たのは京都府警の警察官の方々。ちゃんと制服も着ていて、階級バッジは銀地に三本の金色の線。三人全員巡查部長のようだ。一体わざわざ電車に乗つて何をしに来たんやろか？尾行やつたら絶対私服で来るし、物を届けるにしてもパートカーで来るもんやないんか？それとも、落とし物の回収にでも來たか・・・

まあ、それを聞くわけにもいかないので、今となつては真相は闇の中だが。

ちなみに、余談だが警察官は制服を着ていたり、警察手帳を提示すれば公共交通機関をタダで使えるらしい。勿論、公務中に限つて。普段使いでやられたら会社側は溜まつたもんやないからそら当たり前の事やけど。

そして、電車は本線の終点、三条に到着した、ここで後からやつてきた特急に乗り換える。それにしても、あの警察の人、結局何しに電

車乗つてたんやろ。

それは結局分からずじまいやつた。

電車は、あつという間に終点の出町柳に到着。まだ結構急いだおかげで時間に余裕が生まれたので、周辺を観光する事に。

「それにしても、バス多いな」

今、出口に出る途中で見つけたバスの路線図を見てるんやけど、結構いろんな行き先があるな。上賀茂神社や北野天満宮など京都市街地の名所に向かうバスもあれば、大原などの市街地から離れた観光地へと向かう路線、そして朽木……ん？ 朽木？

俺はその地名に引っ掛けた。

「こつから朽木つて……相当遠いで」

というのも、朽木は京都市どころかそもそも京都府内ですらなく、滋賀県は高島市にある旧鯖街道の宿場町やつたはず。

調べてみると、どうやらこの朽木行きのバスは冬季以外の土休日の午前中に一往復だけ運転される路線らしい。総距離は44.3km。これは、ほぼ阪急京都線の大坂梅田～京都河原町間に匹敵するというすごいバスやつた。今度乗りに行こうかな？

その後は、鴨川デルタを見に行つたり、上賀茂神社に参拝に行つたりと出町柳を少し散策してまた駅へと戻ってきた。

それでも思つたんやけど、やっぱり京都つてアニメの聖地多いな。

商店街を歩いてたら至る所に『たまこまーけっと』だの『けいおん！』だのポスターとかが貼つてあつたし。何で日本のアニメつて大体舞台が京都と東京ばかりなんやろ。大阪が舞台のアニメを見てみたいな・・・

時刻は昼の2時20分過ぎ。

そろそろ、今回の旅の最大の目的がやつてくる時間が近づいてきた。

第七十話 「P r e m i u m C a r s」

出町柳の駅に戻ってきた俺は改札を通り、らずにその横にある駅長室に入る。

その目的はただ一つ……今回の改正で新しく登場した快速急行のプレミアムカーに乗るための指定席券を買うためである。

プレミアムカー券の購入方法は会員登録した上でネット上で予約する方法、キヤツシユレス決済専用の券売機で購入する方法、駅窓口で買う方法の三つがあるが、今回は駅の窓口で買う方法を選択した。やっぱり初めては対面で買ってみたいという思いもあつたんや。

「すいません、プレミアムカーのチケットを買いたいんですけど」「プレミアムカーですね、どの列車をご希望でしょうか?」

「35分発の快速急行で、淀屋橋までお願ひします」

「35分発ですね。お席はいかがなされますか」

言つて駅員さんが座席表を持つてきて、座席をどこにするか問うてくる。

「えっとですね……7Cお願い出来ますか」

「かしこまりました。それでは発券いたします」

俺の希望を聞いた駅員さんは奥の方にあるなんかの機械に端末で情報を打ち込んでいく。数秒後、京阪特急の象徴、鳩マークが地紋になつてているピラピラのレシートみたいなやつが出てきた。まさか、このレシートがプレミアムカー券?

「500円頂戴いたします」

「あ、はい」ジャラッ

「ちようどお預かりします、ありがとうございました」

俺は代金を支払い、そのピラピラを受け取つて駅員室を後にする。なんか予想外やつたな、JRのマルス券みたいにもつとしつかりした紙なんかなつて思つたら普通にレシートみたいなやつやつたわ。個人的には折角のプレミアムカー券なんやから、券の材質もプレミアムにすりや良かつたのに。

電光掲示板には既に先発の欄に快速急行の文字が表示されている。

もう半やし、ぼちぼち来るやろ・・・

♪♪『まもなく、2番線に電車が到着します・・・』

おつ、来た来た。

放送が流れると、本日のお目当て、14時35分発の快速急行が引き上げ線から姿を現した。

車両は3000系のラストナンバー、3056編成。

早速写真を撮つてみる。

うん・・・やつぱり3000系には快速急行が一番似合うな。種別幕の色と車体のエレガントブルーの色がマッチしてるわ。

惜しむらくは、真ん中のディスプレイになんも写つてないってことやな。流石に『快速急行』に『特急』の象徴は荷が重かつたか・・・。写真を撮り終わると、プレミアムカーが連結されている6号車へ。全体的に青色が広がつて、乗車口には金の市松模様があしらわれるなど、他の7両とは明らかに異なる見た目で、特別そうな感じが目に見えてわかる。

しかも特筆すべきは側面の行先表示器。

従来の車両や、先に登場した8000系のプレミアムカーの表示器はLEDが使われていたが、この3000系のプレミアムカーのはそれよりもめちゃくちゃ画質がええ。挿絵見たらわかるやろ?

というのも、この表示器はガラスの中に極薄のディスプレイを組み込むという世界で初めて鉄道車両に取り入れられた技術を使用していく、光の反射が少ないので、最新スマホの画質並みにクリアに映るのだ。

早速車内に入ろうとすると、入り口でプレミアムカー専属のアンダントが丁寧にお辞儀をして迎えてくれた。

そして、車内に入ると・・・

「うわー、やっぱすごいなあ」（小声）

そこには2+1列のシートがずらりと並んでいた。俺は進行方向左側の中程、7C席に座る。

数分後、電車は定刻通りの14時35分に出町柳駅を出発。平日の昼間で京都中心部から少し外れた始発駅だけあって、俺以外誰も乗つてこなかつた。

その後、三条ぐらいからはこの車両にも人が乗り始めるが、それでも席が少し埋まつたぐらい。

まあ、静かに眺めを見られるからええんやけど。

それからしばらく、淀の手前あたりでアンダントが両手に何かを持つて通路を歩いてきた。どうやらプレミアムカー限定グッズを売りにきたらしい。

ただ・・・

「たつかいな・・・」

1000円ぐらい今までやつたら買おうかなと思つたが、一番安いキーホルダーでも1500円もするらしい。

財布の紐が硬い俺は買う気にはどうしてもなれなかつた。

その後、大阪府内に入ると少しづつ6号車を使う人も増え始め、守口市を出た辺りでは半分ぐらいが埋まつていた。やつぱり快速急行でもプレミアムカーの需要はそれなりにあるみたいや。

そして15時34分、終点の淀屋橋に到着。約一時間のプチ贅沢が終わりを告げた。

第七十一話 「(休符)」

淀屋橋に到着するとすぐに車外に出されてしまう。俺は全線のフリーチケットという有効な乗車券を持っているので別にこのまま車内にいても何ら問題はないのだが、こういうクロスシートがついてたり、特別な車両が連結されていたりする様な車両だと車両整備の名目で一旦車外に放られてしまうのだ。これは阪急の9300系とかも一緒やつたはず。え? 8000系の8004F~8007F? 知らない子ですね。そんな話は置いといて、中では丁度乗務員の操作で一斉に車内のシートがバツタバツと進行方向に方向転換しているところだった。

そして、再び扉が開く。今度は15時38分発の特急出町柳行きとして再び京阪間を駆けずり回る事になるのだ。

そして、そのままその折り返しの特急に乗車して次に向かつたのは枚方市駅。

多分、せっかく来たのに来た道戻るつて淀屋橋まで行く意味はあつたんかなんて言われるやろう。まあ、気にするな。

というのも、京阪の中でまだ乗つていらない路線があるのだ。もう枚方市に行つた事から察しとすると思うが、交野線である。

交野線は枚方市から南へ一直線に下つていき、私市までを結ぶ路線。はるか昔はその先の清滝峠をぶち抜いて生駒まで延ばす計画があつたらしいが、おじyanになつて、結局バス連絡になつたらしい。

交野線ホームに入ると、すでに電車が止まつていた。車両は10000系、元は支線専用の形式やつたはずやのに、何故か他の8両編成から1両づつぶんどつて7両編成で本線を闊歩しているアソイツである。その為、支線で見る機会は以前よりは少なくなつている。

16時2分に枚方市を出発。最初にカーブこそあるものの、そこから先は終点までほぼ一直線に南下していく。伊丹線にそつくりやな。

そこから特に書くようなところはなく、14分ほどで終点の私市駅に到着。

ちなみに、これで『きさいち』と読む。大阪にはたくさんのが難読駅

名があるが、ここも相当やろう。

そういえば、こつから生駒の近くまで下れるバスがあるって聞いたけど・・・

三角屋根の特徴的な駅舎から少し歩いた国道にバス停があつたので見てみると・・・

「あらう」

掲示されていた時刻表には10時39分発と16時9分発の二本しか書かれておらず、しかも、平日の運行はない。

しかし、俺の興味は本数ではない。

「田原台つてどこや・・・」

田原台という耳馴染みのない地名に気が向いていた。

調べてみると、田原台というのは清滝峠の先にある住宅街で、住所こそ大阪府四條畷市だが、地理的に生駒との結びつきが強く、市外局番は一部を除いて生駒市と同じ番号、バスも生駒駅からの奈良交通の方が1時間に4本と圧倒的に多い。四條畷からのコミュニティバスと合わせても足元にも及ばへん。

まあ、峠を隔てるから当然と言つちやあ、当然なんやけど。

ちなみに、最初で言つた生駒までの直通バスは奈良交通が東生駒まで出していたらしが、もう2000年台初頭には既に廃止されていたらしい。

ただ、ここから先に進めず、周辺をぶらりと歩いても、これといったものはないので駅へと引き返す。

「次、何分やつたつけ・・・50分?」

どうやら気付かないうちに電車を逃していたらしく、13分待ちをくらうことになつたようだ。

そして、少し待つてやつてきた電車で枚方市まで戻り、17時8分発の準急でラストスパート。本当はもうちょっと乗つてたかつたが、どうしても外せない所用があるのでやむなく断念し、守口市で下車する。

そして、徒步でシバスのバス停まで行つて、帰宅の途につく。なんやかんやあつたけど、充実した日を過ごせたな・・・明日から頑張ろ

か
。

第十二章『K O B E で あ い ま し ょ う』

第七十二話「次元の壁を飛び越えて」

『ステーション・メモリーズ!』

音声が流れ、色とりどりで様々な意匠の衣装……フィルムをその小さな身に纏つた少女達が映つたタイトル画面が現れる。

『ステーション・メモリーズ』……通称『駅メモ』。2014年に配信されたゲームで『でんこ』と呼ばれるキャラクターを集めてGPS機能で全国各地の駅を訪れ、他のプレイヤーと競い合う位置情報ゲーム……原理としては国盗り合戦に近い。

そしてそれを眺めるのは、これからやつてくる夏の季節に備えた半袖シャツに身を包む男子高校生……

どうもどうも、長堀学園2年3組出席番号28番白庭総一でござります。

えつ、半年間どこで何してたんやこの野郎つて？

話すと長くなるよ？それで一話潰れるよ？まあ、あとがきで書くから勘弁してえな。

「独り言がうるさいです！」電車の中ですよ？」

「そーだよ（便乗）」

「いやおめーらも大概やからな？」

そしてそれに便乗する俺のツレ、名家出身のお嬢、朝潮香里奈と熾烈な鉄道クイズの末に降臨した我らが鉄道部のボス、平林紗里。

「全くもう……半年のブランクがあつてもマスターは変わらずお調子者ですね」

そして……えつ？もう二人の紹介終わつたんやけど。

「二人共、何か言った？」

「いいえ（いやあ）」

「あれえ？おつかしいなあ……」

「マスター！ここです！ここ！」

「いやなんか聞こえるわ。どつから聞こえんの？」

乗っている電車の中を見回しても、両隣の二人以外に声をかけている人の様子は見られない……つてか、マスターって言つてへんかった？まさか……いや、まさかな。

「見下げてごらん♪」

「ん……うわっ！」

声のする方に視線を下げるが、そこには額の部分に何かの社章みたいなものが貼つた巫女衣装の女の子が画面に向こうに向かって両手を大きく振っていた。

「マスター！ やつと気づきましたね！」

「えつ！ しゃ、喋つとる！」

画面の中にいる少女はマスターたる俺の動きに反応する。そんな機能は無かつたはずなんやけど……

「マスター？ どこぞのグランドオーダー？」

「違います。『駆メモ』ですよ……つて、このキャラ！」

「おつ、気づいたか。こいつはな……」

「ああちよつと待つてください、私が紹介しますから！」

画面越しに少女が制止して……うん？ 何で画面の端に手を掛けてんの？ おいおいまさか……

「よいしょつと」

何と、次元の壁を飛び越えてスマホから飛び出してきた！ 某めだかの師匠もビックリ！

「「うわっ！」」

「私の名前は北神弓子、神戸市営地下鉄北神線のマスコットキャラクターです！」

「北神……弓子？」

「違います！ 『ゆみこ』じゃなくて『きゅうこ』です！」

そう自己紹介した少女……弓子が紗里の間違いを指摘する。

「ていうか、これつていつ手に入れたんですか？」

「弓子は普通は手に入らへんキャラなんやけど、復刻ガチャで手に入れてん。3500円……（泣）」

「3500円……確定ガチャの方を回したんですね」

「まあ、ピックアップ一人だけやし……」

何千円払つて出ませんでしたより3500円で絶対出る方が安い
やん?

「言われてみれば」

「確かにね、ていうか弓子ちゃん忘れてない?」

「もう、ひどいですよマスター!」

俺達に忘れ去られていた弓子が頬を膨らませる。うん、怒ってるん
やろうけど、掌サイズつていう彼女の大きさも相まって可愛く見えて
まうわ。

「すまんすまん弓子、わざわざリアルの世界まで出てきてどうしたん
?」

「いやー、なんかGPSで阪神本線を通つてるつて情報が入つたんで
すよ。折角神戸に行くならつて事でスマホから出て来ちゃいました
♪」

などと話す弓子。えつ、そんな気軽に出て来れるもんなん?

「スマホから出て来たつて……」

「そーくん、フィクションなんだし気にしちゃダメだよ?」

『三宮、神戸三宮です……』

「ほらほら、もう降りる準備しなきや」

「さあ行きましょう、トンネルの向こう側へ!」

ドアが開くと三人が一目散に出て行く。俺もそれに続くのだった
……。